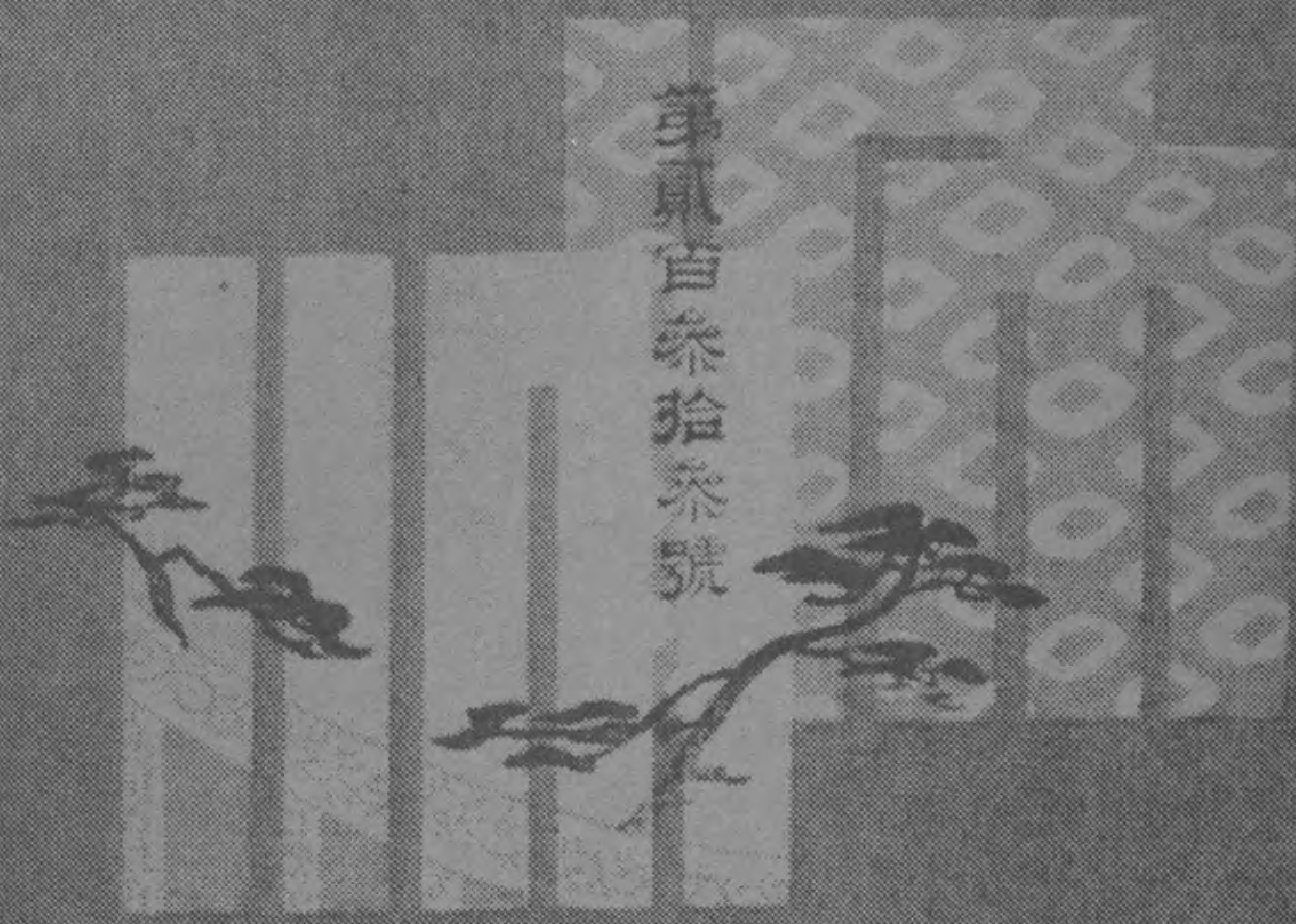
〔毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年五月十二日第三種郵便物認可〕

明治三十四年七月二十日發兌

女鑑



女鑑第貳百叁拾叁號

目録

題字……細川男爵

口繪……高橋松亭

挿畫……同人

定價 一冊金拾錢 六冊三ヶ月分金五拾五錢 十二冊半年分金壹圓 全國無遞送料

明治三十四年七月十九日印刷
明治三十四年七月二十日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
印刷人 並木艮雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地 靜思館（電話本局一千三百七番）

函嶺之溪流



天道
助順

女史箴語

鋼潤次郎録

如何に暑中休暇を利用すべきか

飽食暖衣して徒爾に過さむよりは、博奕だに爲よといへり。博奕は、人として爲べからざる惡事なり。其の惡事すら、猶、且、彼の飽食暖衣のみして、何事をも爲ざるには勝れりといふあり。毫末も、博奕をゆるすの意あるにあらず。たゞ、この醜惡を擧げて、他の弊を戒飭するの意を深うせむとするに過ぎず。

暑中休暇は來りぬ。勿論、たゞ、暑を避けて涼を趁ふのみの不可あるが如きは、又更に喋々するを要せざるべし。如何に、この休暇を利用すべきか。これ、學校生活にあるものは、男女をすべて、みな、刻下の急問題とする所あるべし。ひとり、學生のみならず、最愛しき子孫をもてる親々、愛らしき弟妹を有てる人々は、ひとしく、この問題に對して考慮せざるものなからむ。況んや、老幼子弟の保護者たり、敎育者たるの大任を負へる一家の主婦たる人は、一層、この問題につい

て焦慮せらるゝなるべし。

果して、如何に、この暑中休暇を利用すべきか。また、如何に、この暑中休暇を利用せしむべきか。學校といふもの設けられしより、年として之の暑中休暇なきはなし。而かも、其の間、一年二年のみならず、十年をすぎ二十年を越え、將に三十年にも近かむとす。暑中休暇についての經驗、乏しといふを得ざるべきなり。然れども、從來の實蹟に徵すれば、多くは、利用せられずして、寧ろ、害用せらるゝが如し。或者は、拘禁を脱せし狂者の如く、自恣放縱のかぎりを盡し、折角、學校にて鍛錬し得たる秩序ある規律正しき擧止の、おもかげをだにとゞめずなり、或者は、理會しやすくして喜ばしからざる誘惑を與ふべき書籍に耽りて、精神の墮落を招ぎ、或者は、ひたすら午睡をのみ貪りて、身體の攝養を遺る。これ等は、其の害用の最も、甚しきものを擧げたるものなれども、猶、如何に利用すべきかに先ちて、まづ、能く、之を害用せざらむことに注意せざるべからず。

益軒翁、旅行の樂を記して、

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じ

おこし、鄙吝をあらひすゝぐ助となれり。是も、亦、我が徳をすゝめ、知をひろむるよすがとなるべし。

また、いひ知らぬ靈境にゆきて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其の里人にあひて、其所の風土をとひ、あるは、おくまりたる山ふところに、いはねふみて、尋ねいり、もとより、山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりある人は、心をとめて、歸ることをわすれぬ。あるは、海べた、山遠き眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもまされり。また、其の里におひ出でたる名產の異なる品を見て、其の味をこゝろむるも、いとめづらしく、心なぐさむわざなり。すべて、勝地にあそびて、見きゝせしこと、たゞ、一時の耳目を悦ばしむるのみあらず、幾年へぬれど、其の時、見聞せしありさま、老の後まで、をり〳〵思ひ出でられて、あたかも、其の時、見聞せし思をなして、樂むべし。是を以つて、世に、めでたきことを、思ひでといふも、うべなるかな。

といへり。炎暑燬なる時、身は火爐のうちに投せられたるが如く、全身汗に塗れ、おのづから氣力も弱りて堪へ難き折には、實に、この旅行に若くべき樂はあるま

じ。況んや、交通機關、日々に調りゆきて、旅行の樂をまし缺點を少うしつゝあるに於いてをや。たゞ、わが榮華の程を示さむの小功名にかられて、大磯、熱海と、人の多く赴くべき地を擇び、求めて身を熱鬧の地に置かむとする、彼の、あはれむべき避暑旅行者の如きは、固より、この高尚なる利益と樂とをかたるに足らず。其の他、學校に於いて、主として與へられたる理論について、この際、應用の手段を講究せしむる等も、亦、必要とするところなり。しかしながら、一家族間の關係、健康の程度等によつて、其の利用の方法を講ぜざるべからざるが故に、吾人は、今こゝに、一々擧ぐるに堪へずといへども、何れの方法にしても、總べて、身體の慰安を得むとするよりは、精神の慰安を求むるを主とせざるべからず。精神にして、安靜健全なることを得むか。身體は、おのづからにして、健全なることを得べし。而かも、貴賤老弱等の情實に羈束せらるゝの憂あることなし。この目的にして、若し、同意を得ば、利用の手段方法のごときは、自己のために、或は、其の責務のために、誠實なる注意を以つて、最も善良なるものを撰擇すべきことを希望しおかむのみ。



男女教育の差異を論ず

細川潤次郎

女子教育の必要なることとは、別に、深遠なる道理を講究せずとも、自ら明白なるべしと思はる。人に由りては、種々の説をなす者あるべけれども、余は、簡單なる一言を以て、之れを蔽はんとす。蓋、男子と、女子と同じ人類なり。男子の教育、已に、必要と認むる上には、女子の教育必要にあらざる謂あるべからず。若、男子には必要にして、女子には、必要にあらずといはゞ、則、これ、女子を、人類より排斥したる者と謂ふべし。但、教育は、男女共に必要なることなれども、必要の程度は、男女に由りて、同じからざる所あり。男子は、首として外事に當り、殊に、官人となり、軍人となり、諸種の工藝に從事するが如き人は、高等専門の學科を修めざるべからず。而して、女子は、専ら、内事を治むるを以て、普通の學科を修めて智識を開發し、讀み書き計算女工等の事に習ひて、家政を執るに差支なきを以て足れりとすべし。才力餘あり、資力も亦豐なる女子に在りて、固より、高等専門の學科を修むるを妨げざるのみならず、或は、稱讚すべきことにもあるべけれども、之れを尋常一樣の女子に望むべからず。是故に、學科の高低を以て論ずるときは、女子は、男子の如き程度に達することを得ざるべし。此れ、決して、恥づべき事に非ず。女子の天職、之れを、して然らしむる所なり。天職とは、女子の嫁する

こと、男子の婚するよりは、率ね、數年を早くするを以て、已むことを得ず、年限を節縮せざることを得ざること是なり。女子、已に、嫁するときは、其の内政を執るを以て、概して、教育に從事するを得ず。子女を擧ぐるときは、殊に然りとす。偶、嫁したる後と雖も、女子養育の煩なくして、教育を受くる人ありと雖も、此れ、固より、例外にして、普通の事に非ざるべし。故に、女子教育の程度の、男子教育の程度より低きは、年限を節縮して、天職を全くする所以にして、恥づべき事に非ず。而るに、此の如き、比較的に短縮なる年月に於て、普通の學科を修了せんとするは、容易の業に非ず。男子ならば、年限長きを以て、時に、怠慢の事ありと雖も、之れを補塡することを得べく、しかのみならず、卒業の後、猶、教育を受くる時機なきに非ざるも、女子、人に嫁して子女を養育するに方りては、哺乳撫育の爲、夜間と雖も、安眠することを得ざるべし。豈に、教育を受くるに遑あるべけんや。然らば、則、女子の教育に於ける、拮据勉勵して、一日も一時も閑過すべからずして、比較的短時間に於て、終身受用すべき必要の事件を練習せざるべからず。其の用心の油斷なきことは、一層も二層も甚しき者なり。女大學に、女子は生長して他人の家に嫁する者なれば、男子よりも、親の教大切なりと曰へることあり。余は、此の語を引用して、今言ふ短時間に、終身受用すべき必要の事件を練習することに適用せんとす。此の點に付て論ずるときは、女子の教育は、男子よりも苦き所あり。然るときは、學科の程度に於ては、女子は男子より易き所ありて、勉勵の程度に於ては、女子は男子よりも難き所ありと心得て可なるべしと思ふ。

國語學につきて

（國語漢文專修會臨時講演に於ける演說の速記）

大宮兵馬

今日、私に、國語に關する話をせよと云ふ事でござりますが、私は、此迄、國語の學說上の事に就き、又は、書籍上では、多年講義などもして居りますが、斯ういふ場所に出で、演說などすることは、極めて稀れな事でございます。……此れから、暫時の間、私の考を述べて、諸君の御耳を汚さうと思ひますが、甚だ、不辯舌なるが爲めに、その主意の在る所を、御聞きに達し得べきか否かと氣遣ひます。前刻から、段々と辯士が立ちかはられて、殊に只今は、鳥尾子爵の、十分高尙なる講說が御座りました故、その跡で、私などがお話をしても、一向映えない譯で御座ります。……たゞ、暫くの間諸君の御淸聽を煩はします。

先、今日の國語學、殊に、普通の國語科に就いてお話を致します。諸君は、既に御承知であらうが、順序として、その前に言はねばならぬ事がある。國語といへば、其の國の言語、即ち上古より今日まで國民一般に使用せらるゝ言葉でありて、亞米利加には亞米利加國民の言語があり、獨逸には獨逸國民の言語がある。これらの國語は、其の國の始まつて以來、其の國民の體格性質に伴ひ、或は土地氣候風俗に伴ひて、起つて居るものである。それ故に、國語は、其の國々に依つて、性質と成立とを異にして居る。亞米利加の學者ホウイットニーの語に、「言語は人の自然なり而して人は單に言葉の所有者なり」と言つて居るが、如何にも、言語については至當のことである。彼の自然界なる鳥を見ても、鶯には鶯の啼聲があり、目白に

は目白の啼き方がありて、其の生れつきたる性質のまゝに啼れで居る。日本國民の言語は、吾々の啼聲であつて、此の國始まつて以來、氣候風土に伴うて、吾々の體格性質と共に變遷し發達して、今日に至つたものである。鳥の中にても、百舌鳥といふやつは、他の種々の鳥の啼き眞似をよくする故に、其の聲に特得の妙所がない。可笑しき話ぢやが、私は明治十五六年の頃に、始めて東京に上り來て、當時上二番町の或屋敷に居ました。其の屋敷に、麴町の飛人足の頭なる金次郎といふ者が出入してあつたが、其の頃は、今日よりも火事が多くて、夜毎に三四度も半鐘が鳴る。鳴ると、やがて飛人足がキヤリ聲をかけて出る。それをきくと、田舎出の私には、珍らしう勇ましう思はれし故、習うて見たくありて、彼の金次郎に、あれを一つ教へて貰ひたい、傳へてくれよと云ひしに、お前達の樣な、田舎者に覺えられるものかといふて、はねつけた。そこで、私も負けぬ氣で、習はいでもあれ位の事は出來るといつたれば、さうでない。田舎から出て來た物は、田舎聲だ。其の子の代でも、まだ聲が田舎嗅い。孫の代にならねば、あの聲は出ぬ。中々五十年や六十年であれが出來るものかといつた。その當時は、江戸ッ子の負けぬ性の事を言ふやつぢやと聞流して居たが、今思へば、それに相違ないと、始めて合點がいつた。日本に四十年も來てをつたフルベッキといふ人がある。演說に、說教に、其の辯舌は自由なものである。日本に逗留した間が四十年だから、我々が生れぬ先から來て、我が國語を使用して、懸河の辯で話して居る。然れば、其の言語は、純粹の日本人の發音かと云ふに、さうでない。西洋人が日本の言語を眞似て使つて居るといふことは、誰に

でもよく譯る。又、大學の御傭教師チヤンブレンにも出合つて話した事がある。これも、よく日本語で話すけれども、矢張り、外國人の音たるを免がれぬ。其の他ブラックといふ落語家がある。話を賣るほどの達辯なものなれども、其の音は、外國人の口調を免がれぬ。人が喜んで聞きに行くのは、外國人で日本語を話すから、音調の變つた所が面白くて、行くのである。明治の初年に、宮内省に勤めてあつた近藤芳樹と云ふ歌文の先生が、歌に就いて書いた寄居歌談といふ事の、中に、一寸奇妙な話がある。日本人が、支那の詩を眞似て作るのは、三味線の音を聞いて太皷の音と間違へる様な、大なる間違はないが、その音を琴の音と間違へる位の事は免かれぬ。其の國にうまれて、自然の遺傳がないと、ドウしても音語の自然の音調を得ることは出來ぬものぢやと言つて居る。これも、以前、何にの氣なく讀んだが、今日で念へば、實にさうである。詩などは謠ふ様に作らねばならぬ。人に物を云ふにも、目出度時と悲しい時とは、その言語よりも、音聲の調子に緩急長短の差別がある。其等の點よりいへば、余所の國の言語は、中々、五年や十年で學び得らるゝものでない。今日聽講の諸君の中には、東の國の方もあらう、西の國の方もあらう。諸君は、暑中休暇などに、その故郷なる岡山あたりに歸らるとすれば、その滊車で行くのに、名古屋邊までは、乘合の客に關東の人が多い。それらの人は、陽氣で活潑な音を發する。岐阜を越えて近江路にかゝると、乘りかへたる人の言語が追々悠長になつて來る。發音が緩かに陰氣になる。京都大阪を經て彼方に行くと、また段々音聲が代つて來る。畢竟生れつきたる土地の音聲は、容易には變るものでな

い。さて、一歩一歩と進むほどに、故郷に近ついて、其の言語を聞けば、親戚故舊などの事が思はれて、なつかしいといふ心が、いよ〳〵切になる。さて郷土に這入つて見れば、人々が、我が兒童の時から聞きつけた言語を以て、話して呉れる。向ひの山を見ても、あちらの河を見ても、兒童の時に遊んだ時のことなどが思ひ出される。山や河の名が思ひ出されるも、わが兒童の時から、心に覺え込んで居る言語の媒介に依るのである。かくて、郷里を愛する念慮は、みな言語の媒介によりて起る。洋行した人の話に、外國にある間は、彼方を向いても此方を見ても異種の人で、本國の人には容易に出會はぬ。日曜日などに、公園に行きて見れば、多くの人の中には、彼は朝鮮人か日本人かと思はるゝものあり。互に戀しさに言語を交はすと、日本人である。何時御出でになつた。君は横濱か東京かと云ひ、時に本國の梅雨の空はいかゞ、東京では、はや朝貌も咲くであらうなどゝいふ。何でもない話が端緒となりて、やがて、無二の懇意な友となるといふことぢや。これ、今云ふ通り故郷の人が戀しいのである。それは、言語が同じであり、音調も異ならぬからである。御互に、斯うして一つ國にのみ居れば分らぬが、外國へ行つて見れば、誰もこの感があるといふ。それは、心に隔つる所がなくして、共に心底を語らう事が出來るからである。微妙なる言語音調の力によつて、心情の奥底を表はし盡すからである。今日通俗の言語を見渡せば、書生には、書生社會だけの特別なる言語がある、役人には、役人だけの言語がある、職人には、職人だけの言語がある。然して、その社會社會に於て、互に極めて親密なるは、亦その言語の同じきより、よく心情を通ずるから

である。これによりても、言語によりて、一國の團體を鞏固にすることは分り切つた話である。諸君御承知の通り、我が國は、神代以來今日まで一つの國民が、一つの皇室に奉じて、縱に向つては上下四五千年、横に廣がつては大八洲、その他の島島をば一の團體として、今日まで堅固に無事に維持し繼續し來つて居る。これは、決して偶然の譯ではない。上古以來言語を大切にし愼重して取扱ひたることは、我が民俗の美風で、吾々の先祖が子孫の爲に定めたる嚴重なる掟である。吾々の先祖等は、この國を稱して「言靈の幸はふ國言靈の助くる國」と言つて居る。萬葉集の中に「神代より言ひつてけらし、空みつ倭の國は、皇神のいつくしき國、言靈の幸はふ國と、語りつぎ言ひつがひけり、今の世の人もこと〴〵く、目の前に見たり知りたり、人さはにみちてはあれども云々」とある。委しいことは、歌の講釋の時にゆづる。この「言靈の幸はふ國」といふ事は、この歌の通り、神代より吾等の祖先が言ひ來つて居る。神代と云ふ時から言ひ傳へて居るのぢや。言靈とは、言葉の魂といふ事で、言葉を主宰する一つの魂、一つの神樣があらせらるゝと云ふのである。實に、言語の勢力は無限である。一言葉によりて、よく人を怒らしめ、また、よろこばしむる事が出來る。一言葉を以て、生涯の禍を來し、亦一身の幸を來す事がある。此に至つては、言語の力だけ廣大なるものはない。其の廣大無量なる力のあるをば、言靈と云ひ來れるのである。この言語を心に照して間違へず、正しく用ゐて行けば、其の言語の守護によりて、身をも家をも國をも幸福あらしめるものと云ふが、「言靈の幸はふ國」と云ふのである。此の言葉をつゝしみて、凡ての事に從事し

たるのが、我國の昔の美俗である。吾々が先祖の德性である。これは、祖先が考へて研究して云つた譯でもない。自然に、さういふ風になつてをつたのである。獨逸の語學者にも、これに似た事をいつた者がある。「眞正なる故鄕は國語なり。國語を愛せざるものは、國を愛する人にあらず。」といつてをる。實にさうぢや。故鄕と云ひ、本國と云ふは、何に依つて認め得るか。人々自分の幼少の時から、互に言語が通ふ故に、同國民の交情が厚い。其の國語に通じてをるから、愛國心が深い。國語を何とも思はぬものは、國を愛せぬ者ぢやと言ふわけになる。これは消極的の說明である。我國の「言靈の幸はふ國」といふは、積極的の言ひ表はしであつて、言語ほど大切なものはない。これによりて、一國の團結をも保ち得る物である。故に此の言語を大切にせよといふ主旨になるのである。然るを、人々、この國語を紛亂せしむるに至つては、吾々も、今日の如く凡て消極的の說明を以て、世人をさとさねばならぬ。國民の百も千も承知してをらねばならぬ國語にむかひて、何ぢや彼ぢやと申して、熱誠をふるつて說かねばならぬ今日に至つたのは、諸君と共に、相憂へ相悲まねばならぬ所とおもふ。…………（未完）



川崎重陽氏、さいつころ、日本女訓といふを物せられぬと聞き、これを精華の欄に收れて、世に示さむことを、しきりに慫慂したりしが、補正改刪すべきところ尠からずとの故を以つて、

遂に乖謬せられざりき。その後永潜氏の之を評論せしものを得たれば、とりあへず之を論説欄に掲げおき、さて、茲に之を収めし上は、その評論の根本を知らしめざらむも、いと心ゆかぬわざなればとて、やう／＼にして、本號より掲載することをゆるされぬ。もとこれ、女德萬般の大本を訓ふるものなれば、にはかに世に發表せらるゝことを憚らるゝもの、強ち、氏が例の謙譲のみにもあらざるべし。然れども、吾人が急遽之を収錄せむとするも、また、たゞ、これをこの欄におきて、其の責を免れむとするにあらず。當今、この種の教訓を要することの甚だ、切なるを信ずればなり。讀者諸媛幸に之を諒せよ。

編者識

日本女訓（未定草）

川崎重陽

一　およそ、人たる道、忠孝より重んずべきはなし。女子と生れては、女子たる道をふみて、女子の職分を全うすることこそ、まことに忠孝の始にして、また、忠孝の終なれ。

二　女子のとるべき職分は、おのづから、男子と異なれども、一家に對し、一國に對し、はた、人世に對する天職の重きことは、もとより、差別あることなし。されば、つとめみがきて、おのが良智良能を明にし、天職を全うするに足るべき德器を成就せむことをむねとすべきなり。

三　我が身は、祖先父母より受けて、重き務をになふ身なれば、みづから重んずることを忘るべ

からず。つねぐ\、身持を正しくすべきは、いふも更なり、深く戒めて、輕はずみの行なく、他事にも、後指さゝるゝことなからんやうにつとむべきなり。

四 女子は、柔順なるを、徳とするものなれば、たちゐ、ふるまひ、言葉づかひなど、何事も、しとやかにして、ものさわがしかるべからず。その上、すべてに、優美のさまを失はぬやう、ことに、心かくべし。

梅女の貞節

其の子も孝行

指原乙子

陸奥國鞠居郡和泉田村の村長にて、彦右衛門と呼ばれしは、家いと豐かに榮えつゝ、夫婦の中に、留主太とて十一歳になりぬる子さへまふけ、何不足なく暮しゝかば、同郡境村の肝煎役長作が娘お梅とよぶ、そのころやうやう八歳なるを、留主太が未來の妻と定め、樂しき月日を送りけるが、その翌年、留主太は、不圖眼病にかゝり、醫藥のしるし更になく、遂に盲目となりはてぬ。かてゝ加へて、彦右衛門は、思ひまふけぬ罪を獲て、牢の内にとらはれの身となり、終に、あへなく世を去りぬ。重なる不幸に、留主太母子は、なくなくも、馴れし我家を跡に見て、大沼郡小野川村の片ほとりに、少しのゆかりを尋ねゆき、詫しき月日を送りしが、そが中にも、留主太は、父の身まかりし土地へ、杖をたよりにたどり行き、そのほとりの土を持ちかへりて、墓をきづき、喪の事を脩めつゝ、在すが如く事ふるにぞ、見る人袖をしぼりけ る。

賓に、隙ゆく駒のたえまなく、お梅十三歳になりぬれば、未だ咲き出ぬ蕾の花、鄙にまれなるうるはしさに、親しき者共、長作に、留主太は目しひて行衛しれず。そが上、父は罪せられしかゝるところへ、只一人の娘を嫁す愚さよ。とく思ひとゞまり給へ。且つ、隣村のそれがしは、家富み栄え、心ばへさへ優しきが、お梅どのをば懇望せり。願ひても無き良縁なり。今より約束し給はゞ、お梅どのは更なり、御身のためにもあしからじなど、言葉たくみにそゝのかされ、長作も思ひ惑ひ、既に、約束をも定めんとせしを、お梅はきゝて打驚き、こは浅ましき事なるかな。そも、我儕はじめてかしこへ定りし時は、彼方は、村長にて家豊かに、我家は、肝煎にて役からもふさはしからぬを、此上なき幸よと、うからやからも悦びしに、今更、目しひとなり給ひ、舅君かくなりはて給ふとも、そは我儕の宿世つたなきなり。さるを、他所人にとつがん事など思ひもよらずと、泣きかなしみ、受けひく気しき更になければ、長作も、實にもとて、夫より、此所彼處、留主太が行方を尋るうち、早くも三年の日を送りぬ。

或日、留主太は小野川村にしのび居るよし聞き出しゝかば、直に、人として、お梅も最早十六歳、いつむかへとり給ふにかと、いとねんごろにいひ入れしかば、父がかはせし約束を忘れ給はぬ志は、いとゞうれしき極みなれど、今、かく身をおく所だになく、妻をやしなはんすべもなし。何方へもとつがせて、末の栄えをはかり給へ。且つ、我こゝにありときかば、事のさはりにもなりやせん。行方しれずとつげ給へといひしかば、せんすべなくて、立かへり、お梅にかくとつげゝれば、又、めぐり逢時もやあらん。あながちに、他所へとつ

かせ玉はゞ、命は失ひ侍るとも、いかで操はやぶらじと打なげくにぞ、長作、又、そのよしを留主太が母へつげしかば、有る甲斐もなき我等母子を、かくまでのたまふうれしさよ。此の上はとて、留主太にもさまざまにいひきかせ、つひに、めでたくよびむかへける。

お梅、此の家へとつぎしより、老いたる母親、盲目の夫に事ふる事、いとまめやかに、家の内の事、何くれとねもごろにいとなみつゝ、ひまひまには、春は野山にわらびを折り、さては、澤邊の芹をつみ、秋は薪をひろひなどして、此所彼處へ賣りしろなし、夫にて、母の好めるものをとゝのへ、夜は、足腰をさすりつゝ、四方やまの物語に、憂きを慰めいたはりしかば、留主太も、その志にめでゝ、夫婦の中もむつまじく、心を協せてはげみしかば、豊といふにはわらねども、事かゝぬ程にありしにぞ、故郷なる和泉田村へ立歸り、名をも城定と改めて、針治按摩を業となし、やがて、傳吉と呼ぶ男の子さへもふけしかば、母は、いよいよ喜びて、老を安くすぐしつゝ、いくばくもなく身まかりければ、夫婦は、いとゞなげきかなしみ、野邊の送りも心を盡し、跡ねんごろに弔ひけり。

かくて、年月經ぬる程に、左次兵衛、勘次郎、金四郎などいへる三人の子さへまふけ、皆、すこやかに、成長しかば、或日、城定、お梅に向ひ、偖、我儕事、一度大都へ至り、針治の妙をも極めたしと、多年心に望みしが、今は、子等さへ生ひ立ちし故、一度彼地へ行かばやと思ひ立ちぬ。御身は、よく家を守り、歸り來る日を待ち給へとて、やがて、何くれと用意して、江戸をさして出で立ちぬ。さるに、果報つたなく、いくほどもなく、中風にかゝりて、立居さへまゝならぬ身となりしかば

志をとげずして、空しく故郷へ立ち歸りぬ。夫より、お梅は、いとゞなほ晝はひねもす夜はよもすがら、醫藥の事、何くれと心をくばり、神にいのり佛にねんじ、只管、平癒をねがひけり。四人の子等も、父母に似て、心はへいとやさしく、各々耕作を勵みつゝ、父母をなぐさめいたはりしが、中にも、佐治兵衛は、耕作のいとま毎に、此所彼處に雇れつゝ、或は博士峙といへる難所を、重荷を背負ひて市中へ出で、そが歸には、必ず、父母の好めるもの、何くれと調へて、その喜べる色を見て、此の上なき樂しみとなしつつ、更に、怠る事なかりしかば、此の事、何時か、領主松平肥後守の聞く處となり、寶永五年、城定お梅佐治兵衛を厚く賞與せられし上米若干を賜はりけり。

さしてゆく心のみさは正しくば
世のうき波もこゆべかりけり

家政



衛生上に於ける看護法の一班

久我西英

人生幸福の本源は、病痾をして其の身體を去らしむるにあり。之を去らしむるには、先づ、其の看護の法を詳にせざる可からず。是れ、仁術に、其の身を委ぬる人々が、競うて之を研究する所以なり。

今や、方に新緑四野に滿り、蟪蛄樹梢にあつて行人に啣つ初夏の候となり、漸く、諸種の惡疫流行

の季節に近づかんとす。此に於て乎、虎軍は、曾て伏せし所の旗旌を再び飜へし、一發の烽火と共に戰雲を捲かんとし、ペスト隊は、既に、臺灣を侵掠し、勢に乘じて、西九州より本土に向はんとす。故に、此の際、最も嚴密の注意を其の防禦に要し、且つ、患者に關する看護の法をも併せ講せざる可からず。抑、患者に對し、醫師の與ふる法案及び技術の外、最も必要なるものは、懇切の看護にして、其の病の經過、及び、轉歸其の他苦痛に關しては、一日も、之を忽諸に付し難し。然れども、常に、敎育と經驗ある看護者に任じ得ること必ず可からず。時宜に依つては、何人と雖も、其の任に當らざる可からざることあり。

故に、余は、目下東都に於て、諸種の病院を視察し、醫術研鑽の餘暇を割きて、是等無經驗の人に向つて、斯道大家の所説と、自家の管見を併せ綴つて、聊か陳述する所あらんとす。畢竟、我が郷里の同胞が、飽くまで健康にして、人生の幸福を全うせられんことを希ふの老婆心に出でしものにして、好しや、余輩の言を專門諸家に訴へんとするも、釋迦に說法、眞に一笑を博するに過ぎざるべし。然れども、他にあつては、或は多少の利益を頒つに足るあるを信ずるなり。矧や、日々に活動し、刻々に狂奔する人生は、獨、惡疫の襲擊に遭ふのみならず、諸種の病痾は、常に、身邊を纏綿しつゝあるものなれば、豫め、之を心得置くは、實に、盜に先つて索を綯ふものと謂つ可し。

(イ)看護人　看護人は、喧噪なることなく、能く、沈着にして、總て、醫師の指揮に遵ひ、職務を執るべし。

(ロ)病室　看護の第一要點は、適當の病室を供給するにあり。患者は、何れも安靜を要するが故

に、特に、隔離し、且つ、他人の同居せざる室を撰用すべし。而して、病室は、成るべく廣くして、充分に新鮮の空氣を通するのみならず、日光も、亦、適度に射入し、温度は、常に、攝氏十五度乃至十七度を保つを要す。

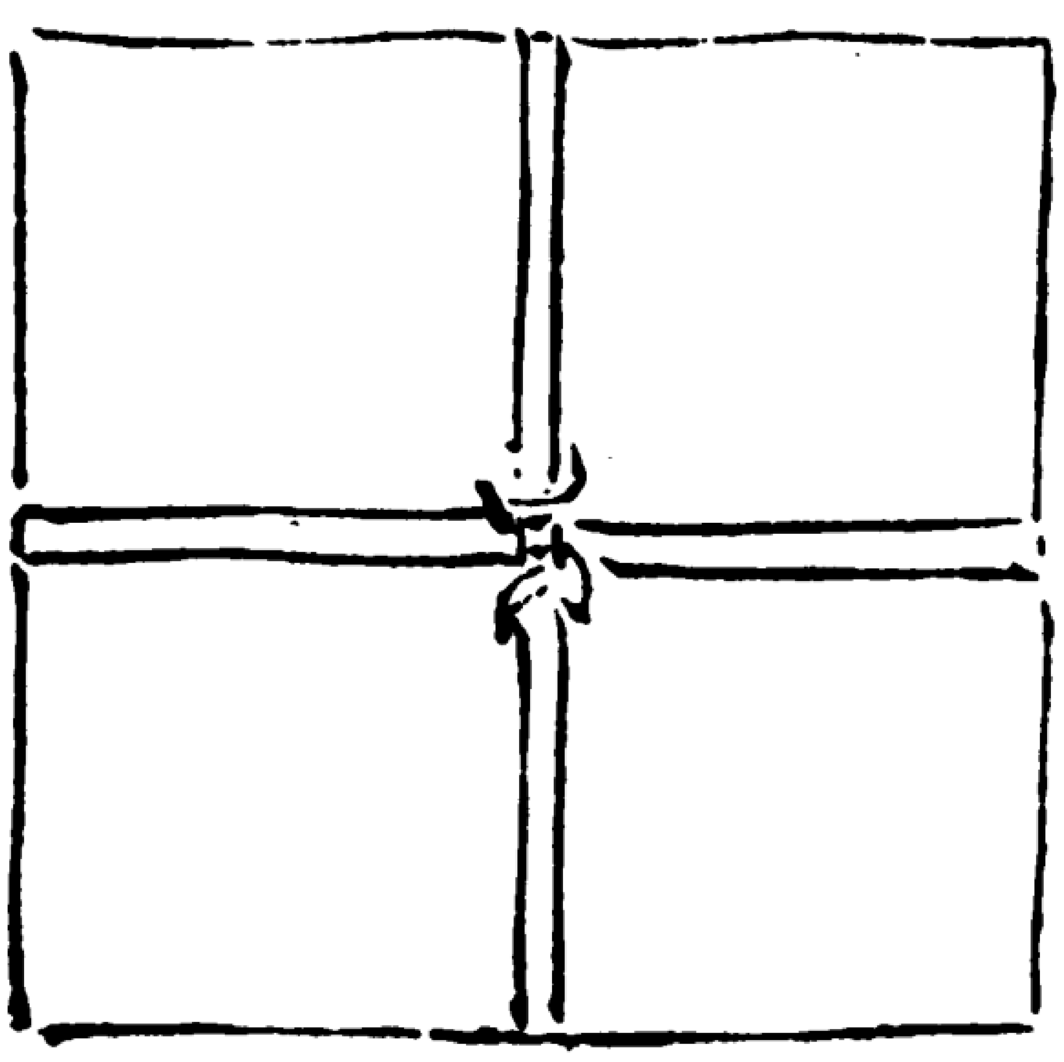
殊に、病室の清潔に重きを置くべし。即ち、塵埃に汚れ易き物品（例之は皺襞多き窓掛厚き敷物類）及び、無用の器具は、悉く之を取除くべし。患者を煩すことなく、毎日、室床を掃ひ、塵埃を拭除するを要す。病室には、朝夕空氣を流通せしめ、患者の下泄物は、其の都度之を棄却すべし。其の他、食物の殘餘、飲食器、不潔の衣類、蒲團の上敷等を病室に置くべからず。且つ、必要の場合には、之れに消毒を施して、室外に出すことあるべし。

婚禮色直式（承前）

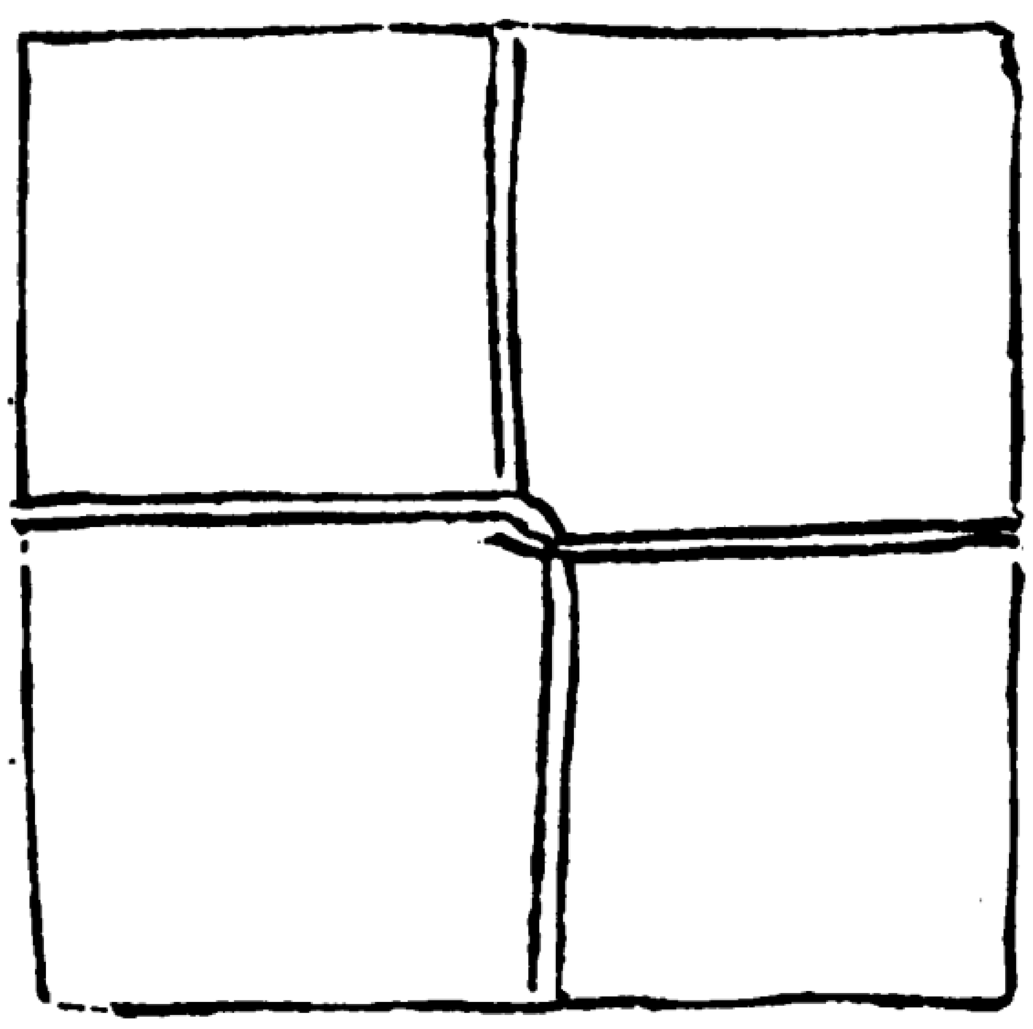
有住つね子

叺の結方

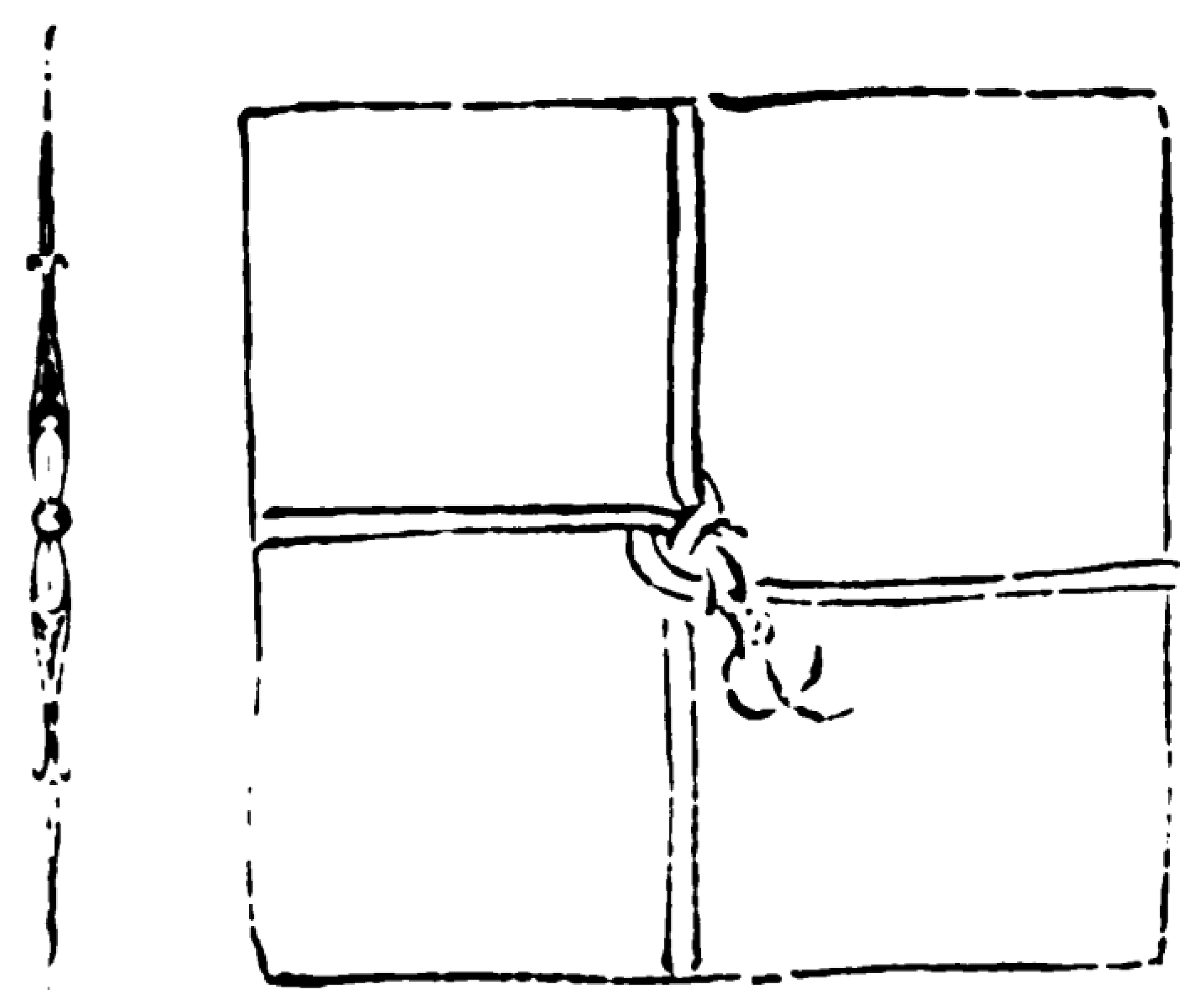
第一圖裏



第二圖表



第三圖表



左行結
又一つは叶結
なり

上巻結

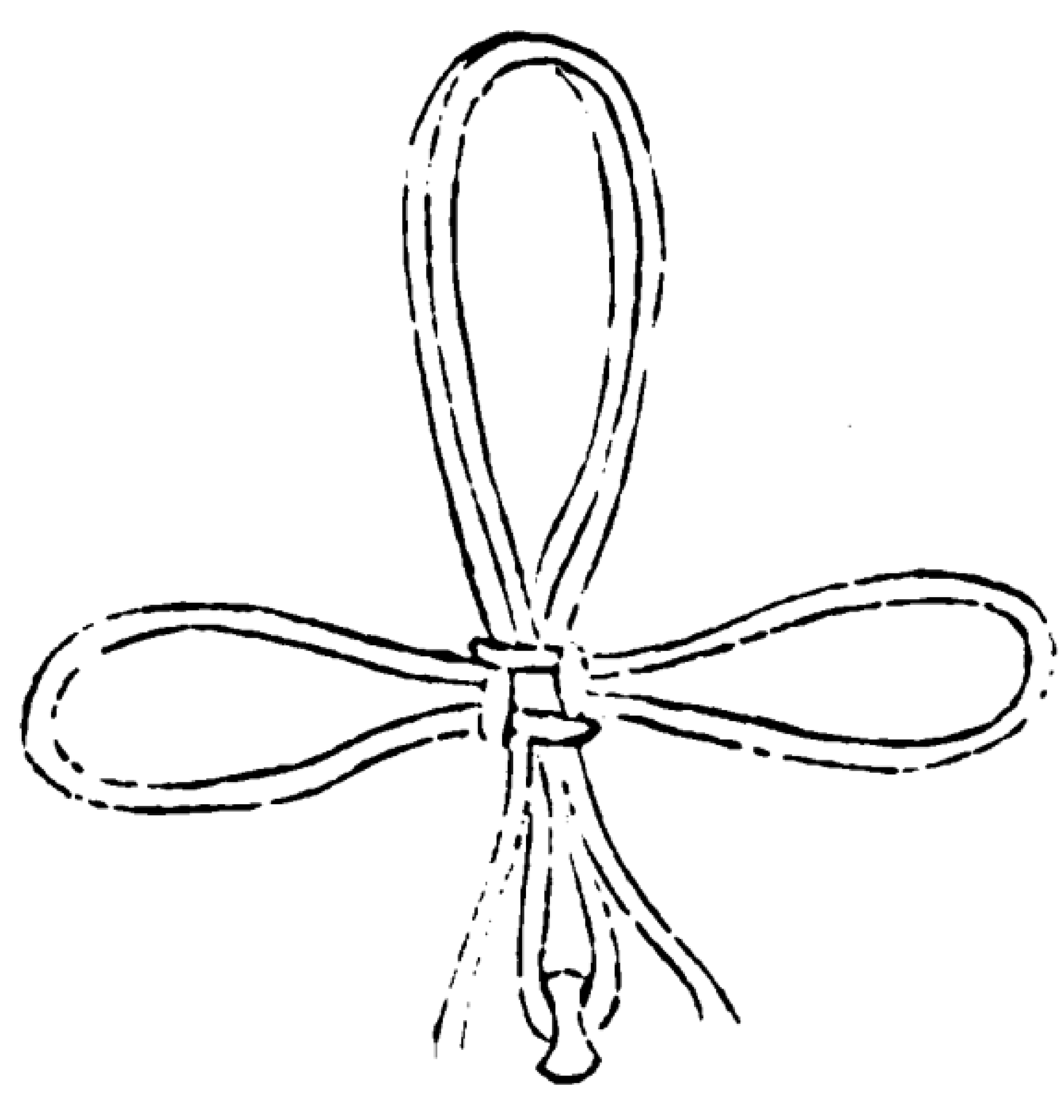
石川泰二郎

（五）同一種

是は、前々三十條の結様のうらうへにあれる結方あり。

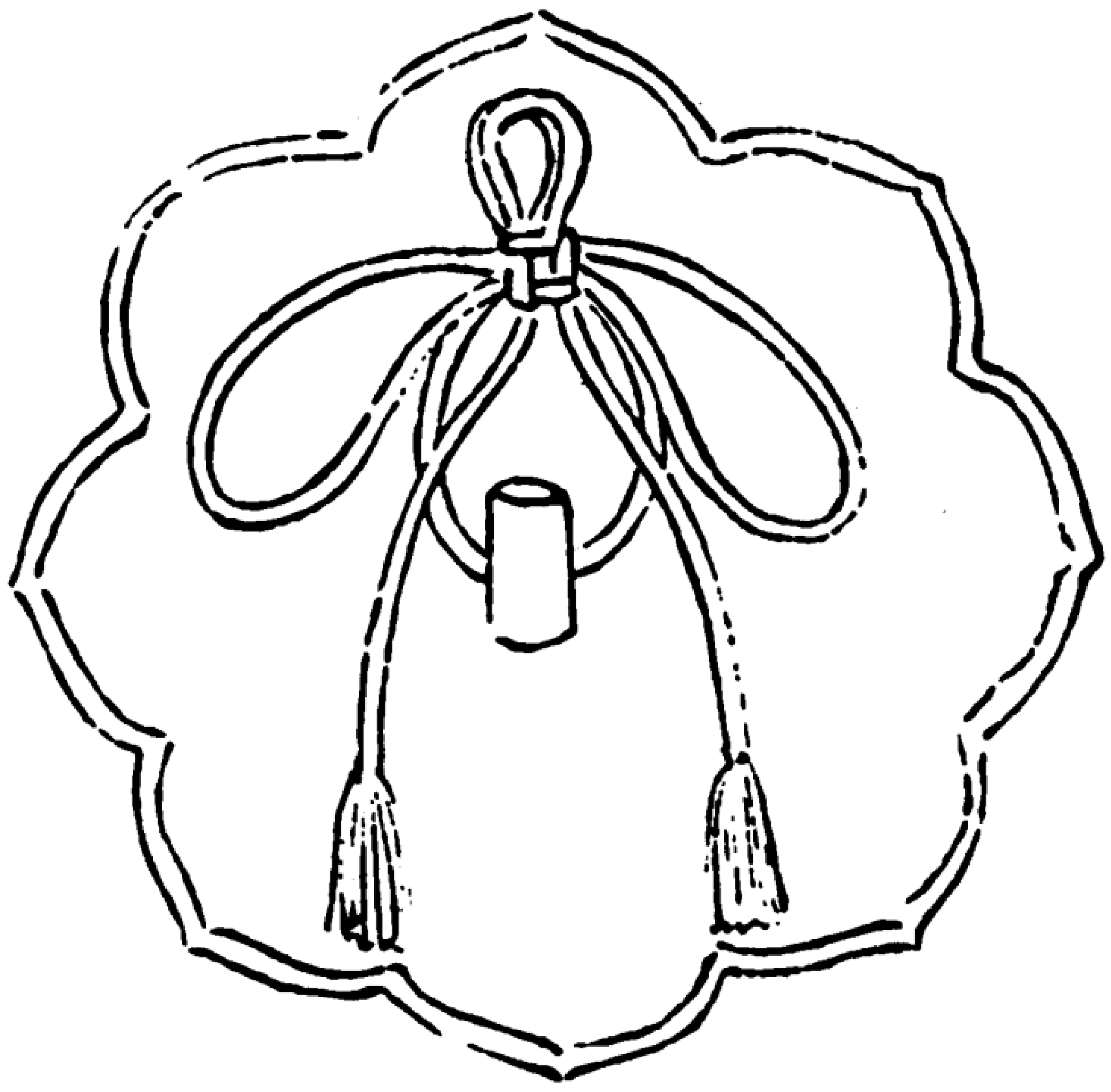
先、紐を胴にかけて、一つくゝらせて、左右へ紐先をして、右より上の輪の下へと紐先を左の方へ出して、右に輪形を殘しおき、又、左より上の輪の上へと紐先を右の方へのばして、左に輪形を殘しおき、扨、左紐先を左輪の上より下の組合ひたる紐の間へ通し、右紐先を右輪の下より下の組合ひたる紐の間へ通して、次々引しむべし。（これは前々號(四)の次、前號(五)の前に入るべきを脱せし故、こゝに舉げたるなり。讀者その心してよ。）

第五圖



つけていふ。類聚雜要鈔、鏡の裏の圖、上巻此の一圖人字形に書きたり。誤りて寫せる事明ら

かなれば、今、入り字形に改めて記しつ。



元圖の詞書に　鏡裏に緒付樣
凡緒長五尺五寸　弘一寸二分
紐平緒定線三寸五分
徑一尺　裏文　鷙鵲唐草

だいどころ

詰瓜

白瓜の皮を剝ぎ、中の種を去り、能く洗ひ、水氣を、布巾にてふきとり、牛肉、玉葱、人參の類をこまかにきり、食鹽胡椒をふり、牛酪牛乳を加へ、能く、交ぜ合せたるものを、瓜の中に詰め込み、切口は、麻糸にてしばり、ソースの中へ、醬油をいれ、文火にて、一時間程煮るべし。煮あがりたる時、輪切にして、皿に盛り、クルビをかけて、用ゐるべし。又、詰瓜に、牛酪を塗り、蒸燒にするも佳なり。

白瓜卵燒

白瓜の皮を剝き、二つに割り、種を去り、能く洗ひ、二寸四角に切り、目笊にいれ、鹽をふり、暫

らく置て、水氣を去りたる後、たまごをまぶし、其上に、パン粉をふり、胡麻の油をしきたる鍋にいれ、燒くべし。

鰌汁

鰌を、折々水をかへ、充分泥をはかせたるを、笊にあげ、水を絶ち、別の器にいれ置き、鷄卵を割り、能くかきたてたるものをいれる時は、たまごを呑みて、鰌はよわるなり。これを、沸騰ちたる汁の中にいるれば、腹中に、たまごいりて、味ひ極て佳なり。

鷄卵しんじよ

鷄卵を割り、黄にするときは、きみばかり、白にする時は、白身ばかりに、吉野葛を、水にてとき、鷄卵の中へ四分程いれ、よくかきまぜ、鉢の中へいれ、蒸籠にて蒸し、いろの、さゆるを、度とし、蒸籠より出し、清汁をこしらへ、かな杓子にてすくひ、椀に盛り、清汁をかけて出すべし。

胡蘿蔔栽培法

こ、た、生

胡蘿蔔は、内外人の、共に良好なる蔬菜として、食膳に供用するものなり。外國にては、之を肉汁を煮るに用ゐ、又、處によりては「ジエリー」としてジヤムに似たるものを製し、或は、肉類の添品として、至極の珍重を受く。其の他、牛酪の色付にも用ゐ、其の種子は、酒類製造の際に、之に香氣を附するの用をもなすと云ふ。然れども、本邦にては、普通に、煮付け又は鮨などに刻み入るゝ外に、特別なる調理法を見ずと雖、其の賞味さるゝことを、彼我異なることなし。

胡蘿蔔には、其の種類極めて多し。されば、彼の

畜用種を始め、園藝用種に至る迄、多數のものを一々説明するの煩を避けて、茲には、其の一二を述ぶべければ、適當なる選擇を經て、試植せらるべし。

外國種の中にて、英米諸國にて貴重するものは、早生赤短角種あり。此の種は、品質佳良なる外に、菜根を生ずること早く、又、促成栽培（はやづくり）をなすに協ひ、且つ、春季に露地に播くも、極めて早く根を採るを得べし。鈴形にして、長さと徑とは殆ば等しく、その大なるものは、徑一寸五六分に及ぶ。色は、赭赤にして美麗に、味ひ甚だ佳なり。而して、他の長角種類にありては、多くは晩生なれども、尚、早生にして良好なる種類なしとせず。此の中にありて、味可良なるもの二三あり。

内國種類にては、元來、其の名稱などは、區々にして、其の地方を點にせるため、或は、同物に異名を附し、又は、異物に同名を附することあれば、劃然判別に難きも、從來栽培するものは、先づ、大胡蘿蔔、金時胡蘿蔔一名大阪胡蘿蔔・西京胡蘿蔔等なるべし。

大胡蘿蔔は、東京近傍にて、普通に栽培し、根身伸びて長く、赤黄色なり。普通に、青物市場にて見るものなり。

金時胡蘿蔔は、大阪地方にて栽培するが爲めに、他に大阪胡蘿蔔と名く。此の種は、根身肥大にして短し。其の色深赤なるがため、金時胡蘿蔔とも云ふ。之を東京近傍に移し植うるに、漸く其の色を失ふと唱へり。品質の可良なるを以て鳴る。

西京胡蘿蔔は、大阪胡蘿蔔に類すれども、品質少しく劣れり。

此の外に、早生の種類に、夏胡蘿蔔なるものあり。

之は、春季播種すれば、秋季普通種の生長する頃ひは、善く之を採收するを得べし。之のものは、根身矮小にして色黄なり。味ひ香氣等に至ては、別に普通種に異なるなし。

栽培手入

胡蘿蔔の栽培に適するは、上層深き輕鬆の冷地なり。硅砂地又は硅砂粘土ば尤も可なり。彼の大阪胡蘿蔔の名あるは、該地方の土質は、善く此の作物栽培に適するが故なり。早生種の播下は、二月頃なれば、藁腐れ土等にて防霜の用意をなし置くべく、其れより後るれば、直に、露地の床場に下種してよし。普通種の播下は、六月下旬より九月上旬迄なり。播種せんには、畦間を一尺乃至一尺七八寸とし、畦上に一線づゝ下種すべし。發芽して三四葉を發せば、耕耘しつゝ間引き、株間を二寸乃至二寸五分となし、成長期中は土地の乾燥を防ぎ、時に灌漑を怠るべからず。(先きに間引きたる胡蘿蔔は、葉胡蘿蔔とて、人の賞するものたり。)胡蘿蔔を採收するには、其の多部分發育したる時を以て始め、其の善く熟成せるものを先きにし、漸次に、悉く收むるを良法とす。短根又は半長根種にては、其の密生せる部分より拔き初めて、其の成長發育すべきものを圃上に止め置けば、之は、暫くにして長大となるを得べきも、彼の長根種にありては、他株を傷くることなく、一株を拔く能はざるが故に、一般には、此の如く採收法を行ふ能はざるべし。

胡蘿蔔は、乾燥にして輕鬆なる土地、或は、細砂又は窖中の砂中に埋め置けば、能く冬中貯藏することを得べし。但し、冬期掘採し貯へんには、七八月頃播種せん半長根種、尤も適應なり。

胡蘿蔔を促成するは、佛國に盛なり。彼の地にて、

鐵管に熱湯を通せるものを用ゐて、温室を造り、此内にて種子を發芽せしめ、(十月頃)之を圃場に熱管を通じて温くせる上に移植し、促成栽培をなし、十二月より一月に及びて、赤色の胡蘿蔔を見るを得べしと。或は、普通栽培家の促成方法は馬糞にて温床を作り(十一月下旬若くは十二月上旬)て播き、二十度乃至二十五度の温を有せしめ、此の床上に、腐れ土を盛ること六寸にして下種し、上に薄く腐れ土を撒くべし。凡そ十日を經て發芽すべく、此の後、天氣晴朗の日に玻璃障子被ひを去りて、外氣を通じて其の軟化を防ぎ、又、夜に至りて放冷するときは、薦を被ひて温度を保たしめ、床の乾くことあれば、水を濺ぎて濕氣を與へ置けば、播種後、大約四ケ月を經て採收せらるべし。温床は、又た、一月より二月の間に設けて下種するときは、約三ケ月にして收穫期に達すべし。

選種は大切なるものなり。良き母は、良き子を生むを得べし。種子は、十一月頃、根菜の採收に當りて、其の形狀整齊にして、品質色の良好なるものを選びて、其の葉を除きて、之を窖室内に運び、注意して細沙中に埋植すべし。

根菜は貯藏には、濕氣は尤も忌むべきものたり。本邦にては、普通乾燥なる地を選み、土中に深く埋藏し、上を藁類にて被ひ、冬期の貯藏に堪へしむ。斯くして貯藏したるは、二月より三月に至りて之を取り出し、方一尺五六寸に植うべし。而して、花梗を抽發するに至れば、其の梗端の小花は摘み去りて、本花に勢を付與すれば、良好なる結果は、期して待つべし。種子成熟せば、其の熟度に應じて、花梗を切截して舍内に搬び、後乾燥せしめて採種すべし。

胡蘿蔔を害する昆虫には、數種ありて、幼弱なる

作物を損ふものたり。之等驅除せんには、屢々灌水するを良とすれとも、害の甚しきは、諸種浸汁劑を灑ぐか、或は、花葉を害するものにありては、石灰硫黄華て撒布するも一法たり。

終りに、胡蘿蔔の營養的價値を見るに、左の如し。

水分八九、一	蛋白質一、三	脂肪〇、四	炭水化物七、四
纖維一、一	灰分〇、七	營養率七、五	

人の品格は、其の讀む所の書によりて、知らるゝこと、恰も其の交る所の友によりて知らるゝが如し。

（西諺）



漢文學講義

佐々木天游

古處書房記

尾藤二洲

今之不レ如レ古。不二唯道德爲一然也。秦漢之文。今豈有レ之邪。晉唐之字。今豈有レ之邪。以至レ於二百工雜技之流一。皆與時降。其能超然進レ古者。吾未二之見一也。風氣之醨。乃爾乎。將求合レ於レ今。而不レ求レ合レ於レ古也。與レ人言之。輒未二嘗不二一慨一焉。備前儒。十野田子。以二古處一名二其書齋一。屬レ余作レ記。余素重二其人一。又偉下其不二自足一焉而求中諸古上。於レ是。書二其所レ慨。以贈レ之。詩云。以似以續。續二古之人一。能下思

其所二以似續一者以上修焉。古人豈不レ可レ期耶。所レ謂古處。蓋以二古之道德一自期也。

今の古に如ざる、唯道德のみ然りとなさゞるなり。秦漢の文、今豈之あらんや。晉唐の字、今豈之あらんや。以て百工雜技の流に至るまで、皆時とゝもに降る。其の能く超然として古より進むものは、吾未だ之をみざるなり。風氣の爾、乃ち爾るか。將今に合ふを求めて、而古に合ふを求めざるか。人とともに之を言ふ。輙ち未だ嘗て一慨せずんばあらず。備前の儒、十野田子、古處を以て、其の書齋に名く。余に屬して、記を作らしむ。余素より其の人を重んず。又其の自ら足れりせずして、古に求むるを偉なりとす。是に於て、其の慨する所を書して、以て之に贈る。詩と云ふ。以て似ぎ、以て續ぎ、古の人に續ぐと。能く其の以て似續する所のものを思うて、以て修せば、古人豈期すべからざらんや。所謂古處とは、蓋し古の道德を以て自ら期するなり。

古處書房の記、古處は書房の名であります。書房とは、書齋又は書屋など云ふに同じく、讀書の室と云ふことであります。其の讀書の室を名けて、古處と申しましたのに就て、其の感慨のある所を紀しました者でありますから、古處書房記で、記とは、事を紀すの文であります。或は、單に事を敍した計の者もあり、或は、半敍事半議論の者もあり、或は、純ら議論計の者もありますが、今此の文の如きは、全く議論體の記事文であります。偖、現今の世の中が、昔しの世の中に及ばぬことは、唯獨り、仁義道德の德行のみばかりか、然り左樣で、古へに及ばぬとするのみではナイ。道德の行ひが、古へに及ばぬことは勿論其の外總ての

事が、皆今の世の中は。古への世の中に及ばぬのヂヤ。秦時代や、漢時代やの樣な文章が、唯今の世の中に豈なにしに、之れあるであらうか。(豈は反跌の辭なり。俗語のナニセーと云ふに同じ。邪は疑の中に、少しく詰問するの意を含むの辭なり。)トテモ、秦漢時代の樣な漢非とか司馬遷などと云ふ樣な、氣格の高き文章は、今の世の中にはあるまい。晉時代や、唐時代の樣な字が、唯今の世の中に、豈ナニシニ、之アルデアラウカ。晉の王羲之などの樣な字とか、唐の顔眞卿など丶云ふ樣な、氣品の高き字は今の世中にはあるまい。其の外以て、百工雜技、樣々の工藝やら、種々の技術の流類に至るまで、皆な時世につれて、段々と其の業前が降りおちて、畫でも、彫刻でも、又其の他のものも、昔よりは、段々と手際が落ちて、ドウモ昔の樣なものが出來ぬ。其の何事か能く超

然と、ヌキンデコエて、古の昔よりも、進み進歩してをると謂ふものは、吾自分は、未まだ之をみたことがないのヂヤ。單に道德のみでなくて、何事に限らず、今の世の中は、古への世の中に及ばぬ事ばかりで、何一つ、今の世の中の方が、昔よりも進歩して居ると謂ふものを、見出すことがないのヂヤ。道德も、文章も、字も、百工雜技も、皆な時代につれて、墮落退歩するもの計りヂヤ。何一つ今の昔に勝ると謂ふものを見出すことがない。ソレトイフモノハ、世の中の風氣と云ふものが、段々と時代につれて、漓くなるから、(醨は、說文に薄酒也とあり。ウスキことなり。)乃ち爾左樣で、サウナルノデアラウカ。(乎は、疑うて未だ定らざるの辭なり。デアラウカの意。)世の中の風氣は、時につれて漓くなるから、何事でも、昔に及ばぬ樣になるのでアラウカ。將ハタシハ又、(將

は、抑然の辭なり。ハタシハマタと訓ふ程の意なり。)今の世の中の向に合ふことを求めたづねて、現今の世人の嗜み合ふやうにすることのみを求めて、サウシテ、古昔の人の風に合ふことを求めて、古人の高尚なる所に、合ふことをたづねざるが爲に、段々と何事でも、古へに及ばぬ様になりて、墮落してくるのでアラウカ。(茲所の也は、決語にあらず。語勢の助字なり。)何にしても、誠に遺憾なことである。ソコデ、人と與に一處に、此の事柄を談し論ずる度毎に、未ダ嘗て慨然として、嘆き憤らざることはない。人と今の古へに如ざることを、談論する度毎に、慨き憤らぬと謂ふことはなく、いつも慨嘆して、殘念に思うてをる。)焉は、コノトコロに、又はコノコトになど、云ふ程の助字なり。今の古へに及ばぬ。コノコトを、慨嘆すると云ふ様な氣味合なり。)と道徳のみならず、百工技藝に至るまで、今の古へに及ばざることを、慷慨して、古處書房と名けし、古處二字の意味を、適切に致しましたものであります。ソコデ、備前の國の學者で、(儒は、韻會に學者之通稱也とあり。又楊子法言には、通二天地人一謂レ儒とあり。學者のことなり。)姓は十野田と申します人が、(子は、男子の通稱なり。又人の嘉稱なり。)古處と謂ふ名を以て、其の自分の讀書の室につけまして、サウシテ、余れ自分に屬したのみて、古處書齋の事に就て、紀事の文を、作りてもらひたいと申しました。余れ自分は素より平生から、十野田と云ふ人の人となりを重んじ尊敬致してをりまして、ソノウヘ、又其の十野田子が、自ら自分の學業道徳を以て、是で足り充分であるとせずして、猶進んで、古へに求め尋ねて、古人の道徳學業を求めて、益々自分の道徳學業を修めて、古へ

に合ふことを、求るの志あるを偉大ありとし、よみんじてをります。)偉は大あり。諸の字は、於字と義稍同じ。襯語辭あり。)カウイフ譯合におきまして、其の自分が、常に今の古へに及ばざることを、慨嘆してをります所のものを、書き紀しまして、サツシテ以て贈りまして、古處書房の記と致しましたが、詩經に、以て似ぎ以て續ぎて、古への人の舊き典を、續ぎ行ふと申してありますが、(似は嗣なり。ツクことあり。詩周頌云。以似以續古之人。註に紹繼續古人之舊典也とあり。以似以續は、嗣ぎ續ぐと云ふことなり。)能く心を用ゐて、以て古への人の舊き典に、嗣ぎ續ぐ所のものを思ひ考へて、古人の道德を典型として、サウシテ以て、已の德を修め磨きて、古へに合ふことを求めてゆいたならば、(焉字上に同じ。嗣ぎ續く所以のもの。コノコトを、修めたならばの意なり。)古人の道德と雖も、豈にナニシニ、期アテ、スルことが、出來ぬでアラウカ。(耶は、乎又は哉の字と同じく疑の辭あり。唯乎哉の二字に較ぶれば、微しく婉轉詰問するの意を帶ぶ。期せられぬデアラウカ。ドウデアラウカ。期せられぬこともアルマイ、と謂ふ樣な意味合あり。)所謂名けて古處と謂ふ所以のものは、蓋し古人の仁義道德を以て、自ら期アテ、シテ、古へを以て、自ら處ると謂ふの意ヂヤと。末句に至りて、初めて、古處と名づくる所以の意を、點出して、一篇の文字を收拾結束したものであります。

和讃通信講義(第十三回)

山崎彩峨

墨にて書くには、淡墨の先へ、濃墨を附して、符



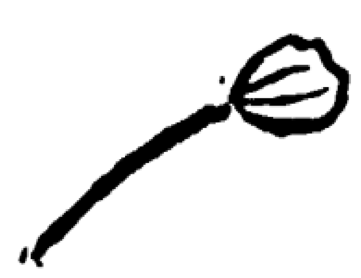
號の順に花を畫き、莖葉を描き、草を畫き、後、濃墨にて、花心葉脈を入るゝなり。

彩色にては、まつ、胡粉の先へ胭脂を附して、花瓣を畫き、藍か藍かちの草色かにて、葉の表を畫き、藍黄等分の青色が、もしくは、黄がちの青色かにて、うら葉を畫き、莖幹を畫き、それより草色へ、代赭か赭墨を挾墨となして、草を畫き、子房の部分へ、藍か藍墨かにて、線を入れ、同色にて、葉脈を入れ、後、雌黄にて胡粉をとき、花粉を打ち入るゝなり。

葉脈



花蒂



家計簿記法講義

磯部武者五郎

（五）帳簿の種類

簿記に用ゐます帳簿は、事業の性質に由りて澤山入ります。即ち、銀行とか會社などにては、非常に澤山の帳簿を要します。さりながら、帳簿の種類を大別致しますると、二つに分れて居ります。其の一を主要簿といひ、其の一を補助簿といひます。先づ、會社銀行の事業などにては、主要、補助二簿の區別、大畧左の如きものであります。

主要簿
- 日記帳
- 仕譯帳
- 元帳

補助簿
- 金銀出納帳
- 手形記入帳
- 各種の口別元帳
- 各種の口別記入帳

主要簿は、記簿中の幹簿にして、補助簿は、枝簿ともいふべきものです。主要簿は、最も重要なるものにて、諸計算の基本となり、損益の決算を明示することの出來る帳簿です。かく大切の帳簿ですから、銀行會社などにては、此の主要簿を管りまするは、重役の致すことでして、雇入の記帳方などに命じては置きません。補助簿とは、主要簿に記入したる事柄に就いて、其の一部分、又は、主要簿に記入しません極く枝葉の事を記入し、又は、一部分出納を整理することを致します。補助簿は會計の都合にて、適宜に調製して置きますから、必しも、前に掲げた通りの者を限りませず。又、事柄の繁雜なるに隨つて、補助簿は非常に入用でありますから、營業の盛なる會社銀行などにては、五六十冊以上、百數十冊に至るものであります。

（家計簿記に於ける帳簿の種類は、別に述べます）

主要簿記入の順序は、先づ、第一に日記帳に記しまして、之を仕譯帳にて、貸借の仕譯を爲し、後に、元帳に進みて、一番終りの記入を爲まして、決算勘定を爲します。

以上、單復の區別、貸借の意義、帳簿の種類の三つは、先づ、普通簿記につき、大切なることにてありますから、ざつと、之を述べ置きます。まだ、此の外に申して置くべきことが澤山ありますけれども、されば、稍、簿記のことが分りてからで、申しても無駄でありますから、今は、之を畧します。又、此の編は、家計簿記が主眼であります故に、是より、家計簿記の本論に入りて、講述を致します。

（六）家計簿記の要旨

家計簿記は、家庭に於ける金銀の出納、財産の増減等を明記しまして、一家の經濟を整へまするが主旨であります。一家の經濟を整へまするは、一家繁榮の基を立つる譯でありますから、家計簿記は、一家に取りては、最大切のものであります。家計簿記は、銘々の家の經濟の有樣につきて、仕組むべきでありますから、何の家も、一樣には參りますまいが、成る丈繁雜なる仕組を避け、手數の要らぬ簡便のものがよいと思はれます。それ故に、私の考案せるのは此の主義に從ひて仕組みました。先づ、第一單式簿記法に據りまして、貸借の語を用ゐませず、帳簿も、主要簿補助簿を通じて、三部の帳簿で辨ずる譯に致しました。尚、次に詳しく述べます。（以下次出）



朝梅雨　　東久世通禧

ねぐら出るすゞめの聲も打しめり
　軒端をくらきさみだれのころ

夏湖　　高崎正風

かげうつる不二の高根の雪さえて
　みどりにかへる蘆のうみかな

江島　　鍋島直大

岩越るなみをかつぎてあまの子が
　江島かげにあわびとるみゆ

夏露　　津輕承昭

庭にさくさゆりなでしこ朝のまは
　つゆすゞしくも置わたしけり

雨中螢　長岡護美

岡の名のほしはかくれし雨の夜に
かすわらはれてとぶほたる哉

夏草　宮地厳夫

秋たゝばちぐさの花もさきいでん
のべのみどりのなつかしき哉

樹陰夏月　北郷久政

繁りあふ若葉をもりてはしゐする
たもとにやどる月のすゝしさ

池上夏月　坂正臣

蓮の葉はまたしけからぬ池みつに
うつれる月のかけのすゝしさ

螢照舟　千葉胤明

やみなれと蘆間の舟もみゆるかな
飛ひかふほたる數おほくして

船納涼　岩崎勝従

こゝちよきこの川船のゆふすゝみ
よは夏なりとおもはさりけり

都螢　下田春興

たか袖をもれてきつらむみやこ路を
こゝろありけにほたるとぶなり

夏夜雨　蜂須賀隨子

さつきやみまた降出ぬはるゝかと
見し夕くれのそらたのめにて

夏山　鍋島榮子

さみたれのはれたる後は常よりも
綠はえをるやまのいろかな

夏雲　前田朗子

遙かなるやまかとみしは夏の日の
そらのくせなる雲にそありける

池夏月　南郷柳子

池みつに月のすむ夜はかしましき

かはつの聲もすゝしかりけり

草中螢　柳原愛子

夏ふかき淺茅かくれをゆくみつの
なかれもみえてほたる飛なり

竹亭夏月　北島以登子

おくつゆのひかりも添て夏のよの
月かけすゝしたけのしたいは

水雞　大谷章子

とふ人もなき柴の戸をゆふへ夕へ
水雞はかりそたゝきなれたる

水雞何處　佐藤艶子

行とゆけと聲また遠くきこゆなり
いつかたになく水雞なるらん

聞水雞　小川直子

さやかなる月はかりかは門すゝみ
水雞のこゑもきくよなりけり

夏月易明　河村重子

宵のまの蚊遣のけむりつきなくに
やかてもしらむ月のかけかな

たちばな

小西甚之助

うゑしより今いく歳かたち花の
たち榮えゆくかけをしそ思ふ

夕闇のころとしもなし降る雨に
にほひさやけき軒のたちはな

月の夜にはな立花のにほひ來て
わかたちならす庭のしづけさ

人訪はぬ夕なつかしたちはなの
にほひともなふのきの下風

苔ふみて朝けに見れは露なから

にほひこぼるゝ庭のたち花
夢さめてまたも昔ぞ偲ばるゝ
あかつきかたにかをるたち花
橘のさかり見よとやたれこめし
いよす吹やるまとのあさ風
なきすてゝ過ゆくよはの時鳥
聲のとよみにたちばなの散る
咲きてだに昔を偲ぶ立花の
散ゆく見ればいとゞなつかし
苔路ゆく人のもすそや匂らん
風にちり敷くたちはなのはな
橘の花ぞちりくるこのゆふへ
小簾ふきかへす風もかをりて

撫子をよめる長歌ならびに短歌

下田黍與

水無月のあつくてる日も
いさゝかもなやむ色なく
あしたには露のうるほひ
夕べにはかせになひかひ
こと草にたちまじりても
ほこりたる色をも見せず
唯ひとり野邊に立ちても
みだしたる姿を見せず
うつくしくあさ夕ゑめる
なでしこあはれ

みかつきのてる日に匂ふ撫子の
あかきこゝろはしる人ぞしる

漫録

女訓綾廼雛形（承前）

揖取菜彦

一、茶は飲のこすべからず。飲をはらは、茶碗を臺にのせ、ふたあらば、ふたをしておくべし。

一、菓子は、まづは、手をつけぬ方がよし。もし、主じ對座にて、念頃に勸められたらば參るべし、楊枝二本をそへたらば、はさみて參らる心し。一本ならば、さして參るべし。まづ懐紙を出し、さて楊枝を取り、菓子を懐紙へうけて、楊枝にて程よくおしわりて參るべし。殘りたらば、楊枝と共に、懐紙にくるみて脇へ置べし。

一、吸物盆銚子參りて、あるじより挨拶あらば、念頃に禮謝して、吸もの椀へ、そと左の手をそへ、右にてふしをとり、膳の縁へかけてふせて置き、椀をとりあげ、左掌にて持ち、右に箸を取り、一口吸ひ、中の品を參り、さて、椀を置きふたをすべし。敬ふべき先きにては、まづ、椀をいたゞき、そとさし置き、椀のふたをひらき、膳の縁へかけて置き、さて、右手に箸をとりあげ、左手をそへて取りなはし、はしを持そへながら、兩手にて椀を取あげ、左掌にうつし、一口吸ひて、中の品を參り、椀を置てふたをすべし。吸ものに、賞翫の鳥を出す事あり、鶴白鳥乃至雁鳬雉子鶉雲雀の類にても、鷹の鳥は賞翫なり。雉子は、誠に賞するなり。是は、足付の肉を焼鳥にして、別足と稱するなり。都て、賞翫の品あらば、箸とらぬ先き

に、兩手にて椀をとり、念頃にいたゞきて參るべきなり。鶴に黄筋、白鳥に水かき、雁に水かき、ひし喰に黒足、鳧に赤足、鶉に黄あし、雲雀に懸け爪を上置にする故實あり。此らは置は、多分、鷹の鳥の時の事なるべし。賞翫の時は、もし參り殘りたらば、其の肉をとり出し、懐紙につゝみて持歸るべし。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし、他の短を以て、反省の科となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせることの惡をなすべからず。

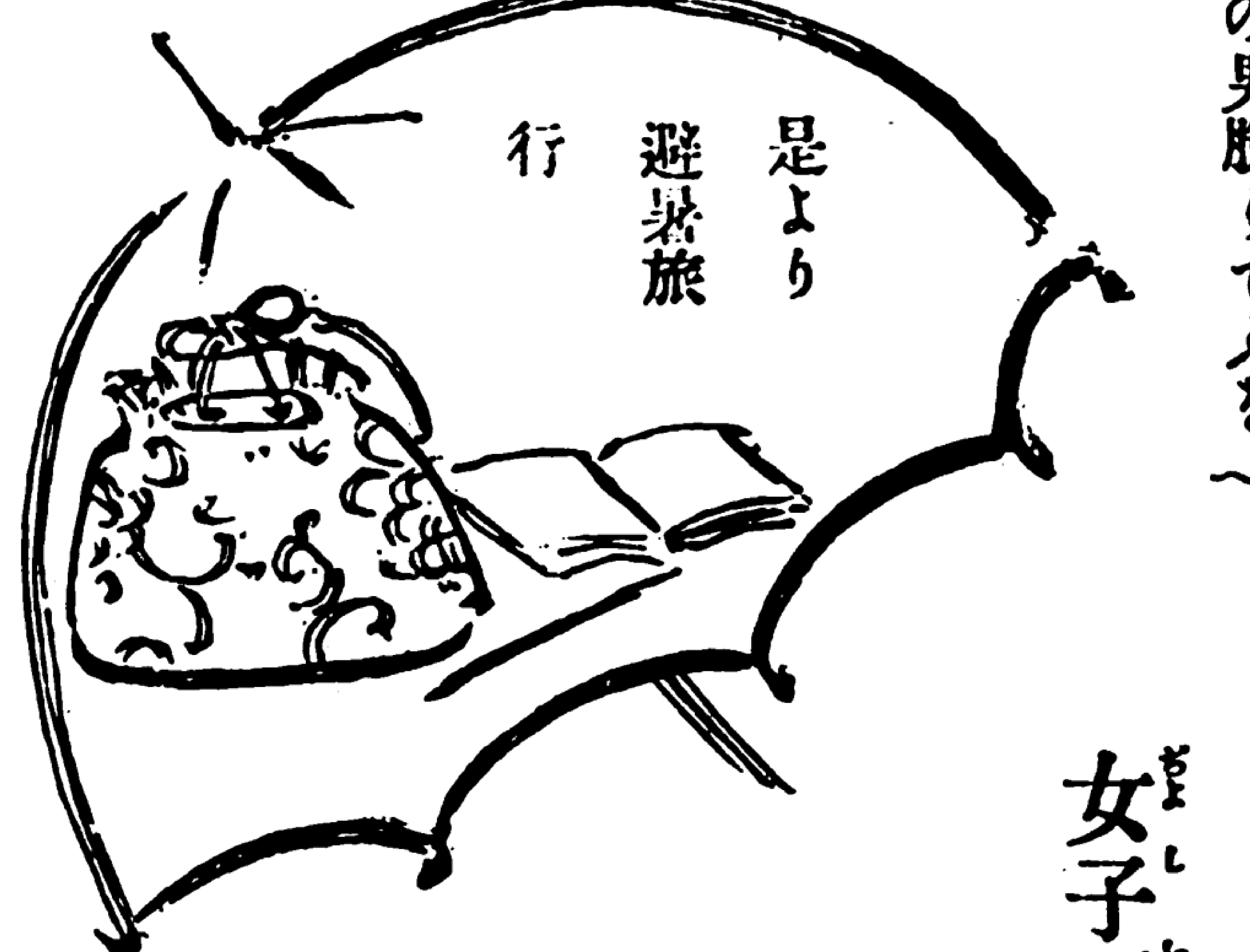
第四章　獨逸婦人

（其の一）獨逸婦人の氣質

賢母良妻として、獨逸婦人は、他に比類なき美質を有し、他の社會問題に柳眉を逆立て、口角泡を飛ばして狂奔し、或は、教育其の他の慈善事業に產を倒し、命を忘れ、或は、文學に醫學に實業に、步武堂々として、鬚ある男子と相角逐する米國婦人の如き傾あらざるなり。然れ共、國家大事の秋には、屢々、其の身を挺きんで、血腥き戰場を往來して士氣を慰め、小ジャンスダルク小ナインチンゲールの徒少なからず。之を要するに、外にあつて活潑の事功を樹たるよりも、內にあつて貞淑の德を硏くは、獨逸婦人の特長にして、此の特長や、能く猛烈火の如く、冷靜鐵の如きビスマルクを產み、機畧三軍を震懾せしめしモルトケを生じ、

又、博學萬古に秀で識力一世を壓倒せしゲーテ、カント等の大儒を出せり。之を夫の男勝りてふを以て、自から喜ぶものに比すれば、中々に、恪段の高致ありと云ふべし。

獨逸婦人が、家政に勤勉にして、能く其の夫に事へ、其の子女を愛撫し、一家常に春光駘蕩の中にあるが如きは、上金殿玉樓に起臥し給ふ邊より、下は陋巷寒村の、極めて貧しき際に至るまで、皆然らざるはなし。現に、今帝の皇后にして猶且つ皇子皇女の衣服の調理より、飲食の末に至るまで、一々心を用ゐさせ給ふ位にて、儉素自から奉じ、華美驕奢の風の些も見るべきなしと云へば、其一般下民の風尙の如きは知るべきにあらずや。



女子要書解題（續之部）

三浦千畝

續女則　十卷

著者は、大高坂芝山の妻成瀨氏なり。成瀨氏の傳は唐錦の下にいへり。さて此の書は、著者の名を成瀨氏とあらはしたれど、その實は夫芝山の著なるよしなり。即ち、跋に『いにし年わがせなそれがし、女則六卷、續女則十卷を書えらびしが、をんなもじの文にて、丈夫のいひいづべきことのはにもあらぬとや思ひけん、ことをわらはによせ侍りける云々、喬松

女一と見えたり。なほ思ふに、本書に廣く漢籍どもを引きて、ことごとしく論へるなどこそ、男の手をも借りたらめ。我國の歌書物語等を、面白くあやなして引きたるなど、女の筆ならでは叶はぬふしも見ゆ。要するに、此の書は夫婦の合著と見て可なるべきなり。目錄は左の如し。

一、新教訓　二、古教訓　三、倭教訓
四、裝來　五、姿見　六、寫繪
七、柳櫻　八、松楓　九、月雪
十、唐錦

續人名　女中之巻　十冊

著者は、釋法忍なり。法忍は、江戸品川東海寺高源院の開祖、怡溪和尚の別號なり。和尚諱を宗悦といひ、石州流の茶道を能したり。著書には此の書の外に、女中鏡、女中掟、女中大學、など教訓の爲に書かれたるもの種々ありといふ。正德四年五月二十日年七十一にして寂す。この書、出家の著述にはあれど、その言ふ所は、神儒佛の三道によりて教訓を述べたるものにてあらゆる女子の欠點惡德をあげて、これを矯正すべきを教へたり。

月次消息　津之部　一巻

鵜殿餘野子の著なり。餘野子は鵜殿孟一といへりし人の妹にて、紀伊公の奥に宮仕して瀬川とよべり。はやくより賀茂眞淵の門に入り、歌文を學び、三才女の一と稱せらる。即ちこの書は、師の仰によりて、女子の手本の料にとてものせしなり。眞淵の奥書あり。

これは、あるやんごとなき姫君の、御手本の料に書てまゐらせよと仰らるゝに、おのれいとしごとしげくて、とみにも文書くべからぬ

を、紀伊の宮のおまへに侍るよ野千は、おのがかゝること聞えおきつれば、かゝせて奉りつる也。眞淵

後に此の書を、橘千蔭がかきて、手ならふ人の料にせしがあり。上木して世に行はる。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

平經正

よつの緒にこゝろをこめし春うみの
なみこそ終のとまりなりけり

四の緒にも心をこめ、また、春海にもこゝろをこめたるにきこえて、いとまぎらはしきいひざまならずや。かくては、趣意とほらず。春海は、春海波といへる曲名によられたるなれど、波こそつひのとまりとは解しがたし。

平康頼

あはれともくみはしられず水くきの
なかれてかへるあとなかりせば

水莖は墨跡なり。されば、なかれてかへるとはいひがたし。結句、例のあとをいふこと叶はず。

僧都俊寛

とも千鳥あしずりしてもかへされぬ
うらみはもれしあとにこそあれ

千鳥のあしずりとは、笑ふに堪へず。三句、かへされぬといへるもをさなし。四句、うらみはもれしとあるも叶はず。結句、例の跡もつたなし。なにごとをかいひ出けむ。此の作者、跡といふ癖ありて、ともすれば、何々の跡出でくれど、大かたたがへり。

能因法師

旅ごろもきても見ざりし白河の
　せきにその名は猶とゞめけり

四句、句をなさず。そのといふ詞は、上にあることをさしていふべき詞なり。されど、こゝにては叶ひがたし。

源頼朝

立さわぐやしまのなみのひきかへて
　にはよくありぬかまくらの海

初句、立さわぐといへる、こはさわぎしとあるべきを、文字あまれば、かくいへるなめれど、みだりなり。二三句やしまの浪の引かへてとはいかゞ。浪にとあるべし。



作文雜話（三）

安藤晴晨

文體の區別

文體とは、文章の樣子をいふので、即、文字の用ゐ方、語句のつゞけ方等によりて生じた所の文章の特質をさして、文體といふのである。

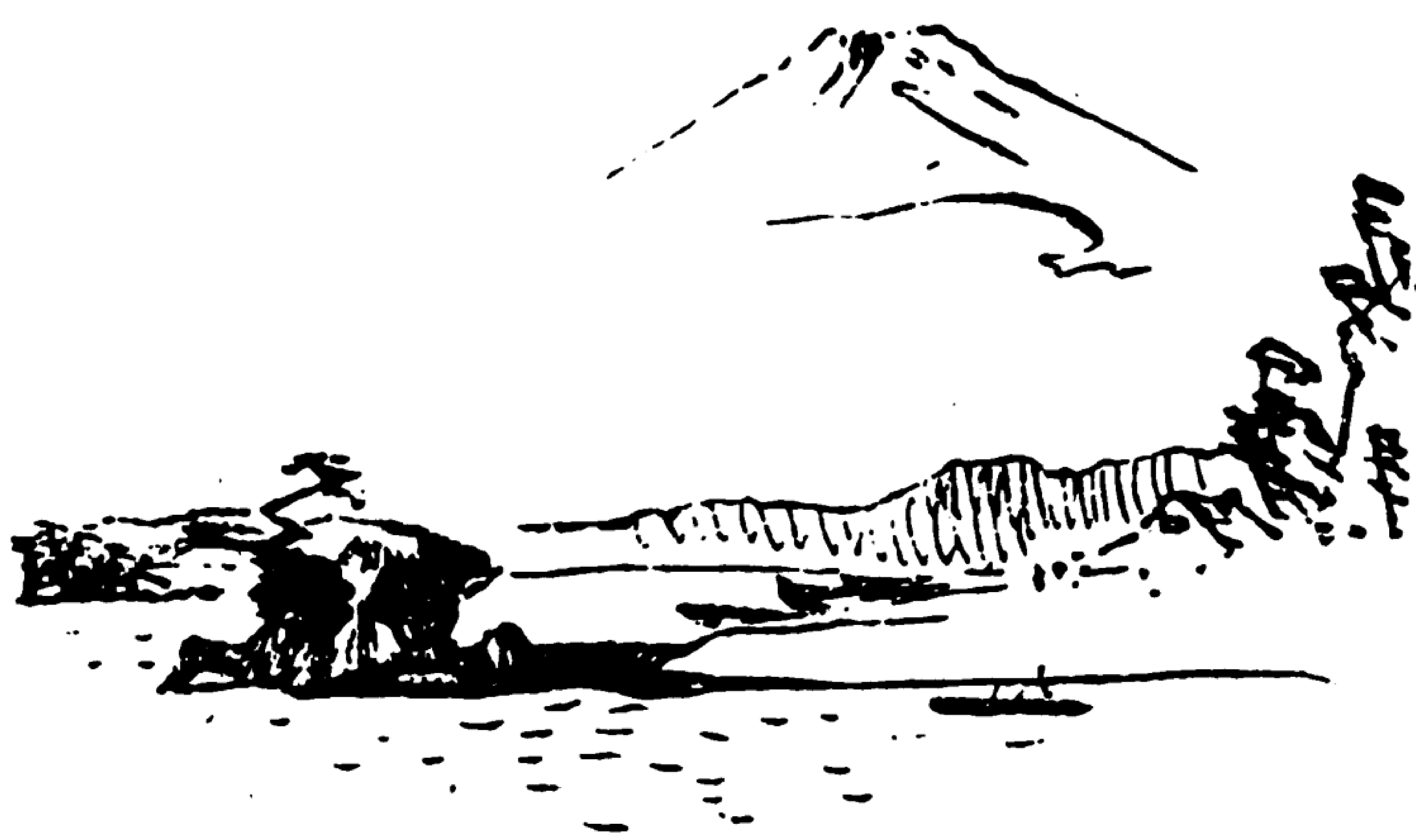
丁度、人にたとへていへば、人が四圍の境遇によつて風俗習慣を殊にし、生活の狀態を異にし、その衣服裝飾の爲、その言語動作の爲、又は、其の遺傳等の爲に、各國の人各地の人、皆、それ〳〵に、種々相異の點を持つて居り、たとひ、同一家族の間にでも、人々性格を異にして居て、個々の人格を形るが如くに、文章も、また、種々の方面より影響をうけて、さま〴〵の特質を有して居る。それで。文體を區別するについても、さま

ざまの方面より區別することが出來るとおもはれる。

それで、文體をわかつに、第一には土地によりて區別することができる。

これは、いふまでもなきことで、國が異なれば、おのづから、文體にも、さま〴〵の相違ができる。これは、同一國語を用ゐる國民の間では、その區別は明にはわからぬが、國語を異にせる民族の間では、今更いふに及ばぬことである。たとへば、わが國などでは、和文體漢文體などゝわけ、外國などでは、サキソン體ラテン體などゝいふは、このわけ方である。これは、さまでいふ必要はない。

東海道江の浦



第二には、時代によつて文體をわける。即、上古體とか、中古體とか、近古體とかいふのである。一體言語といふものは、一日も停止の狀態にはゐないもので、常に變遷してゆくものである。言語ほど變化をうくることの速なものはないくらゐである。それであるから、その言語の組立てゝ居る文章も、變化してくるは、自然の理である。然も、言語のみならず、人々の思想も、風俗も、習慣も、變遷してゆくから、おのづから一時代と次の時代とを比較すれば、大なる徑庭が生ずるわけである。然しながら、その推移は、一朝一夕に、急に甲より乙へと飛うつるものでない

から、明瞭に、これより以上が上古で、これより以下が中古といふやうに、區別をすることができない。然し、大體こゝらくらいが上古の體裁で、こゝらは中古の樣式だといふやうな事の見わけをつけるは、むづかしくない。これらは、後に、文體の歷史的變遷といふ條下に、くはしくのべる事としやう。

第三には、文脈、語格、用語等によりてのわけ方である。雅文體、俗文体、雅俗折衷體などゝいふは、この分類法に屬する。畢竟、わが國などでは、言語と文章語との間に、從來、截然たる區劃があつたから、この分類法の必要があるのであるが、彼の言文一致體などいふも、この下に列ねらるべきものである。こゝに、雅といひ俗といひ、語を用ゐたが、これは、たゞ、從來の文章語を雅といひ、俗語を俗といひ、わけたにすぎない。

第四に、人によりて文體をわける。これは、書く人々、各異なる思想の形式を有し、殊なる嗜好を有して居るので、その結果が、文章にもあらはれる。それを、人々によりてわけるのである。たとへば、紫式部の如き、幽艶にしてたをやかな文體もあれば、淸少納言の如き、簡潔にして力つよき文體もある。馬琴の如き一家の文體もあり、近松の如き獨特の文體もある。これらをいふのであるが、この區別の仕方は、とりもなほさず、第一流ともいはるべき人、または、一頭地を抽出た文豪によりてするのである。

また、この外にも、區別の方法は多くあるが、大體、必要なものは、上述の如きものであらうとおもはれる。

次には、文章の種類につきて少し述べやう。

古今叢談

山岡螢雪

（二十四）七月の異名

今年もはや半ばすぎて、年に一度の逢瀬をまちちぎりし星あひてふ七夕のまつり、あるは、例の、いとやさしき花ども打ちそなへて、魂まつりなど營むべき七月とはなりぬ。

潜確類書曰、七月建レ申孟秋者日月會二於鶉尾一而斗建二申之辰一。

晉樂志といふ書には、申は身なり。言ふ心は、萬物身體皆成就なりと注せり。

孟秋は、秋のはじめといふにおなじく、廣韻に、孟は勉なり。始なり。又、始は初なり。共に新秋を謂ふと、即ち、韓文に、

是時新秋七月天。金神按レ節炎氣除。

とありし此の月、節を立秋といひ、中を處暑となし律を夷則といふ、みな、月令廣義に出でたり。

大暑十五日斗指レ坤爲二立秋一七月節秋者揫也萬物于レ此揫斂也。

立秋十五日斗指レ申爲二處暑一言ハ溽暑將二退伏一而潜處也處上聲止也暑氣止息也是七月中也。

夷傷則法也言ハ金氣始肅萬物于レ此凋傷猶レ被二刑戮之法一也。

一說に、中院通茂公の御說として、傳はりたる書に、和歌には、初秋は七月十四日までをいふべしとあり。蘭秋は、每年七月十五日朝まだきより、我も人も各たがひに、故父母の追福のため盂蘭盆をまうけて、十方自恣の僧に供すといふに基き。爾雅には、此の月諸人親の墳墓に詣づるゆゑに、親月とも云ふとあり。纂要には、首秋、上秋、肇秋、蘭秋など見ゆ。說文に、肇は始なり、所謂初

秋の義と、提要抄には閏月ともいへり。

爾雅曰、七月爲レ相、疏云七月得レ庚、則曰二窒相一。

これより相月の名は出で、彼の有名なる淮南子の、一葉落て天下秋を知るといひし語よりぞ、一葉とも桐秋ともいふに至りける。

遁甲書云、梧桐立秋之日一葉先墜。

と、薛文清の秋の詩には、

露下梧桐一葉飛。

と見え、又、柳散といふは、晉史に、蒲柳の質秋に望で先づ零つとあればなり。

餞暑は、すなはち、夏の暑さを送る意にて、餞は字彙に送行の燕といひ、説文には、去を送るなりといひて、餞を、はなむけと訓するなり。

月令廣義曰、自二涼風一四十五日涼風至坤卦之風爲レ揭。

又曰、孟秋之月涼風至。

と、これ等より景風、涼颸、涼月などの異名は、普く世の人に稱せらるゝに至りたるならん。

又、新涼とか、初涼とかいふも共に、開機活法中立秋の詩によりたるぞかし。即ち、

新涼庭戶望二牽牛一。

と、あるは、また、

暑退三更雨。　涼生一夜風。

文開月を文月といひしは、清輔奥儀抄に此の月七日たなばたにかすとて、文どもをひらく故に、文ひろげ月といふべきを、略したるなりとあり。

されば、藏玉にも文開月とて、有家卿の歌に、

七夕のあふ夜のそらのかげ見えて
かきならべたるふみひろげ月

と、秘藏には、こをふ月と詠みて、

たなばたの心もいかにさはぐらむ

まつにあふべきふづきたつなり

こは、ふみ月といふを、略してふ月とはいひたるなり。更に家隆卿は、七夕月と詠みて、藏玉に、

かさゝぎのよりはのはしも心せよ
七夕月のころまちえたり

又、女郎花月ともいふにや、顯昭法師の詠とて、おなじく、藏玉に、

七夕のちぎりの色にたぐへてや
名をえしつきも女郎花月

と、なほ、誰もよく知るところの、

秋きぬと目にはさやかに見えねども
かぜの音にぞおどろかれぬる

の歌より、來秋、初秋風、けふの秋などの異名はおこりたるならん。あはれ、まだ暑さたへがたく、今しばしは去りがたけれど、ころしも秋風そよ〳〵と、身にしむ夕つがたともなりなんには、嘗、兼好法師が物の哀れは秋こそまされと、云ひおきし妙味も感ぜられ、いと坐に人の心も浮き立つ艶麗なる春の花よりも、靜けく朗かに清楚なる秋の月こそ、こよなき友なれと、窓の燈火、かげあはく、一天ぬぐふが如く、さえ渡る月の光を、文机にうけつゝ、文よむころの樂しさ、得もいはんかたぞなき。

（二十五）十三德

フランクリンといへば、今更事々しくかきたつるまでもなく、苟も、尋常小學の科程だに終へたる人ならんには、必ず知るところの偉人なり。おのれ、嘗、小學に學つゝありしころ、師の君より懇に教られたれども、小供心の朧に、其の意味は解せず、何となしに囀たりしは、此のフランクリンが自ら壁書として、實行したりといふ十三德にてありけり。このごろ、ふと或雑誌を散見し、坐

に我が老たる事も思ひ出でられ、又こを讀むに從ひて、有益の事ども少からぬやうに思ひしまゝ、せめては、處世の秘訣にもと、こゝにかゝぐることゝはなしぬ。即ち、

一、鈍くなるまで食ふ勿れ、度を過ごすほど飲む勿れ。

二、人を益せず汝を利せざる言を語る勿れ、冗舌を避けよ。

三、汝の所有物を一定の場所に置き、汝の事務を一定の時間にせよ。

四、汝の義務を爲さんために決斷せよ、決斷したる事は必ず之を成就せよ。

五、自他に益なき冗費を避けよ、即ち何物をも浪費する勿れ。

六、時を失ふ勿れ、常に有益なる事に之を用ひ、無用の行爲を遮斷せよ。

七、有害なる詐術を用ふる勿れ、思を公正にせよ。若し語らば率直に語れ。

八、害を加へ、或は汝の義務たる恩賞を施さずして、人を害ふなかれ。

九、極端を避けよ、損害を受けたるが爲に怒ること勿れ、よし怒るべき價値ありとも、

十、身體、衣服、居室に不潔を許す勿れ。

十一、些々たる事や、普通若しくは必至の事變に心を喪ふ勿れ。

十二、節操を守れ。

十三、聖人及びソクラテスに倣へ。

あはれ、諸嬢よ、其の取るべき處を取り、行ふべきを行ひ、以て、日常に應用したらんには、過ずくなからんかし。

大和めぐり

井上頼文

四日午後の記者は、森氏あり。ひるげをはりぬ。一番の車にて馳せぬけし阿知和君、いかゞせしにか。いまだ來らず。先立ちゆきし宇仁、澤田の二氏も見えず。案内の老爺も來たるに、いづくをさまよふにかなどつぶやく程、三氏は來りぬ。急ぎ立てゝ出で行く。目ざす所は、法隆寺なり。勅願門といふを入れば、靈堂あり。本尊は、觀世音なりとぞ。さまで大なりとにはあらねど、いたうふりたり。やゝ入れば、夢殿あり。八角寶球形の堂なり。此も觀音の安置せりとかや。推古の御宇、淡路の島に流れ寄りたる、沈水香を以て、聖徳太子の作り給ひし物なりとぞ。猶言ふやうあれど、聲ちいさくて聞えず。ひとり香込顔に案内者の先に立ちてゆく。茲に由縁書き付けたる札あり。あがめて手帳に記さむと睨み上げたる吾は一人とり殘され、皺なめしつゝ急ぐ。さて次は、舍利殿なり。太子二歳の時、南無佛と唱へて、開き玉ふ、掌の内より出でたる舍利なりとぞ。栴檀は、二葉よりかぐばしとは、うべもいひけむ。二歳の程より、かく怪しき術行ひ玉ひけむ御方こそ、いとくすしくも侍はれ（評、抑揚、最妙なり）かゝる方便にて欺かれし古の人は、いかに正直なりけむ。廻廊をめぐれば、四足門といふあり。門を出づれば、早市街なり。思ひの外なる心地せられて、案内の老爺に、法隆寺は、最早、これかぎりなりやと問へば、老爺訝しげなるおもゝちして、此所は、まだみ寺にあらず。寺の境内なりといふ。さて、其の區域はと問へば、八町四方なりと答ふ。呆れたる我が顔の、いかにおかしかりけむ。友どちは、

どゝ笑ひぬ。誠や市街ありと思ひしはあらず。ことゞく僧坊の立ちつゞきたるありけり。彼は善住院、此は福生院などゝて示す。一町餘りもやありけむ。門あり。中の門といふ。そを入れば、僧房、いよ／＼おびたゞし。中には、法隆寺役場、法相宗勸學院、巡査駐在所などいふ札もまじりて見ゆ。其の廣さ想ふべし。右手に當りて、鏡の池といふあり。さまで大きからず。いかに映りかすると立ちよれば、いたう打曇れり。それも道理。今日の空の景色を寫したれば。

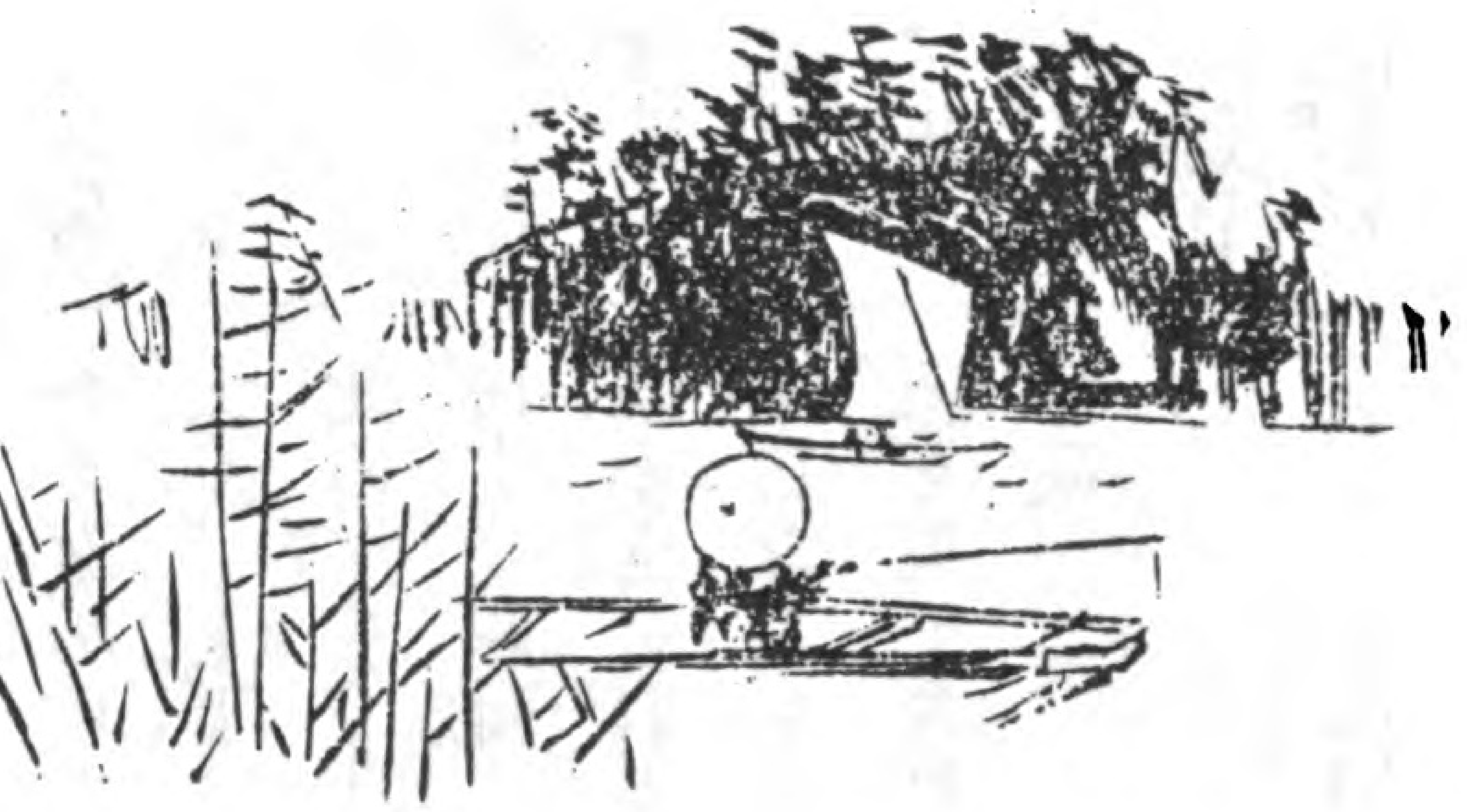
斯くして、二王門につきぬ。やゝ大きなる建築なり。いつもながら二王のつらつきはいかめしきものあり。高さ一丈餘りもやあらむ。右は赤く、左は黑し。手を振り上げたる、足を蹴上げたる、其のさま、之を見なば、如何なる妖魔も跣足なるべし。(評、跣足の跡、用ゐ得て好し)昔唐土にては、死人の側に、惡獸をふせぐ爲とて、異樣の物立たせたるよしは聞けど、佛の門番に、仁王を立たするは、抑如何なるいはれあるにかなど、平田翁の受賣說を、我が物顏につぶやく人もあるやうに見受けぬ。さて門を入れば、右に寶庫中に、金堂、左に、五重塔など見渡さる。中にも、寶庫は、柱ゆがみ、棟かたぶきて、誠や、千年餘を經にけむとおぼゆ。されば、瓦のみ近代の物の樣なるは疑しといへば、其は屢々修繕せし故ありと、案內者はいへり。金堂、又ふりたり。昔は、四方の柱、丸木ありしを、中世、左甚五郎のゑりたりといふ龍を巻き付けたり。五重の塔、亦高し。四五丈はあるべし。これ等、皆戶を閉ぢたれば、よそめのみにては飽かず。中には、寶物もおびたゞしと聞くを。いかで一見せばやと、口々にいふ。さらばとて、阿知和君使者とありてはせ行く。やがて一人の僧は來たり。

さて見料は幾ばくなるかととふ。學生の事なれば、今少しは引けといへば、僧、これに答へて、義俠心としては、只にても見せ申さむ（評、義俠心を唱へて利を貪る。これ方便に巧みなる所）されど、堂宇、宏大にして、中には古よりの珍器、寶物多し。これらを保存せむには、數多の費用を要すべし。さればこそ、かくは申すなれ。決して愚僧等の懷を温めむとにはあらずと、說敎口調甘くも十九人を言ひくろめたり。さらばとて從ふ。これより義俠心の一語は、旅行の道すがら、人々の口の端になむのぼりける。

聖壽院の入口にて、皆草鞋を解き棄てつ。やゝ行けば、うちはしあり。それ渡れば、寶庫なり。戶あけて、入る。やゝ、暗し。誠や、番僧は、居たりけり。左の方に、三四尺許りもやあらむと思はるゝ、五重の塔をすゑたり。此は我が國に、始めて塔を造る時の雛形にとて、百濟より持て來し物

なりとぞ。次に、屛風あり。光明皇后と、弘法大師との書かれたる經切を、まぜばりにしたり。下の書は、觀輝の筆なりとぞ。次に迦葉、彌勒の畫あり。ともに巨勢金岡の筆なり。猶委しく聞かんと、あなた、こなたより尋ぬるに、僧うるさしとや思ひけむ。物知らぬ田舍人などにてこそ、委しうは申せ。よくわきまへたる貴君等には、さまで申すまじければ、下の札を見玉へといふ顏、かへすがへすも惡し。次の堂に入れば、一入暗し。四方は壁にて、上の方に小な窓二つ三つあけたるのみなれば、よくも見えず。佛像、佛具の珍しげなるが多し。つばらに見たらましかば、益する事の多からましをと思ふも、いとかひなし。さて何故に、かく暗くはしたるぞと問へば、盜賊の恐れあればといふ。偸盜戒を說きて惡人を敎化する佛寺に、かく備への嚴しきは、あはれ佛もはや末となりし

よな。呵々。
この處見をへたれば、此方へとて、元の道を過ぎ、東堂といふに導く。佛を、まつなり。名は、しらず。こゝに、彼の僧、先座して、勿体らしく、說教を始めつ。さては守札の一枚も賣る下心ならむと見てしかば、やゝ、其の場を離れて聞くともなく耳傾く。僧、咳一咳とき出すやう、偖日清の間も、この頃は、いよ〳〵危急にせまりぬ。されば當寺に於きても、戰捷の祈禱など、をさ〳〵油斷せず。就いては、出陣兵士の爲に、此の度守札を出す事となしつ。こは聖德太子鏑守護とて、其の靈驗いちじるきものなり。貴君等にも一枚づゝ進上すべければ、御遠慮なく御受納あれとて與ふるけはひなり（評、此のこゝろ、稍義俠心を見る）はれも〳〵とて立ち寄る。今迄しらず顏せしわれも進上の一言に、さらば、こゝへもとてうけたり。慾界を離れぬ人々よと佛の心には中々におかしくや思ふらむ。我に取りては用なき佛札なり。いかなる心にてか、うけたりけむ。かくて先の入口に出づ。手に手に草鞋たづさへてゆく。次は、金堂なり。南向にて、入口に、釋迦三尊をすゑたり。此は、鳥佛師の作なりといふ。東西にも、まつれり。北面の虛空藏とやらむは、北條時頼の寄附したる物なりとぞ。其の他にも佛像多けれど、あまりくだくだしければ


利根川の涼風

もらしつ。殊に目とゞめつべきは、周りの壁にかき付けたる、畫像なり。千年以前の美術家、曇徴が意匠をこらしたるもの。以て當時繪畫の、如何に進歩したりしかをみるにたる。さて入口の右手に當りて、半たゝきにうづみたる饅頭形の石あり。こゝもくらくて、よくはみえねど、凡半疊敷許りもやあらむ。此は、何あるかと問へば、僧言ふやう、當寺には、三伏藏とて、かゝる物、三所にあり。されど、今其の二所はしれず。此は、昔よりありこし儘なり。傳へ云ふ。當寺、もし大事あらむに、その時聖人出で來て、之を開かば伽藍を再建し、佛道を興隆する事を得むと、さも得意がほに解き聞かす。そも如何なる妖魔をかひそめけむ。さるにても、かゝるわなにかゝりて、誠と思ふ愚民の、今も多きぞうたてき。さて、今迄は氣もつかで居たりしが、僧のいふにふと見やれば、げに此の堂の柱よ。丸木にて、堂の大きさにしては似げなく太きに、あらけづりしたるまゝにて、かなをかけたりとも見えず。俵なりに、中らは、太く、上下は、ほそし。此を推古式といふとかや。此の堂も、はや見をへたれば、次に五重の塔に案内す。四面、各佛像をすゑたり。又、鳥佛師、三國の土を取りて作りたるなりとて、須彌山の形を模したるものあり。最早、これにて、案内すべき所も果てたればといふに、かの義俠心の僧とわかれぬ。

一夕話（承前）

大宮兵馬

此の頃、姫路の近在なる林田といふ所より、大高六八郎、迎へに人おこせたり。（この迎へに來たり

しは、又次郎の兄、與左衛門の妻なり。)やがて、其處にゆきけるに、赤地錦の袋に入りたる備前景光の懐劍をば、三室の臺に置きて己れに與へつ。此の六八郎は、又次郎の父にて、軍學にも達し、薙刀の師範家なりしかば、己れも、暫し此處に留まり居て、此の家の妻どもに、共に、夜毎に薙刀を習ひたり。此の家は、赤穗の義士なりし大高源吾の後ちなりとぞ。

己れ、大高が家に在りし頃、大樂源太郎京都より長州へ歸る途なりとて、わざと立ち寄りて音なひたる由なりしを、内藤丁悦といふ人の、己れが在らざるさまに言ひなして、情なく歸したるぞ、後に聞きて口惜しかりける。かくて、此のあたりにても、己れをば梅田の姪なりと言ひて、人の噂さ高かりければ、また、姫路なる坪内が家に歸りたり。

さてある程に、大高又次郎は、京都に家を構へたるにつき、其の一族をも迎へんとするに、己れも、また、伴はれて京に上りぬ。

さて、其の年(文久三年)の八月十八日の朝にやありけむ。昨夜、京中物騷しかりけるに、大高いたく憤り且つ歎息して、御身は、女性ながらも梅田先生の姪ならずや。薙刀執りても、禁裡の御所をば巡り見給ふべかりしにとて、いと口惜しと思ひたるさまなりき。これは、彼の七卿の長州へ落ちられし時の事なりしとぞ。この朝、己れ二階より見下せば、長州義士の荷物どもを、其處の川より舟にて送りせる様なりしに、己れが身も、いかに成りぬべきかと、いと怖まじくて胸も潰れぬ。さて、此日よりは、大高も何方へ落ちにしか、其の行方知らずなりぬ。いとゞ頼む蔭なくて、其の心細さ言はん方なかりき。

此の後、己れは、水戸の留守役心得鵜飼吉左衛門の後室の許に便りて、心にもあらで明し暮らしたりしを、四月計立ちて後、三宅定太郎とて、叔父君の親しかりし人より文おこせたり。其處へ往きけるに、定太郎いへるは、粟田の宮の舊臣に、山田勘解由といふは、御叔父の門弟にて心厚き人なれば、御身を媒せんと思ふは如何にぞとありけり。かくて、此の年十月（文久三年なり。己れ二十二歳）初の亥の日に、鳴尾氏を里に賴みて、やがて今の山田には嫁ぎたり。

（[illegible]り）

宇宙の大原因は、唯一の目的に向ふて進む、然れども、其の由る所は、種々にして一ならず。

（西哲）



皇孫殿下の御降誕を祝ひ奉りて

（日本女學校生徒）

よろつ代をまつにそ君をかけて祈る
　　ちさせのかけにすまむおもへは　今井せい子

二葉よりちさせのいろそしられける
　　きみかみそのにおひしわかまつ　大畑千代子

朝日さすおほうちやまにひなつるの
　　こゑきくけふそうれしかりける　粱田ぎん子

ひさかたの雲井にたかくまふ田鶴は
　　あれます御子をいはふなるらむ　高瀬よし子

うこきなきおほうち山のまつか枝に
　　きみか代いはふひなつるのこゑ　増戸そで子

すめみまの今日あけませる初御こゑ
　　さつくにひさもふしてきくらむ　鶴峰やす子

ふし毎にこめたる千代のよろこひを
　　朽綱八千代子

たけのそのふにきくぞめてたき　福井てつ子

きみか代の榮にみ見せてわかたけの
いやしけりゆくおほうちのやま　桑田民野子

うれしさを何にたとへむすめみまの
うまれたまひし今日のことほき　高木ふみ子

君か代をうけつきまさむひこみこの
うまれたまひし今日のうれしさ　五味はい子

君か代のみそのにしけるわかたけは
みよのまかゆるしるしなるらむ　天野みち子

千代八千代かはらぬ松のわかみどり
あさ日のかけにいろまさりつゝ　諸岡節子

さしのほるあさひとゝもに彦御子の
うまれたまひしけふそうれしき　山田さり子

彦御子のうまれたまひしめてたさを
いく千代かけていはひまつらむ　中里權次子

彦御子のうまれたまひしめてたさを
いはふ今日こそうれしかりけれ　荒井家満子

千代八千代さかゆく御代と彦御子の
うまれたまひしけふそうれしき　太田ふじ子

千代八千代かはらぬ御代と御園生の
まつのみどりのいろそはりけむ　日野さし子

君か代のかたき根さしと知られけり
みそのに生ひし千代のわかたけ　河村よし子

千代八千代かはらぬ松のわかみどり
さかゆく今日そうれしかりける　中島あい子

彦御子のうまれたまひし今日の日を
いく千代かけていはひまつらむ

かきりなき天つ日つきをつたふへき
皇子あれましゝ今日そめてたき　寺本ふじ子

いはまくもかしこかれとも皇御子の
うまれたまひし今日のうれしさ　菅澤あき子

あなうれしこすゑに高きみどりはの
しけりそめたるたけのみそのふ　渡邊むつ子

こゝのへの御垣におふる千代のまつ
さかゆくいろをいはふけふかな　草間ぎん子

こゝのへのみそのゝ花もさきみちて
けにのどかなる御代のはるかな　小林たつ子

瑞枝さしいやさかはゆくみそのふの
こすゑとゝもにしけるわかたけ　多田まき子

あしたつの千代のよはひの數よりも
なほおひかれとほきまつらまし　橋本よし子

今日にあひてみやこも鄙も隔てなく
千代のともつるよひかはすらむ　笠原ふさゐ子

いろかへぬ竹のそのふのいやさかは
さかゆる御代におふそうれしき　野村さだ子

さしのほる朝日とゝもにひこみこの
ひかりをあふく御代ののどけさ　久住たみ子

あれませる御子をことほき鶴かめも
きみか代うとふけふのめてたさ　金子たつ子

かしこくもみはたかゝけて大御代の
今日をよろこふ四方のたみくさ　二神節子

わかみどり榮ゆくかけになほもまた
こ松おひいつるはるのあをやま　知野佐久子

よろこひはひろき此世にみちみたむ　荒井はる子

くにのいしすゑさだまりにけり

さきはなるみさりの色も千代そひて　安藤ひさ子
たけのそのふにいやしげるらむ

彦御子のおほみよはひはいらかへぬ　是永つる子
まつのちとせにあへむとぞ思ふ

あふき見る雲井にたかきこひのぼり　大澤ぶん子
けふなこさふくしろしなるらむ

みそのふにあまたの鯉のまひつれて　西村すゑ子
きみが千代よふけふのめでたさ

みそのふにおひそふ竹もかずそへて　飯田ちよ子
いく代めでたき代なかさぬらむ

あふきまつらし御子のうふ湯聞しより　木崎優子
ひなもみやこもにぎはひにけり

みそのふの千代のわか竹おひそひて　守屋しさ子
根さしさだむるくにのいしすゑ

さきはなる千代田の城のまつもなほ　鈴木なか子
いろましにけりけふのためしに

大御代にうまれたまひしひこ御子を　小原らこせ子
あふく今日こそめでたかりけれ

さかゆつゝいつもかはらぬわか竹の　廣瀬くめ子
いやしげりゆく御代ぞめでたき

千代ふとも動きなき代のためしさや　秋谷やす子
くにのいしすゑかたうましけむ

かしこくも我が日の御子の御降誕　栗原かれ子
いく千代かけていはひまつらむ

たかさこのなの上の松にひなつるも　神尾ひさ子
きみがさかにな千代ぞこそよへ

かしこくもあやにたふとき皇御孫の　關口きぬ子
あれいでてましゝけふのうれしさ

こゝのへの初こゑあくるひなつるを　細井きくへ
いく千代かけていはひなさめむ

日の本のいく代つきせぬいしすゑの　赤尾加津子
なりたつ今日ぞうれしかりける

はつのぼりたつる節句のめでたさを　林みれ子
いく千代かけていはひなさめむ

いく千代なかされ重ねてきみが代は　坂本きよ子
いよゝさかねむたかさごのまつ

うごきなき大うちやまのみそのふに　永松あや子
かげさしならふ千代のわかたけ

あさつかむ皇子のつき〳〵生れ坐し　稲垣さよ子
めでたきみよなといはふけふかな

おひつきて御子の八十つきあれ坐む　赤澤よれ子
きみがちとせのかはらざらめや

まちわびし日嗣の御子もあれましぬ　田中ひろ子
さかゆくきみが御代のひかりに

いはひなむ我おほきみのおほみよに　江川田りつ子
たけのそのふのしげりゆくかげ

おほうちの山のしつめにたちにけむ　小川たま子
いよゝうごきなきくにのみはしら

みめぐみにとつ國までもなびきゝて　岡田さだ子
さかねゆく世ぞたのしかりける

千代八千代祝ひかされてかはりなき　岡田すゞ子
きみが代うたふけふぞめでたき

いく千代も變らぬ御代のめでたさに　三部きく子

よろこびあひてうたふきみが代

小花きよ子

あなうれし竹のそのふのしげりきて
そのしたしばもいろまさりゆく

淺見さく子

代々つたふわが日の本はかみのくに
千代よろづよのすゑもかはらし

佐原みす子

おほみよにいさもかしこき皇御孫の
あもりたもふそくにの御はしら

今非すが子

このうへもなほ高からむ日のもとに
ひゞきわたれるよろづ代のこゑ

川勝しな子

うゑしより日毎にまちしかひありて
ことほきいはふその〻わかなへ

七月廿日兼題

松下泉

天　東京市麻布區宮村町七十三　幸徳千代子

やま松のかげさへ見えてすみわたる
たにのしみつはあつとしもなし

評に曰く、すみわたる、谷のし水の、こゝろふかさもくみしられていさめでたし。

地　大隅國肝屬郡鹿屋村中水　山田稍子

夏しらぬまつのこかけのこけしみつ
ときはにわきてすゞしかりけり

評に曰く、松かけのし水、よどみなくながれて、しらべたかし。

人　下谷區二長町五十一番地　宗　佝子

おくやまの松のしたつゆなかれあひて
いはにせかるゝおとそすゞしき

評に曰く、岩にせかるゝ、水音、こゝに高くきこゆはべりぬ。

人　東京本郷龍岡町日本女學校生徒　谷崎まつも子

たちよりてむすぶいつみに秋みえて
まつの木かけのかぜのすゞしさ

評に曰く、松ふく風、わきてすゞしく身にしみはべり。

秀逸

東京　河田いし子

枝しげみてるひをさふるまつかけに
あふきもすてゝくむしみつかな

○　陸奥　吹田たけ子

立よりていさやむすばんやまかけの
あもあつかしきひめが井のみつ

○　筑後　武田鶴子

たちよればまつのこかけの岩しみつ
あつはなかれてすゞしかりけり

○　東京　新井やま子

てる月をまつの葉こしにやとしつゝ
かけおもしろきいはしみつかな

○　熊本　新居しつ子

みな月のてるひもよそにわきいつる
おとさへすゝしまつのしたみつ

○　東京　稲井茂子

ましみつの松のしたゆくおときけは
むすはぬそてもすゝしかりけり

○　東京　片山ふみ子

結ふ下にみとりのまつのかけゆれて
すゝしさまさるやまの井のみつ

○　東京　川村かう子

岩清水むすふたもとはなつなから
あきおもはゆるまつのしたかけ

○　常陸　荒野たえ子

おくやまの岩井のしみつそこきよみ
なつとしもなきまつのしたかけ

○　東京　竹越こう子

結ふ下もてはるはかりにまつかけの
こけのいはまをかよふましみつ

○　東京　清水てふ子

生ひしける千歳のまつのしたかけに
すゝしくかよふたにのましみつ

○　東京　岩田よね子

日くらしの聲するまつのしたかけに
わきいつるみつの音のすゝしさ

○　東京　加藤まさ子

やまさとの岩井の清水むすひ上ぐる
そてにすゝしきまつかせそふく

○　東京　甲斐たま子

松の葉のみとりをわけておちたきつ
たきのし水のきよくもあるかな

（以下原稿到着順）

松かけのいはまのしみつむすふては
なつもよそなるこゝちこそすれ　隈川與根子

山まつのおほ木のもとのましみつは
くむてもこほるこゝちこそすれ　佐野亭子

松かけのいはゐのしみつくむたひに
こゝろすゝしきあさかこそ思ふ　德永萬壽子

旅ひとのしはしあつさもわすれけり
しみつわきいつる松のしたかけ　德永廣子

柴ひこもなつなわすれてむすふらん
日かけもうときまつかれのみつ　吉田秀子

さらてたに夏をよそなるまつかけに
わきていつみのなかれすゝしさ　野口信子

わたかまる瀧とみねつるまつかれに
わきていつみのおとそさゝやく　佐々小琴子

松かれのこけのまし水むすひあけて
たへぬあつさをなかしやりつる　佐々有隣子

岩はしるきよきいつみをむすひつゝ
きくもすゝしきまつかせのおと　山根久子

ひともとの松の木かけのこけしみつ
かけうつしつゝいくよ經ぬらむ　中部瑞子

ひともとの松のこかけにわきいつる
いつみのおともすゝしかりける　中部滋子

たちよれはなつもとまらて苔しみつ
わきてすゝしきまつのしたかけ　戸賀崎治子

なつなしといはまのしみつ松か根を
めくりなかるゝおとのすゝしさ　戸賀崎久子

なくせみのこゑもしくるゝ山もとの
しみつすゝしきまつのしたかけ　永井さい子

かへるさもなつもわすれて松かけの
いつみのもとにけふもくらしつ　山田米子

松かけのしみつにあきややとるらん
むすふたもとになつなかりけり　稲原菫子

たちよりてむすへはすゝしまし水に
ちよまつかねのかけもうつりて　鏡山増代子

いこふとてまつの木かけに立よれは
なつをよそなるみつもありけり　田代艶子

こゝろしてくめようなゐこそこすみて
きよくさゝめぬまつのしたみつ　田代綾子

こけむせるまつの岩根をましみつに　北島松子

こゝろうつせは先つそすゝしき

やままつのみとりのかけをゆく水は
千代のしつくやおちそひにけむ　北島功子

にこりなき底にもまつのいろみえて
したかけきよきいはしみつかな　江川田りつ子

松か枝のみとりすゝしきしたかけに
なささへすめるいはしみつかな　山本さきは子

あつけさをこゝに忘るゝやままつの
かけよりいつるまつそすゝしき　中村いそ子

すゝみすと松のこかけに立ち寄りて
きよきいつみをむすひつるかな　阿久津たけ子

すゝみすとたちよる松のしたかけに
そこさへきよきやまのゐのみつ　岡井かれ子

枝ひろきまつのみとりもかけみえて
すゝしくすめるやまの井のみつ　漆原くに子

夏の日もあつさわするゝまつかけに
わきてすゝしきやまの井のみつ　川井田草子

松かけのいは井のしみつきよけれは
むすはぬそてもすゝしかりけり　脇坂みれ子

わきいつるいつみの水のすゝしきは
まつのこかけにあきやすむらむ　中川さし子

松かせのおともすゝしきしたかけに
きよくもすめるやまの井のみつ　天野みち子

松かけのいつみのもとにたちよりて
こまにみつかふひともありけり　森田もと子

夏の日もすゝしかりけりまつかれの
いはまをもるゝましみつのおと　松尾せい子

松かげにしみづながれてなつの日も
　あつさわするゝやまのしたいほ　伊勢村春子

なつの日も枝葉しげりてすゞしきは
　しみつながるゝまつのしたかげ　田村多可子

松かげのうごくな見ればなつのなき
　みつのそこにもかぜやふくらむ　村上操子

かげうつる清水むすへはまつかぜも
　そてにかよひてすゞしかりけり　上原のぶ子

山まつの木のしたみつなしたひきて
　けふはなつこしもおもほえぬかな　服部倫子

立よればてる日もゝらぬまつかげに
　わきてすゞしくむすふましみづ　坂本登子

岩つたひながれもほそきまつかげの
　しみつむすびてあつさわすれむ　佐々富枝子

みどりそふ松の木かげなながれゆく
　しみつそこにすゞしかりける　岡山良子

吹く風もいさゝすゞしきまつかげに
　しみつむすへはそでそさむけき　武たけ子

いさあつきなとしいへさまつかげに
　しみつくむこそすゞしかりけれ　横井幸子

松かげにしみづくむ身のすゞしきは
　なつさしにこそおもはさりけれ　村瀬花子

さきはなる松のみどりのしたかげに
　わきてながるゝいはしみつかな　金沢文子

きくだにもすゞしかりけり松が根の
　いはゝしりゆくやまみつのおと　森ふみ子

まつかげのもとにいこひて岩間もる　森波那子
　しみつなごともすゞむころかな

松かげのみどりもふかきいはしみつ　関口房子
　むすはぬさきもすゞしかりけり

夏しらのかぜもかよひてむすふ手も　青木たま子
　いさゝすゞしきまつのしたかげ

みどりこきまつが木かげのまし水は　伊豫田ふく子
　なつをなかしてすゞしかりけり

しみつわく松のこかげにたちよりて　田城きわ子
　しはしあつさもわすれけるかな

まつ陰にしみつながるゝおさきけに　柳田益子
　なつはありともおもはざりけり

老まつのみどりなうつすいはしみず　酒井こらく子
　船へはなつもさむくぞありける

やま蔭はかたみにくみてたのしけに　中館やう子
　あつさをあらふまつのしたみつ

さきはなるまつのしたゆくまし水に　吉澤よし子
　千させかはらてわきやいつらむ

立よりてすゞしきまつのしたかげに　太田みつ子
　しみつむすびてなつなわするゝ

おもふさもうちつれたちておすもがな　岩田春子
　しみつくまなんまつの木かげに

やまのゐのしみつながるゝ松かげは　椎野秀子
　またなつながらあきかぜぞふく

やまさとの岩井のしみつむすふてに　椎野嵩子
　かよふもすゞしまつのしたかぜ

松かげのいつみのもとにたちよれは　椎野清子
　かたへあきなるこゝちこそすれ

むすふてにあきかよふらん松かれの　しみつのもさにあつさわすれて　椎野こし子

わきいつる松の木かけのこけしみつ　なつをわするゝさころなりけり　野中朝子

松かけにながるゝみつのすゝしさは　またきにあきのかよふなるらん　楠竹子

うつもれしふるはかきわけ結ひけり　いはまをもるゝまつのしたみつ　鈴木光枝子

おひしける松の木かけのいつみこそ　なつをわするゝこころなりけれ　赤尾さかゑ子

やまゝつのしつ枝をひたすいは清水　いく千代かけてかゝみさは見む　名取正代子

立ちよりていまやすらはむいく千代も　たゆぬいつみのまつのしたかけ　磯山きやう子

まつかけにわきいつる水の清けれは　むすはぬそてもすゝしかりけり　前田ひさの子

いこはんさ松のこかけにたちよれは　きよきいつみのわきいてにける　松本しん子

わきいつる松のしたねのいはしみつ　むすふたもさにあきやかよへる　垣屋かね子

てる日をもへたつる松のかけしめて　むすふしみつになつそわするゝ　鎌田光惠子

風かよふまつの木かけのいはしみつ　なつをよそにもむすひつるかな　林環子

さきはなるまつの木陰にわくみつの　おさこそ千代のしらへなりけれ　片山あや子

わきいつるいつみの水もこゝさらに　杉浦いさ子

まつかけのいはかき清水おさきけは　すゝしく見ゆるまつのしたかけ　鍋田よし子

松かけにあつさわすれてやすらへは　むすふたもさもすゝしかりけり　宮田けい子

松か根をあらふいつみはほさりさへ　いは間のしみつおさのすゝしさ　新海わか子

いは清水たもさすゝしく結ひあけて　なつさもしらぬそてのすゝしさ　戸塚てつ子

さら〳〵さいはかれつたふこけ清水　なつもよそなるまつのしたかけ　吾妻ちか子

流れいつるいつみむすひて夏の日の　むすはぬそてもすゝしかりけり　菊地かれ子

つくはれのみれの老まつかけ見ねて　あつさわするゝまつのしたかけ　重田たね子

暑しさてたちよるまつのしたかけに　いは根をつたふみつのすゝしさ　砂川よし子

たへかたき暑さゝけんさたちよれは　おさすみまさるたにのましみつ　柏木はるゑ子

松かけのいはまをくゝるましみつに　かけもすゝしきまつのしたみつ　金田さみ子

わき出つる松のこかけのましみつに　なつのあつさもわすれはてけり　藤浜たま子

松かけのいはまをくゝるましみつは　あつさもよそになかしつるかな　杉山君代子

眞清水をむすひ上けたるまつかけは　またきにあきのこゝちこそすれ　鴻巣さし子

おふきのかせもわすられにけり

松かげのいはほのいつみむすびつゝ
はやあきゝぬるこゝちこそすれ　清水千代子

常盤なるやまゝつかげのいはしみつ
むすびてなつなわすれけるかな　林　きみ子

道の邊のいつみながるゝまつかげに
すゝみにはなつもわすられにけり　倉田まつ子

やまさとの老木のまつのしたみつに
そでぬらしつゝあそぶたのしさ　中村里起子

夏の日のあつさわすれぬすゝしくも
たえすながるゝまつのしたみつ　木間ちゑ子

うつせみの聲するさとのまつかげに
すゝしさまさるたにのましみつ　濱口ころく子

清水もるやまゝつかげにしはしゐて
いこへは夏もあきかとそおもふ　關口きせ子

そこ清くながるゝたにのましみつに
うつるもすゝしみとりのまつかけ　州ハそて子

道のへのしみつながるゝまつかげは
たちよるのみもすゝしかりけり　今井りう子

夏の日のあつさわすれぬやまゝつの
したになかるゝましみつのもと　森脇さゑ子

松かげにしみつながるゝおときゝて
なつのあつさもわすれけるかな　佐藤わき子

さきはなるまつのかけなる眞清水を
むすへはなつもわすられにけり　宮武てる子

さきはなるまつしたかけのいはし水
みさりなつゝよいふのすゝしさ　沼井あい子

わき出つる松のしたみつすゝしさに　篠塚たけ子

なつのあつさをわすれけるかな

松かげにむすふいつみのすゝしさに
たまなすあせも消にはてにけり　堀内ふさ子

夏の日のあつさわするゝましみつは
さきはのまつのしたにこそすめ　林　美保乃子

眞清水にまつのさきはのかげ見えて
なつなよそなるこゝちこそすれ　栗田のぶ子

さきはなる山まつかけにたちよりて
たもとすゝしくむすふしたみつ　野口露子

松かげのいはまをくゝるましみつを
むすへはなつもわすられにけり　河村すゑ子

そこきよみ松のみとりのかけみえて
むすふもすゝしやきよのゐのみつ　田尻保代子

千代かけてみさをかはらぬ松かけに
たえぬいつみのわき出つるかな　堀川けん子

いはまよりもるゝ清水のすゝしさを
こすゑにむすふまつかせのおと　山本梓子

松かけをそこにうつしていはしみつ
なつはいつこになかれゆきけん　竹村竹里子

松かけのなかれすゝしきましみつを
むすふ今日こそなつなかりけれ　岡山ゆき子

わきいつる岩根のしみつくみあけて
すゝしさあかぬまつのしたかけ　坂本てい子

松かけのいはまのみつのすゝしさに
むすふたもとにあきやかよへる　穂積稔子

わきいつるいは井の水もことさらに
まつのかけこそすゝしかりけれ　梅村米子

わか庵はまつの木かけにわきいつる　しみつになつはすみよかりけり　大阪　谷信子

松かけなくゝろいつみをむすふ間は　あつさもよそになかれけるかな　高石登代子

岩つたふいつみのみつを汲みあけて　しはしやすらふまつのしたかけ　大谷津米子

千代ふへき松のしたゆくましみつは　御代のさかはさゝもにつきせし　鈴木廣子

松かけにしはしいこひていはしみつ　むすはて見るもすゝしかりけり　濱井文子

こほりうる際もきこはすちりの世の　ちりもうかはぬまつのしたみつ　川畑常子

山まつの水かけさめ來ていはしみつ　くむひさおほくなれるなつかな　川畑芳子

松かけのきよきいつみをむすひつゝ　ひさのこゝろもかゝれさそ思ふ　浦野こう子

松かけのうつるいつみのもとに來て　なつのあつさもわすれけるかな　馬渡まさご子

松かれのこけむすいはにわくしみつ　なかれのすゑもきよくすむらん　合田きのへ子

枝も葉もしけりあひたるまつかれに　きよきいつみのわくそうれしき　瀧本春子

すゝしくも松の木かけをなかれゆく　小かはにうつるつきのさやけさ　横地かすみ子

苔むせるやまちたさりておさきよき　いつみをむすふまつのしたかけ　櫻井方子

むすふ手の袂のあつさもわすれけり　村正小鹿子

きよくわきつるまつのしたみつ

まつかけの岩間をもれてわくしみつ　むすふこゝろそうれしかりける　長岡さめ子

なつの日もすゝしき松のしたかけの　いはまにきよきいつみわきけり　和田岐子

いつきても吹く風すゝしまつかけの　いはゐのしみつふきかよふらん　曾さし子

夏しらぬやまゝつかけのすみよきは　のきはにちかきしみつなりけり　早川多爾子

夏かけさたのみていりしやまさとの　まつかれしみつわきてすゝしも　森田さも子

日くらしのなく松かけのましみつは　またなあきめくさころなりけり　三宅中枝子

月かけのやどれるまつのこけしみつ　ひるのあつさをこゝにながさむ　河合縫子

松かれをなかれいつみはいつみても　むすひてすゝむひさそたはせぬ　服部萬子

やまかけはすゝしきのみか岩間より　なかれてきよしまつのしたみつ　服部正子

七月廿日兼題

水邊納涼の記

地　大阪東區平野町三丁目百十一番屋敷　柳田益子

さしも照りはたゝきし日のあしと、山のはにしつ

み、庭のせゝらぎ、軒の若葉、涼しう覺ゆるまゝに、すゞろに、流れにそひて行くほどに、網島のほとりに來りぬ。こゝは、市たちの物閑かしきをさかりて、東は生駒山を望み、南は大磯を見さげ、むかつ岸にいかめしく立並べたるいらかは、是なん、黄かね白かねの花さくてふ造幣局なりける。こなの堤の木立は、皆櫻にて、やよひの頃は更らなり、みつえさす若葉の朝も、いひしらずをかし。こなたの堤のみやしろにしつまりますは、さくや姫の大神にや。人皆櫻の宮とたゝへまつる。其のわたりの木〳〵は、櫻のみなりければ、吹く風も芳しき心地して、涼しさの滿りたる所なりけり。是のわたりは、茶くれかしのなり所とて、高くひさく立渡されて、ながめいとおもしろし。此のふた岸をみ帯になして、いと滑らに流るゝは、東のふみ路、都の河原と、共に世に名たゝる浪花ほり江の、淀川なりけり。きしの青柳汀の水草、風にそよぎて、散りみだるゝ露は、さながら、星かとなん見まがへらるゝ。川中には、やかた船あまた上り下りして、火かけ流れにかゞやき、もののね浪にひゞきて、床しきに、打あぐる花火の光り、春ならねど、夕やみの空に散り、氷賣る家の小旗、秋はまたきに軒はの風になびきて、物皆涼しからぬはなし。かなたこなたと立ならすほとに、さやけき月の朝は大橋の上を渡り、あつさは浪のうたかたと共に消えはてぬ。また、あしやの里覺えて、木のまに見ゆる螢の光り涼しく、二つみつよつ亂れて、袖のわたりにきらめき、汀近うたく水鶏の聲、さやかに聞ゆなと、とり〳〵いひしらすあはれ深く、またなき夜のさまにて、わかぬものから、更け行くこの夜はを、いかにせむ。かくなから明すもあらなん淀川の夜すがらみれとあかぬながめや

地

東京市神田區錦町三ノ十五三輪田方　柴田のぶ子

さらでだに、萬、怠りがちなる身の、まして、夏となりてよりは、文讀むわざも、物かく事も、なか〳〵に、物うくて、たゞなまぬるき、うちはの風をのみ、便りに、かくても、其日をぞ送りきにける。或る日のことなりき。暑さいとはげしくて、空には、たなびける雲もなく、梢にはそよとの風もなく、實に、南のあつき國も、かくやとおもふばかりなるに、たへかねて、心あひの友どち二人三人、打さそひ、夕日かけろふ頃より、屋方船ならぬ小舟に、棹さして、江戸川を水上の方にと漕

ぎ上りぬ。川巾僅かに、三間にも滿ざる小川なれども、さすが、川風の涼しくて、汗あえたりし、おのが身は、いつか冷え渡りて、單への衣も、重ねまほしき心地さへぞせられたる。兩岸の櫻、今は、青葉しげりたるに、木の葉がくれにもれくる月かげの、いと清く、あたり飛びこふ螢火の、清き水にうつりたる、えもいはれず。關口におつる瀧のひゞきをきけば、涼しさの、いとゞ、身にしむやうにて、心地よさ、いはむ方なく、自から、氣も、心も、すが〱しくなりゆきぬ。時の過ぐるをも知らず、あくがれし間に、みじか夜は、いつか更け行きて、早や十二時とおぼしき頃にもなりぬれば、名殘りはつきざれども、いつまで、あるべきにもあらねば、水の流にまかせて、家路をたどりぬ。

人　長野縣長野市大門町　吉澤よし子

草木も枯なんばかりの此頃のあつさを、某川のほとりのすゞ風に、はらはせばやと、親しき友垣三人と、やう〱にたどりゆきぬ。あなうれし。夏ともおぼひぬばかりの、すゞしき風は、いづこよりか吹き來たるらん。と見れば、川の北がはゝ、一面の田にして、そよ〱と吹く風をおだやかにうけつゝあり。南がはゝ、松杉しげれる、山又山にして、木々の風音、山ばとの聲に、和して聞ゆ。川は、此の山にそへて、曲り曲りていと靜に流るるなり。清き水、あふるゝばかりに滿ちたるを、みどりのかげにて、なかばはおほへぬ。咲きみだれたる草花に、くひなの遊びたはむるゝ樣の、水にうつりたるに、赤き鯉二ッ三ッ出つ入つ樂しげに遊べり。きのふの苦しさに引かへて、今日の樂しさ。かしこにはしり、こゝにつどひて、遊びたはむるゝ折しも、すげの小がさうちかつぎたる人々の、高らかに話しながら、歸りの道を急ぐに心づきて、進まぬ足を引立て〱、もと來し道に立ち出づれば。さすがに、風もあはれとみてか、そよそよと送り來れり。

人　東京芝區芝公園地五號二番　隈川曾野子

日中の暑さいと堪へがたく、まして、空ものこる隈なくはれ渡りて、梢に音づる、風もなしやあはれ、ひと雨ふれよかしといのりつゝ、むなしく、空うちながむるのみにて、文よまむにも、心すゝまされば、ひとり、かうじはてつゝ。居るに、やうやう、照りはたゝく日影も、西に傾きぬ。夕涼がてら河邊をそゞろ歩きせば、日の中の暑も忘れ

めと思ふ折しも、親しき友垣の、いぶせき宿を音づれしかば、いざあひて、共に出立つ、やがて、さやかなる月の、ほの〳〵と、さし昇りぬ。此宵は、望の夜の月とて、其の光り水の面を照し、さながら、珠のおきたらん如く、あるは、黄金のわき出でたらんともあやまたる。まいて、川邊なる青柳の糸の、風になびきて、其の間より見えつかくれつ、月影のもるゝ美しさ、つたなき筆には、盡さんやうもなし。夜も更けゆくにしたがひ、月は、いよ〳〵澄みわたり涼しさ、一入まさりしが、いかで、女の身として、夜更くるまで、外にあるべき。名殘惜しみつゝ、家路をたどりぬ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

中かたらひぬ友たち二人三人さそひなひて、青柳のいとうちさらす、劉淵川の下津瀬に、小舟うかべて、釣たれつれど、瀬弱しきて、上津瀬に、棹さしのぼりけれど、こゝは瀬速くて、釣にふさはしからねば、逝水にまかせしに、何おどろ、中津瀬にぞ、舟はかゝりける。居士ならねども、赤か岩の松かげに月さしかかりて、さながら、八咫鏡のごとく、すがすがしき光をはなちけり。あらおもしろ、あなさやけさ、釣竿かきやりて、友人は、古の歌でともうち誦したり。げに、うるはしき影に、みな人、夏の日ごろのあつさを。うちわすれ、歸路さへ。おもはずなりぬるも、いとをかしや。

中郡瑞子

しろこしびさの、こがれた、さからすてふ水無月の中つかたの、朝より、一しほ暑さまさり、終日扇をおきあへず、汗しぼりつゝ、おぼつかなくも、やう〳〵、一と日をおくりにし夕、夕げをへて、妹伴ひ、團扇片手に、足の運ぶにまかせて、そゞろありきするに、暑さは、一足づゝにゆるびくるに、五十鈴の川邊は、又一しほならめさ、細みちたどりて、みぎはに出づるに、思ひしもしろく、肌すく風は涼しく秋におさづれ、水あし靜に月をうつして流れ、名もしらぬ虫のいと妙なるねをたゝへて、草むらにすだくあれば、後れし螢三ツ四ツ二ツ流れに姿うつしつゝ、かなた、こなたに、飛かふ。妹は、團扇かざして、螢ないめぐらし、なごするほどに、涼しき川風につれて、笛のねはるかに川上に聞ゆるに、いとゆかしくて、其の音をとめ行ば、かなたの河岸、一と本の老松の、梢の樹ごしに川をおほひし、とある岸べのたかどのに、彼たおゝ乙女子の、さかやにてらす月に向ひて、調べ出てしにてぞありける。其しらべのたへなるに、耳かたぶけてイむに、歌ひ出づる聲は、澄み渡れる流の水と清みたゝへ、かなする音は、月にかよいて、水晶の如く。梢を渡る松風さへし面白く、月は、いよよ澄み渡りて、まどかなるおもはに、笑をたゝゆるかさ、あやしまれ、見るもの聞もの、一として、涼しからぬはなく、すが〳〵しさも、一しほまさりて、夜の更くるもしらで、ついゐしに、夜半のかは風身にしむに、おどろきて、淺茅生の露のしら玉、踏みしだきつゝ歸りぬ。が其のちは、暑さの堪へがたき度毎に、其の夜の事ども思ひ起すに、いと涼しき心地せらるゝぞおかしきや。

稲原清子

てりはたゝく、昨日今日の、暑さの耐へがたければ、一向、夕べ待ち付け、湯あみなどすまして、心あひたる友ごち打ち連れ立ち

て、程遠からぬ伊世知川邊に遊びぬ。岸邊の柳はなよ〳〵と水にたれ、風おのづから秋を吹き、我の暑さを拂らふ涼しさに、身の汗さへゐる心地して、いさうれし。水際の鷺さへさまよひ、出でて、風に飛びちるさま、川の面にうつろひて、黄金の砕くるかと疑ふ許り。折から、いざよひの月の、木々の間より洩れて、すがしう水の面をてらすなど、中々に、言ふばかりなく、かへるさをも忘れて、橋のほとりに立たつむ。例のもの愉ちたる心にと人々のわらふもことわりなりかし。

松尾せい子

照り渡りたる庭の梢には、蟬の聲かしましきものから、一しほ熱さをそへ、軒の小簾吹く風もなし。あまりに苦しければ、妹と共に小川の岸に至りぬ。みぎはの柳は風に靡き、生ひしげりたる夏草は、秋待つ蟲の宿とやなりにけむ。咲けたかきさゆり花、緑の中にまじり咲けるあはれさよ。さゞれみづいと清らかに、暫時やすらふほど、まだきに秋のかよひやすらん。携へたる傘も、うるさきまでになりぬ。愛らしきうないら五六人、帽を被り、裳高くかゝげ、互にのゝしりつゝ、流れを上るを見て、我も下り立たばやと、妹の言ひ出でたるもおかし。流れに沿ひて、かなたこなたさまよひつゝ、日傾きそむる頃、飽かぬ心地して家路につきぬ。ひるたに夏としもおぼえぬこの水邊を、涼しき月影など、清き水底にすみ、露の千草に宿る夕はいかに。

金津文子

空にはたなびける雲もなく、庭の木の葉には、そよ吹く風もあらず。ましてや、はひいるばかりのうちにこもり居ては、昨日の暑さの程だに忍びかねたるに、今日のあつさ、如何にしてかは忍ぶ可き。折りしも、親しき恒子と云へる友の訪ひ來て、先づ打ち見るより、今日の暑さを、かへすがへすわび合ひ、今日の日曜をさいはひ、久さ〴〵に、西行瀧の涼しきところに、あそびなむと云ふままに〳〵、心よくうべなひ、母のゆるしを得て、第二百二十一號の女鑑とノツク一冊とを持ちて、我が伏屋を出でぬ。行く事數丁にして、赤稲のところより、折れ横に入りて、新橋を打ち渡り、思ひの西行谷に致りぬ。こゝは、淺間山のふもとにて、木立の茂れる谷間あり。昔、西行法師が庵を結べりと云ふ。今は、其のあとかただに見る能はざれども、近きころ、心ありける人のつどひて、南一つの小きちんを作りぬ。ちんは、三間四方程のものにして、南の方なる窓を見れば、程よきたきあり。北なる方は田野を見渡して、遠きかたにはおそばばしといふ橋あり。青柳は田野の彼方此方に糸を亂して、そよ吹く風になびけり。郭公は音づれて、そよ吹く風のたはせれば、いと涼し。こゝに女鑑を讀みノツクに歌を草しぬ。恒子、

そよと吹く風だにあらぬ夏の日に
　なとてこのたき涼しかるらん

と。こゝに、我れまた、よからねど、よみけるは、

しばしとて立ちより見れば踊るとも
　いつか忘るゝ西行のたき

とかく語らふ中、日かげも早や西になる程に、明日の日課もある事とて、いざかへらんと、手をひき歸り、我が門にて友と別れつ。後日の思ひ出ぐさと思ひて、かくはものしけるになむ。

岡田柳子

頃しも、葉月初めつ方、避暑にとて來りし修善寺も、いと暑さたへがたきに、今年は、例よりもきびしきにや。さるにても、都にゐます母君は、いかに凌ぎがたうおはしますらんと、はるかに思ひわたりつゝ、湯あみし終へて、祖母君姉君と、來りしは桂川のほとりなりけり。橋のたもとに立ちよれば、暮の程とはうち

かはりて、吹きくる風の涼しさ、薄き衣は、ひやゝかに、覺ゆるにこゝのみは、またきに秋風の通ふにや。ふけよ川風都にまでもと、あまりの涼しさに暫し佇すみゐたる折から、かなたの山の端いと明う、やがてさしいでたるは十六夜の月しけになんありける。其の光りのさやけさ、秋の月にも、中々に劣らず。水底清き桂川にうつりて、たゞよふ風情、ゆかしさいはんも愚かにて あな面白の月や、涼しの夜やと、思はずいひし我樂の、あまりに高きに、花にのみかは、月にまで己が心はうきたつにやと、なかしき限りなかりし。斯くて、ふけゆく程に、月はいよゝすみのぼり、吹きくる風は、いよゝ涼しく、膚にあたりてくだくる水の音のみ聞ゆるは、此世のものとも思はずなん。

猪原　みさを子

文月もやゝもなかにちかければ、風なき日のひさかりは、漸く堪きころにはあれど、昨日今日などは、わけて、たへがたくぞありける。されば、暮るむこともはならで、團扇をたゞさして、相のひろはのびろからぬうらぞしきに、古歌などうちすんじて、机によりかゝり、高根の雲をながめやり、しにいつしかも照日西山にかたむきて、遊びあるく頃にはなりぬ。いでやとて、童女三人をつれて、そこともなく門を立いづれば、稲田ふく風は、千町の小田のあなたより、細波のそゞろに寄來るがここちもなかし、

　稲田吹くかせもすゝしき夕暮に
　　そこはかとなくうすれつるかな

とロずさみて、前の河原とて名もめでたくて、緑やかに芝生のいろはうつくしくて、おのがまゝなる小松も、ほどなく所得がほにちらはらとたてるもいとをかし。さゝやかなる流れは、いつちよりいつちゆくらんとおもふばかり、ゆるやかなる小川もありぬ。頃しもや、月は高嶺を立昇り、清らなる水にひかりをうつし余のまたまころがすばかりの水のおもに、心もさやにすみわたり月のみやこもかつやらんと、うつとりさして立やすらへば、童女等は、水をむすびつゝ、月拾ひぬとてほゝ笑みて、得いはぬ玉なにしごとく喜びぬれば、妾も、をかしくて、家苞にもするにやとて打興しぬ。あはれ、千年や鶴の河原行末たのしき姫小松風の靜川に隔てはなくて、幾代にも、あそべる殿がさきはひも、御心深き大君の代の安國に生れあいぬるにこそあれ

　夕暮に暮のひかりも眞清水を
　　むすへは夏はなきよなりけり

と打すんしければ、わりなき今宵の月にはあれど、小夜ふけぬらん。かへらむとひとりの童女のいふがまゝ、内にかへれば、早九時ばかりにもなりなんとす。

田代　艷子

いぶせかりし梅雨は晴れぬ。うれしやと思ひしは束の間にて、あはれ、ふじがねのみゆきさへ消ゆやすらむと燃ゆる此頃のあつけさ、今日一日な、からくも扇の風にすぐしゝ夕つかた、へだてなき友垣打つれきて、ほどちかき池へ、我のあつさ流さんとぞゝのかすにぞ、心ゆくまゝにたどりゆけば、いつしか志ざす所へいたりぬ。見渡さば、緑やかなる池の、水きよくすみ渡りたるに、まづ、ちりの世を、のがれたらんやうなる心地す。岸邊近くたち寄れば、涼たちて、ふきくるすゞ風は衣手にかよひ、げに、よる波に秋やよせけんかと思ふばかり。河にしげれる、あしの葉毎に、結べる、つゆの、ほろ〳〵とちり亂るゝ。その中を三つ四つ二つおくれながらに螢の飛びかふ。さ、又なくあはれなり。兎角するまに、葉末の露のきら〳〵ときらめくよと見れば、くらかりし木木の下かげ、朧なりし 方のけしきも、あざやかに見渡されぬ。同じ心の人々なるらん。こゝかしこ、そゞろありくも見ゆ。仰げ

ば、空にはちりばかりの雲だになくて、鏡の如き月のかげのみ、心のやる方をもてらしがほに、水にうつろひ、涙にくだくるさま、いひしらず。なりなり、心地よげにさぶかろくづに、黄金のなみの打よするも、いさすゞし。折から、月にかなづるにや。遠く聞ゆるすま琴の音は、岸のまつ風に、かよひて、そゞろに嵯峨野のむかしをぞ忍ばする。あはれ、春の花、秋の月、いかで、今ふひにしくべきなど打かたらひて、かたみに歌など打ずんじのゝしるほどに、ひるまのあつさ、いづちいにけむ。心の濁りさへ、あさなくなりぬること、げに、こよひの賜ものなりけむかし。

谷口房子

照りはたく暑さゝけんさて、二人三人の友さらさ、近きあたりの山川に出で行く。道すがら、、草踏分くるも心地よく、唱歌などうたひつゝ行く程に、いつしか、岸にいたり 。岩のたゝずまひ、水の流もいさをかしう、立ちならふ松のしげれるかげのきよき流も、一入のみどりそびたる、まつ、暑さこそながれけれ。川の底にも誰が植ゑけんなど、友の歌ひ出づるもおもしろし。登り行くまゝに、やうやう山ふかうなりて、高うそひねたる岩より落ちくる瀧水の、千々にくだけて飛散る玉は、さながら、露のたばしる様にて、涼さいはん方なし。

涼しさを袖につゝみてつさにせん
瀧にくだくる山のしらたま

川邊かわ子

照りはゝたく日に、庭の草木もしほれはていさ力なげなるに、苦るしげに鳴く蟬の聲のそはりては、一きはに暑さのまさり行く心地ぞすなる。今日しも、夕つ方より、幼なき妹をそゝのかして、程近き濱べに、涼みにさ立出ぬ。波止の際に生ひ茂れる、あまたの老松は、枝ぶり面白く、高く照る日をさゝぎりて、いさよき所なるを、白砂の、やさしげに、其の根を、おほひたる、なかなかにいもいはずなん。やがて、松の根に、腰打ちかけて、かなたを打ち見やれば、山の端近く沈みがちなる夕日は、うつくしく波間にきらめき、海面涼しく吹き來る風は、松が枝にさゝやきつゝ、我が袖のべを、さわがしさるなり。沖に釣りするあまたの小舟は、波のまにまに漂ひつゝ、舟うたにやあらん。時々だみ聲にて、歌ふ節々の聞ゆるに、耳かたむけゐたる折しも、妹の笑ひながら呼ぶ聲に、指さす方を打見やれば、漁士の子供にやあらん。色黒き四五人の男の子等、よせてはかへす波にたはむれつゝ、やゝもすれば腰かゞめがちなるが、なかなかに可笑し。今はひるの暑さも打わすれて、まだきに秋の通ひやすらんさ思ふばかり。日も入り果てゝは、なほ更に、肌寒く覺ゆれば、後のけしきも思ひやらるれごさ、かへり見がちにて、我が家にかへりぬ。

林きみ子

去年の水無月半ば許り、一夜いさつよう降りたる夕立、名殘なう晴れて、久方の空にきらめく星の光、きよらかにかゞやけるに、十六夜の月の雲間を洩れて出でたる、いひしらずおかしきが、松が枝をもれて、我が文机のもさにさし來たる樣、ねもいはず。折しも、友ごち一二三人音づれ來り、今宵この月に、そゝろあるきして涼まむものを。いざゝせ給へさいふまゝに、やをら庭におりたち、露に濡れる草をばふみしだきて辿りゆけば、さある小川のほごりに出でぬ。流るゝ水音は、皷さ思はれ、岸邊の松は、琴を彈くかさうたがはれ、早瀬にくだる月の面影、水の上下草のもさゝさびかふほたるの、まつが葉末の白露さまがはるゝ樣なさ、畫も、筆も、及ぶまじう思はれぬ。吹き來る風は、面をはらひていさ心地よきに、月はいよいよ照りそひ、夜はいよいよ深けゆきて、あたり靜かなり。

照りそへる月、しづまれる景色を見て、此の治まれる御代こそは、月のひかりと諸共に、いよゝかゞやき渡りゆくらめと、うれしくもおもはれて、いとゝ心もすが〳〵しうなりぬ。

篠塚たけ子

此年の春も、いつしかすぎて、時鳥なく水無月の頃となりぬ。此の頃の暑たへがたくて、文よむわざもおこたりがちなり。いかですゞしきかげもがなと、端居して、夕風を待つほどに、母君の、こよひはあつさ堪へがたければ、某所に涼みにゆかんを。そなたもともにとのたまふに、いとうれしくて家の子をぐしてものしぬ。門田の一面は、昨日までに皆植ゑたりとおぼしく、一つ緑に打なびくも、治まる御代のしるしにて、いとめでたし。なりしも、同じ心の友垣も来あひ給ひぬ。又、一入のうれしさに、そゞろ足のすゝむを覚えず、いつしか清き流のほとりに、いでぬ。岸の柳のいと長きなるが、風にさそはれてなびくも、いとものしづかなるあたりの景色なり。あつさも水に流れぬべし。蛍のあまたとびちがひたる、高きは天つ星かともあやまたれ、ひくき水底の玉かともあやしまれぬ。しばしするほど、彼方の、山の端に光ほのめきて、月は、やがてはなやかにいでたれば、あなおもしろき夜の様かななどかたらひつゝ、夜のふくるもしらで居たるに、彼方の川上にて、水鶏のたゝきいでたるも、いとおかしかりき。げに、此頃のたのしみは、納涼にまさる事あらじかし。

野口済子

空には、ちりばかりの雲もなく、梢には、そよとの風もなし。いかにしてか此の暑をしのぐべきと、ほと〳〵困じはてたる折から、二三の友どちの来りて、これより、河岸に、すゞみがてら遊びにゆきたまはずやといざなひたまふに、いとうれしくて、打つれ立ちて、とある小川のほとりに出でぬ。きよくすみたる水の面には、向ひの山、または、樹木などのかげの、あざやかにうつりたるさへあるに、岸になみたてる青柳の、ふく風になびくさまなど、得もいはれぬ風情なり。月も、やう〳〵くれゆけば、山松の梢より、一輪の明月いときよらかにさし出でたるなど、いはん方なく涼しげなり。あはれ、このをりに、時鳥の一声にても、おとづれたらむにはなど、かたりあひて、そこゝゝとさまよひあるうち、河かぜいと涼しくふきて。襟へさむくおぼゆるまでになりぬれば、ふと心つきて、空をあふげば、月は今雲間にかくれぬ。いとゝ口をしきことなりしかども、夜更けぬうちにと、家路につきぬ。

小川つる子

あかずめでにし花も、うぐひすも、ゆめと過ぎて、青葉繁れる夏木立、一日〳〵といやます暑さ、たとへん方もなし。今年は、去年にくらぶればひさしぼにて、ここに、今日は、空には棚びける雲もなく、草木にはそよふく風の音だにせず。あらかねの土さへさけんばかりにて、其の暑さはいはず、しのぎがたかりき。されば、ふみ見るもものうく、訪ひくる人もなければ、くるしさをのみかこちつゝ、扇の風をよすがにて、はらからとそこはかとなき物語などしてぞ、日をくらしける。夕日かげらふ頃となりぬれど、暑さなほさりやらず。夕げをへ、湯あみはてゝ後、父君の、いで納涼せむと仰せらるゝに、うれしくて、向ひのよね子の君はらからともに、そこはかとなくたどり出でしに、隅田川原になん出でにける。しばし足のつかれをもやすめむと、河岸に腰うちかざして、あなたこなたを眺むれば、月の光くまなく澄みて、行く水にうつり、電燈の光はなやかに、水の面にてるなど、すゞしさ、おもしろさ、いはん方なし。またかなたに、高く、低く、蛍のとびちがふは、天つ星にも、たとへつべく、げにめでたし。折々も

さと清き風と諸共に、いづこよりか箏のしらべの聞こえきぬるに、また、かたへの方にては、いづこいかなる人ならむ。年老いたる人の、心にくきけしきにて笛高らかに吹きすさびつゝ、月をめづるさまなる、いとゆかしくおぼえぬ。實に、またなき夜のさまと思はれたり。隅田の川岸に遊べるほどは、晝の暑も打ち忘られど、家にかへりなば、むさるゝ如き心地して、いとくるしかるべからむと思へど、よもすがら月に立ちあかすべきにもあらねば、さてかへりぬ。ふしどに入り、いまだ、まどろまぬに、西風のさと落ちきて、いとすゞしくなりぬ。今日のゆかしかりしはたゞならねど、こし折一つだによみえぬ身のかなしさは、たゞ、月夜よしとのみ打すしてなんやみぬる。いと口をし。

山口澄子

照りはたたく夏の日の暑さ堪へがたく、氣もめいらんばかり覺えて、終日身をこがしつるに、夕日やゝかけろふ頃より、魂合へる友二人三人、納涼せんとておとづれきぬ。折こそよけれと、身も心も輕う出で立ち、途すがら、己が自々ざれ言いひつゝあゆむ程に、やがて、櫻川のほとりに出ぬ。見渡せば、目に見ゆるもの皆涼しからぬはなく、そよ／＼と吹き來る夕風は、鬢のほつれをくしけづり、下を流るゝ水の音は、さながら、靜けき御代を祝ふが如く聞ゆるに、いつこともなく、笛の音のひゞき渡るなど、塵の世とも思はず、晝の暑さは、とみに忘られて、心地いとすが／＼し。はるかの川上は、並立てる家の燈火の水に映じて、あはれ、水の中にも都あるが如く、美はしさはいはれずなん。折しも、十五夜の日は、光涼しく葉末の露にきらめきたる、常にもまして、きよらかる心地せらるゝに、鏡の如き水の面にさへ宿りて、小波のまに／＼碎け碎けて、またもとのまどかなる月となるなど、見るからにいとうれし。己歌にても知らばよまゝしなど、いと口惜し。はな子の君は、遊の堤を指さしつゝ、しきりに促し給ふに、人も我もいそぎ走り上れば、川巾はいとゞ廣うなりて、彼方の岸より、足早に小舟の過ぎ去りし後は、一條の長き線を引きて、苫舟の波のひだ／＼と水面をうつに、おのれも寒き心地ぞせられぬ。はな子の君は、何見とめけむ。團扇かざして捕らむとすなるに、と見れば、青柳の二本三本立ちたる彼方より、清くすみたる水の面に、空に知られぬ星の影宿しつゝ、光まばゆきばかり、四五匹の螢の飛びくるに、人も我も、いかで捕らまほしと、常にもあらずあらそひしか、二三を殘すのみにて、他は、皆意味ありげに飛び去りしこそ、いと腹立しかりしか。とかくするまに、短夜の更けやすく、さね渡りし日も、いつしか低き山の端にかゝりて、青白う見ゆるに、さまではと　、人も我も、名殘惜しみつゝ、いそぎ元きし道をたどり歸りき。

弥倉かれ子

暑さいとたへがたく、書よまんともすさましくて、扇のみ打つかひてありしが、折しも、したしき友より、水の邊りにも行かばやと、文もてさそひおこせければ、いとうれしくて、さらばもろともにと出て立つ。時は夕ぐれちかき頃なりき。道のほど七八丁ばかりにて、心ざすところにつきぬ。こゝは、兼六と名も高き公園にて、園内いとひろく、泉石竹樹の妙を盡して、心地よき事いはんかたなし。やゝありて、霞が池にきて見れば小さき舟をうかべ、そが中に、歌など唱ひつゝ掉さすも、小風なればあやうげもなく、おかしと見ゐたるほどに、日はくれはてぬ。黄門橋のたもとにて、こゝかしこに螢のとびゆくさまなどながめつゝ、眉丈山の彼方より、そよ／＼とふきくる風の身にしみて、あつさもきえゆく心地よき、何にたとへんやうもなし。こゝに、しばしかたらひつるうち、時のうつるにおどろきて歸りぬ。

野中朝子

ひろまのあつさわすれんとて、衣ぬきかへなどして、したしき友一人二人つれたちて、川のつゝみをゆくに、みぎはに生ひたる夏草の、靑きいろのすゞしげに向き、つゆの玉の如くにおきたるいはんかたなきに、ほたるみつふたつとびちがひたる、又いみじ。とかくするほどにさとふきくる風は、秋かとおもふばかりなるに、折しも、山の端より夕月のすゞしくにほひいでたる、いはんかたなし。こゝかしことめゆくほどに、月も高うのぼりぬ。ひるのあつさをおもひ出んとすれど、心にもうかばず、手にとりもちし扇、いづこにかおき忘れたりけむ。それをもしらぬ迄にすゞしさ身にしみてなむ。

柿竹子

ある夏の夕つ方、あたりの幼子らを伴ひて、程ちかき野へにいでたち、小川のほとりにものしぬ。實に、ひるの暑さをも打忘られて、みわたすかぎりかぎりな稲田の水の、みどりの波を打よするが如く、たはず吹くる風は浴衣の袖をひるがへし、流るゝ水は、いと涼うすみわたりて、夕月のかげさへすゞしさをそへ、やされるさまりはもいはれずをかしきながめに、見とれつたゝずめば、いつのまにか、いみじき暑をも流しはてけむ。身も心も、いとすが〳〵しうなりぬ。折しも、彼方をみれば、こゝちよげに、一むれうちつどひて、少女のすゞむめり。實に、夏は、かゝる水邊をおきて、打興ずべき所、はた、いづこにかあるべき。こよなうゆかしうて、日頃こゝに住みなばなど思ふにつけても、常は、垣の破れなどを笑ひたりし、かの賤が家の、今は、なか〳〵にうらやましうてなん。今迄我こさく心地よかりしか、かたへの露しげき道芝をつみて遊びゐたりし幼子の、俄に、日は暮れはてぬ。いざ〳〵歸らんとせきたつるまゝ、せんかたなくて。

在松　みどり子

木かげをも水の上をもむさくさいへる夏の日は、夕こそ先づ、うれしけれ。きよふく風にいざなはれて、夕つかたより、たまあへる友うちつれて、いとほけくもあらぬ川へに行し時、はや、月は流れの水に鏡とうつり、ゑもいはずなし。そよとふきくる風のすゞしさは、晝のひさきもいづち吹きはらひけむ。涼しさに、我心も心ならず。げにや、こぬさきの秋の夜とぞ思ふめり。かゝるなりに、歌よまんといふもあれど、涼しき風、淸き川水に吹なかされて、歌もいでずなむ。かくするうちに、夜もふけにければ、各々晝のあつさをなかして、かへりて、かくしるすになむ。

田中ふさ子

窓近き若竹に、夏の月影、霜か冴ゆる夜半はいはずもあれ。夕暮近うなりては、遣水の呼りにも、局の壁にも、ゑもいはれぬ涼しさはありぬべし。まことに涼みするならば、ひるの暑をさくるこそ本意ならめと、心あへる友どち四人五人して、湯ヶ淵に赴きぬ、名高き道後の温泉をさることと東北一里、山道とはいへども、馬も車も通へば、さしたる險路にはあらず。まいて、地靜に氣淸く、人稀にして木陰多ければ、玉なす汗も且つ結び、且つ消ねつゝ、午後二時頃いたりつく。抑も、此處は、石手河の上流にあたり、山彼方より聳ゑ、岩此方よりいでゝ、水其の中を走る。岩の上に座して見下せば、いみじや、飛沫激をつんざきて、矢の如く馳せ下り、霧まひ風起り、袂にあまる涼しさは、只土產にせられぬを、恨むのみ。あはれ、あはれ、夏の日の賦のすゞみは、氣違きふの呼り、松風の響の中になんある。歸る道すがら、くじびきて、我此の文をものし、湯ヶ淵の記は、浪子の君に當りる。

高石登代子

都大路のひるはことさらにて、今日は、水まく車の忙がしげに

打過れども、やけたるすなの絶つすぢ舞ふも、いとあつし。げに說企もさくると云ふは、かゝる日なこそと思ひぬ。夜に入りても、なほたへがたき折から、友垣二人三人、いかで、暑さを忘れんわざもかなと、とふらひきたり。かゝる時は、そゞろありきこそよけれと、夫より、打過れだちて、あゆむともなくあゆみゆくに、いつしか、隅田川のほとりに出でぬ。彼方此方にも、凉の人の群して、例の氷うる店のいと賑はしく、其のけづる音の凉しさよ。折しも、十五夜の月いと清うすみ渡りて、浪の上には玉とくだけ、草のつゆにはしろがねと光れるさまなど、いとなかしく清き風さへ、たゆまなく通ひきて、いひしらす凉しきまゝに、時の過るなも空に、うち語らふほどに、夜更けぬとて、はしためのむかへきたるに、うち驚かされて、口惜しとは思ひながら、急ぎ家にかへりぬ、

大谷津粲子

ひるのあつさ、洗はんと獨樹居する折しも、やみな破りてまひ出し螢の、二ツ三ツ四ツこなたへと誘顏なるに、やみがたく、隣家の親しき友垣そゝのかして、そこはくとなく迷ひ出でぬ。折しも、月の雲間な洩れてさし出るに、あたりのけはひ、いとすがくしう、みやびやかなる小柴垣の内に、かすかなるつま琴の音の聞ゆるも、いと床し。こなたの賤が家には、幼子の蚊遣にむせびでや。泣く聲の聞ゆるも哀なり。やがて、近きほとりの川邊に行くに、河風の、輕きたもとな翻していと凉しう、川そこは、月や宿るさ思ふまでにすみ渡り、流のいさぎよきは、世のちりな洗ひ去れるが如くなり。露なふくめる草むらの虫の音のみ高くなりぬるは、みじかき夏の夜やふけぬらむ。

樂園



芳野記行（其の四）

下田義天類

ものゝふの八十氏川は八十隈に
　ふりし世しのぶ瀬にこそありけれ

わが國に川といふ川は、いと多かれども、此の川ばかり、世に名高きはあらざるべし。さるは、此の川、度々の戰爭にちなみありて、歷史にのぼりしことの屢々ありしが故に、おのづから、その名もたかくはありぬるなめれど、またひとつには、佐々木梶原が魁のあらそひ、をさなかたりに入り

にしより、ひときは、その川音をも高めたるものにもやとぞ思はれぬる。をさなかたりは、普通文學の一科なり。普通文學のちから大なりといふべし。歴史にのぼりしこと、その一因とすれば、應神天皇の御代に、宇治若郎子命が大山守の命と戰はせ給ひしも此の川瀬なり。弘文天皇の御軍人が、大海人の皇子の兵士を防ぎて激戰ありしも此の川瀬なり。されど、こゝに來て、これ等のむかしを思ふ人は、いと〳〵まれなり。これによりて、その名のながれたるものにあらざることは、いふまでもあらず。治承の亂、壽永の戰は、誰も誰もよく知る所なり。宇治川といふ名を聞けば、先、佐々木梶原のことを思ひ、頼政の扇が芝つぎて思ひいださるべし。かれは、事の餘にふるければ、人々にわすれられ、これは事の近ければ、人々にいひはやさるゝにやとも覺ゆれど、また、あながちに、さもいひがたきものあり。ことの新しきによりて、人々にいひはやさるゝものとすれば、梶川彌三郎の宇治川先登は、佐々木梶原の先登よりは、いと〳〵新らしき事實なり。然して、彼が單騎、このあら川をおしわたりて、槙が島の敵軍をふみちらしたるは、佐々木梶原の勇よりも、今、一きは勇烈なり。そのことがらは、彼より新らしくして、その働きは、彼より猛烈なり、されど、宇治川といふ名を聞きて、梶川のことを思ひおこすもの少きは、かれが武者ぶり、いまだ普通文學に入らざればなるべし。梶川彌三郎は、織田信長の手人なり。天正元年、足利義昭織田信長と隙あり。逃れて槙が島城に入りて、信長の軍に備ふ。時に、なが雨ふり續きて、宇治川の水岸に溢れぬ。濁浪中流にさかまきくるひて、見るだにものすごき光景なり。織田軍、川の北岸にのぞみて、いかに

ともすること能はず。たゞ、そのいかれる波をにらんで切歯扼腕するのみ。時に、信長馬を水涯にすゝめて呼びていへらく。いひがひなき人々の振舞かな。これ程の人數の内に、先、この川をわたらむと思ふものは只の一人もわらざるか、いにしへの梶原佐々木も鬼かみにてはわらざりしぞといふ聲、いまだされざるに、馬をざんぶとかけ入れて、水煙に包まれたる爽快無双の一武者あり。逆卷く波を蹴やぶりて、流を亂して渡りそめたり。信長遥にこれを見て、採を擧げて指揮していはく。われはたぞ。思ふに、梶川彌三郎あるべし。剛の武者を敵にうたすな。ひッつゞいてそれすゝめと、いきまき猛く指揮しければ、味方の總勢いさみたちて、一度に河にぞ駈け入れける。梶川第一番に南岸に上り、眞一文字に戰をまじへて、遂に、槇ヶ島城を攻め落して、此の日の戰に、第一番の功名を得たるは、近頃華々しきたゝかひなりきと、當時の歴史に傳へられたり。この働きは、梶原佐々木に勝る所ありとも、劣る所はよもあらざるべし。彼は、二騎競爭して先登し、これは、單騎卒先して死地に入る。然して、ことは彼よりも新らしき歴史談なり。此の新しき歴史にして、



玉川之上流

しかも壯快なる事實の、かれよりも其の名の高からざるを思へば、事のふるきと新らしきとに依りて、世人にいひはやさるゝと、いひはやされざるとのけじめあるにはあらざるなり。應神の朝の義戰、壬申の亂の忠烈は、とまれかくまれ。梶原佐々木のことにくらべて、梶川のことの、世に知られざるは、つまる所、普通文學談に入らざればはなるべし。文學のちからも、また、大なるかな。など、思ひつゞくる間に、汽車は新田の停車場を過ぎて長池にさしかゝりぬ。あたりの千町田に水せき入れたるに、かへるどもの所得がほに鳴きかはす聲、かしかましきまで耳につけり、春の田家の趣味、あたりにみち〱たるこゝちす。

せき入れし水田のおもに時を得て
　あふるゝばかりかはつ鳴くなり

ふりはへて見にくる人もなしの花
　心のとかにゆきとちりつゝ

此のわたり梨の棚いと多し、川崎鶴見わたりの類にあらず。こゝかしこ見わたすかぎり、皆梨棚にて、淺にびにむらさきだちたる若芽どもの内に、白くこゝちよげなる花のさきつゞきたる、末ははの〱霞の底にいりたる、いひしらずよし。梨花の一朶雨を帶びたるだに、顏よきをみなによそへられたるためしもあるを、千朶万朶その數を知らず、はる〱と見渡すかぎり、皆ひとしく頭をたれて露をふくみたるさま、たとふるにものなくあなむ。長池の停車場に一休寺へ一里、青谷梅林へ十八町としるしつけたる標柱あり。とはまほしきこゝちすれど、例のかひなし。

山に入り谷をぬひつゝゆくきさの
　右に左にうくひすのなく

玉川の停車場には、井手保勝命といふ木牌かゝ

れり。名に流れたる井手の玉川は、こゝなることを知りぬ。能因法師が、ひからびたるかはづをたゝう紙におほなおほな包みもたりけむすきわざは、兎まれかれ、歌枕としては、とはまほしき地へがたけれど、芳野の花の心もとなければ、道草をかるにひまなし、こゝより山吹の名所までは、一丁目あまりなりといふ。停車場の墻内に、山吹あまた植ゑわたしてあり。かづ〴〵、はころびそめたるもあり。

うつしうゑしこの玉川の山吹に
　　ゐてのかはづの鳴く音をそおもふ

棚倉の停車場を過ぎて木津川をわたる。これより

上毛妙義山



は、いにしへの奈良の都のあとあり。木津奈良京ばなどの停車場にては、思ふこといとしも多かれどかぎりなき事なれば、すべてもらしつ。春日山三かさの山などを左に見て、帯解け市の本を過ぎ、丹波市を越ゆ。石上神宮へはこゝの停車場より、十五町ありといふ。近世名高き天理教の本院も、こゝにありといへば、一度は見置きて、後の参考にもせまほしけれど、帰路に奈良へ立ちよらむと思ふこゝろもあれば見過しつ。櫻井の停車場にて、汽車よりおりたり。こゝなむ、奈良鐵道のとまりなりける。時に午後の二時なりき。こゝより吉野へは程遠からねば、けふは彼の谷々の花をも見らるべしと思ふに、うれしきことか

ぎりなし。さて、こゝより關西鐵道へ乘り替へむとするに、奈良鐵道と關西鐵道との間は、此の頃たがひにそは〳〵しき事ありて、時間の聯絡にいみじきたがひめを生じをれば、こゝにて二時間あまりまちあはせざれば、關西の滊車へはのりうつり難しといふ。いかにともせむかたなく。棚橋刀自と、わひともにこゝかしこ逍遙して、時のうつるを待つ。さう〳〵しきことかぎりなし。からうじて、關西鐵道を待ち得て高田へ到れば、こゝにて、また南和鐵道へ乘り替ふるなりといふ。こゝも、時間のつぎあはせよろしからず。五時ばかりにおりなむとせり。かくては、けふ吉野へいたり着むことは難かるべし、花季は一刻をもあらそふものなるを、こよひ道にとまらば、花の上いかがあらむと心もこゝろならず。鐵道會社の私利をあらそひて、公衆の便を顧ざるはらたゝしさも、ひときはなり。

今小町

（これは新體詩なり）

與太生

お隣の御孃さん學校を卒へて芳齡十八
鬢を撫で帶をさすりて容姿を整ふ
御兩親は既に老いて頻に死後のことを案じ
株券をかぞへ帳簿を調べて空しく大息す
彼を擇び此をすゝむれども皆女の心にかなはず
今更に親の心子知らずの古諺に感ず
千萬の靑年は淑德を要せずして黃金を望めり
お隣の財產は世間の知るところなり婿たらむ
とするもの日に十百
お孃樣は猶いなた名と位とを戀ひてやまず
御兩親は遂に初孫の顏を見ずして逝きぬ
遺產盡きむとする時花顏やうやくおとろへ
大方世情になるゝ頃靑年總べて妻子あり

はじめて　嚴父　慈母の恩を思ひて其の墓に詣
づれば
何人の卒塔婆か道に横りて我が來たることの
遲きを嘲くが如し

去年の今夜

（五）

彦　峯　生

兄様。すみませぬ。

と、靜子は、さも術なささうに、意味もなく疊のおもてを袂で掃きながら、わびを言うた。

が、武男は、寧ろ、不思議だといふやうな顔色である。

落第したといふことかい。善いぢや無いか。母様が病氣のために、看病もせにやならない、庖厨のことも氣をつけね成らぬ、弟の世話もせにや成らぬといふので、學課の復習が出來なかつたのだから、仕方がないではないか。學校は、なるほど落第だらうが、………子として、また、女として、優等の卒業以上の成蹟を示して居るではないか。

幼い人と同級にならねばならぬが………何が恥しい。學校といふものが、棺桶でも作へる大工等でもあるまいし、何日の何時までにこれを仕上げねばならぬといふでもあるまい。必しも、何年間の中に卒業しなければ恥辱だといふこともない。つまりは、女一人前何事も恥しくない様になるのが目的だ。伯父様なども出來損つた女學生などばかりを手本にして、この學校の目的が了解ないもんだから、いつも、あんな議論を言しやるのだ。

また、朋友に恥しいなんていふことも、僕には

了解らぬ。お前は、お前自分のために學問するのではないか。少しも、利害の關係のない人のいふことに、氣がねするに及ばぬだらう。世間体をつくろふために＝世間の人から、えらいと思はれたいばかりに學問するのなら兎も角も………

イヤ、こんな屁理屈は止めにせう。

お前は、母様のために、子として女としての責任のために落第したのだから、立派なものだ。よしまた、なまけた爲に落第したとしたところで、泣いて如何なる、たゞ耻しがつて、如何なる。もしそんなことで、母様に心配をかけ、自分も、つまらないものになつてしまつて、まご〲するやうなことでは、戰死なつた父上の耻辱にもなるよ。

母様の健康も大分よくなつたから、これからは、一心に學校の方を勉强するがえい。僕はこれから、伯父様の處へも一寸寄らぬければならぬ。失敬するよ。

（十八）

青山様では、この頃は、大變にぎやかになつたと近所の人が折々いふやうになつた。なるほど、時々は、ハトハナなど、途方もない大聲で、次郎さんの復習するのも聞える。病氣がちであつた未亡人も至極健康になつて、靜子さんと眞實樂しさうに笑ひあふことなどもある。

今までは、秋のやうに陰氣であつた靜子さんがこの頃は、春の樣に、どことなく消々した人になつた。

これが、この一家を、にぎやかならしめた、最も重なる原因であつた。

親子の間のむつましいのも、勿論、至極結搆であ

る。規律の正しいのも、また、甚、うらやましいものである。しかし、その上に、一家擧つて平和を樂むといふ心がなくては、圓滿なる家庭とは言はれぬ。落第以前の靜子さんは、まだ其を知らなかつたのだ。

（七）

意地のわるい學校友達は、折々、それとはなしに靜子の落第を題に、耻しめやうとしたり、笑つてやらうとした事もあつたが、靜子が、一向に、そんなことには氣を止めずに學科の勉强をつとめて居るので、張合のない故か、とんと、皆、忘れてしまふたやうになつた。そねみ心のつよい人は、内々、來年の試驗の成蹟を豫想して、業をもやして居るものもあるとかいふことであつたが、如何にも、この學年試驗には優等の成蹟で及第した。



女として耻しからぬものにならぬ中は、こんなことが何のうれしいことがあらうと思ふにつけても、去年落第の時に、朋友にわざけられたことも修業證書をもらふことが出來なかつたことも、耻づるにたらなかつたといふことが、なほよくわかつた。

たゞ、去年の今夜、さもないことに、口惜しがつたり、耻しがつたり、じれつたがつたりして、一夜をあかしたことが、今更に、耻しうて／＼、

昨年は、母様、まことに、すみませぬでした。

と、突然の御あいさつ。何のことかと思うて居る時、次郎さんは、また、威勢よくかけて來て、

姉さん、また、落第？

米ー八も、やう／＼氣がついて、はゝと笑ひ出した。節子さんも、次郎さんの威勢がおかしいとて、これもまた、笑ひ出した。次郎さんは、何か知らぬが、母様も姉様も笑ふので、これも遂に大に笑ひわらひ、眠うなつたとて、部屋の方へかけこんだ。如何なことを夢にするだらう。（なはけり）

是より避暑旅行

超舟漁史

松次、アヽ暑い、實に今日のやうに蒸つく日は殆ないぜ、一陣の涼風どころか、なまぬるい風だにないこんなとき、如何にも學者然と文机にかゝつて軒にかけたる玉簾の風にゆられて、いと涼しくなん侍る、と云つた處で、チットモ涼しくないゝだから一番これから避暑旅行と出かけてはドーデスなア。

梅吉、ハヽア夫れは至極面白からう、ところで彌次喜太のいでたちも、チト古臭から、一つ新式に僕

が彼の相撲界一萬人中、ならぶものなき御大將常陸大關で、君がそのフンドシカツギといふ資格ではドーだらう。

松、まてよ、君が常陸山で僕がフンドシカツギとな……いや男だ、只命これ從ふとヤッツケやう。

笑、ツイツは、近頃以て奮發の程感寸仕つた、察するに、君も當年の勇氣がおとろへたと見える、否々我輩が、だけそれだけ豪くなつた爲め、遂に甲を脫で軍門に降つたと云ふ洒落に違いない。

松、ウヌボレノ、サリトハツライネ。

笑、コリヤたまらん、東雲節ときては、僕の大々禁物、實に三度の食事を四度にしても……なに違つたと、何も違はない、君はイッタイのみこみが惡いなあ、二度だつて四度だつて同ことだ、嘘だと云ふならやつて見玉へ、四からマイナス二はイコール二だ……。

松、ソンナ事は百も承知二百も合點だ、が、しかし僕も東雲節は好んが、これも余り惡くは無と見えるせ。……だつて先頃女子高等師範の生徒たるものが、或樓に會して、盛に唄たと云ふではないか、マーそれは後として、螢雪君……オヤ、ドッコイ違つた大關に願ひやすが、フンドシカツギとしての報酬金二拾兩程、前へモレイテーもんだねい。

笑、とは驚た、報酬を先へ要求する馬鹿がどこの世界にあるもんか。……なに、ないからやる、だつて有り餘つて居るはした金を、貴樣に取れてたまるもんか。

松、有り餘つて居るなら差閊はないじやないか、……何だと、ある處にやあるが、無い處にやないと……ソリヤあたりまへの事さ。ハヽアわかつた、君も口では、有り餘るなんと鼻を天狗にしても、實はなくて、不足で、たりないのだな。

超舟、オイ〳〵

蛍、ハイ、おいは巡禮の川ながれ。

松、はいならまつてかね。

蛍、なんだ、人の眞似をしをつたなね。

超舟、ドーモ二人とも口が惡くていけませんな、全體何を水かけ議論してるんですか、避暑なら避暑と、はやくやらぬと讀む人はおりませんぞ。

蛍、はい、かしこまりました。ドーモ口は禍で、決して惡くはないんですが筆がわるくて。……

松、何も水をかけて議論したわけでないのですが、時々順位をかけおつたばかりで、イヤ、ドーモはや。……

蛍、では、今迄云つた事は、全部とりけしとして、いよ〳〵實行にかゝらうではないか。

松、ソーヨ單刀直入的に。

蛍、なに用意萬端とゝのつたと。……ど、どこに。

松、どこにといつたつて、そりや實に迅速神の如しさ。僕は、子供のころねい。雷台太郎といつてたから。

蛍、オヤ御座たぞ、そつちが雷なら、こつちは桑原千太郎といから。

讀者、ア、若し〳〵又、わき道へはいるのですか。

松、ヘイ〳〵、ドーモ、相濟ません。なゝでは、螢雪君、チヨツト漫錄欄の四十頁を見てくれ玉へ。

蛍、オヤア、千金丹賣の傘だ。……僕の伯母さんとこが、本家は讃岐の高松、關内勸弘堂だつて、ジヤウダンジヤないぜ。……だつて大人が、蝙蝠傘に壽や字をかいたものをさすのは、千金丹屋よりないじやないか。

松、君のやうな俗物には、ドーモ仕方がない、それは先づコーだ、傘の上にかいたからつて、模様じやないので、是から避暑旅行するには信玄袋に

ノートブックとエンピツが必要と云ふ所から乙に洒落て書たのさ。

螢、ハヽアなる臍、君は、實にえらい風流人だ。それでは僕から初めやう。………なに、やり玉へ。………やるとも〳〵大にやるさ。

讀者、どちらへ御出發ですか。………オヤ〳〵御機漏すべからずとは驚きました。

螢、富士のやまから　　江の浦みれば
　おきにや白帆が　　三つ四つ五つ
　岸にやしらなみ　　みどりの松に
　　しろとあをとが　　コリヤ色くらべ

ドーだ、うまいならう。

松、オヤ東海道江之浦と御座たね、だがそんな歌じや、うまい譯は出來ないなあ。(四十四頁)………此度は僕の番か、一つ困らしてやらう、オットヽ五十三頁を御覽。

螢、イヤ、それしきの事に困るやうな男とは、チト等が違ふさ。………なんだ、利根川の涼風か。

鴻の臺から　　利根川みれば
涼かせはらんだ　　しらほも見えて
わしのしげみに　　小ぶねに人が
魚につられて　　オヤ居るわいな

松、魚につられてとは、實に妙作だ

螢、ソリヤ、うまいさ。僕はまだ駄作なんか、一度もやつた事はないから。………マア、嘘でも、はめられりや、互に惡くないからなあ、御安くやらうよ。

橋のうへから　　玉川みたら
みづがかゞみか　　かゞみが水か
すみて流れて　　流れてすみて
わかりますぞえ　　川ぞこまでも

松、はヽあ、玉川の上流かなあ、(七十七頁)しかし、

ドーしても安くちや、面白味がないから、わかりにくいところを、同く本欄の七十九頁でうかゞひませう。

螢、あゝ、これで六ッかしいと、アッケもない、上毛妙義山か。しかし何といはふか。まてよ、よしよし。

涼みにいかうか　　オイ友がらす
松さへをかしな　　あの妙義山
岩がやまだか　　デモでつく〳〵と
風の神さへ　　たゝとはさぬだ

松、あゝくるしい、くるしい、これにや余程困つたやうだなあ。……あに困らんと、やせ我慢にか。

超舟、餘り深山でも却て興味がうすいから、ドーやめてはドーですか。

螢、では、モー一つ少つと輕妙の處で、やめませう。オイ松亭君、今度は、眠つてをつても直ぐ分るから、ツー、うで組をして心配せなくつても安心して居玉へ。コーだ。

名さへしは原　　からきは浮世
渡りにくいと　　あきらめたれど
おのが身ひとつも　まゝにはならず
愚痴もわきでる　　イヤサ温泉場

實に感々敬々服々だろう。

松、ツーだ感心敬服の上に、一寸と不の一字を置が、最も適當だぜ。これでは論を書もハリコミがあいが、何もつきあひだ。……野州鹽原といふ洒落だあ。サア雜報欄九十一頁をみたまへ、君のマヅイ歌でも、サア僕の名譽でナツトは、我慢がつくから。

讀者、オヤ御二人とも御鼻の高こと、オホヽヽヽ實に面白いから、もつと伺ひ度もので御座ります。

松、螢、イヤ、へたあ、長談義も餘感心しませんから。……ハイさよあら。



雜報

○宮廷錄事

兩陛下東宮御所幸啓

迪宮殿下の御移轉に付、天皇　皇后兩陛下には、御對顏の爲め豫て仰出されし如く、昨六日午前十時三十分御出門、德大寺內大臣、高倉典侍御陪乘香川皇后大夫、川口宮內次官、姉小路掌侍、山內書記官、森永侍醫、堀川七等出仕等供奉御同列にて、青山なる東宮御所に行幸啓あらせられたり。皇太子同妃兩殿下には、御先着の小松宮彰仁親王同妃、有栖川宮威仁親王、同妃各殿下幷に伊藤、九條兩大勳位、大山元帥、同夫人、田中宮內大臣、同夫人松方伯、土方伯、川村伯、同夫人、鷹司公、同夫人、中山東宮大夫、高辻同侍從長、同夫人、村木同武官長、同夫人、萬里小路、生源寺各女官等隨從して御玄關に奉迎あらせられ、兩陛下には、高辻侍從長の御先導にて德大寺內大臣、三宮式部長等を隨へさせられ、御休憩室に入御、同所に於て、裕仁親王幷に皇太子同妃各殿下に御對顏種々御物語りあり、引續き參候の皇族、大勳位、輔導顧問、宮內大臣、同次官、東宮職高等官幷に夫人等に拜謁仰付られ、同十一時三十分より御產所に臨御、豫て東宮御慶事の際、內外臣民より奉獻したる物品を天覽あり、正午には皇太子、同妃、彰仁親王、同妃、威仁親王、同妃各殿下と御對食同時に參列の諸員幷に供奉員一同に御陪食仰付られ、午後三時十五分還御あらせられたりとぞ

其の節、皇太子同妃兩殿下より、兩陛下に御献上の品を承るに左の如し。

天皇陛下へ　　置時計一個

皇后陛下へ　　純銀製狆の置物

外に鯉十尾其の他ありしよし。

迪宮殿下御移轉

裕仁親王殿下には、御豫定の如く去にし七日を以て、麻布なる川村伯邸へ御移轉相成りたり。當日同殿下には御出門に先だち、午前七時三十分御正殿に於て、御父母兩殿下に御對顏あり同八時川村御養育主任夫妻は御迎の爲め、御附女官、御乳人等と共に參候、三殿下に拜謁仰付られ、有り難き御詞を拜し、斯くて伯爵夫人は、迪宮殿下を御馬車に奉じ同九時御出門、中山東宮大夫、女官監督萬里小路幸子、御用掛橋本綱常侍醫、加藤照麿の諸氏供奉御順路を經て、同三十分芽出度川村伯爵邸に御着相成たり、麻布狸穴なる川村伯爵邸にては、前日來奉迎の準備をなし、門前には綠門を造りて大國旗を交叉し、御座室内外の裝飾等用意到らざる隈もなく、西郷侯、同夫人、大山侯、松方伯、同夫人、樺山愛輔、同夫人、大久保(春野)中將、同夫人、長崎御養育掛の諸氏早朝より同邸に參集して、御待受申上げ、軈て御着あらせらるゝや、西郷侯爵夫人は直ちに抱き奉りて、樓上の御座所に入り、續ひて各供奉員、幷に以上の諸氏へ拜謁仰付られ、畢つて、川村伯は、一同を別室に請じて祝盃を擧げ、殿下の萬歳を唱へ奉り、立食の饗應ありて、供奉諸官は同十一時頃、其の他の諸氏も、正午前夫々退出せしが、當日、殿下御順路の兩側には、拜觀人堵の如く、赤坂、麻布、芝の三區は、各戸國旗を揭げて奉祝の誠意を表したりき。

●御教育顧問　迪宮殿下愈々川村伯邸へ御移轉に相成りたるに就ては、御養育主任たる同伯夫妻の職責甚だ重大なるを以て相談相手として、西郷、大山兩元帥松方、樺山兩伯爵へ御養育顧問仰付られたりと云ふ。

●侍醫詰所の設置　同じく川村伯邸にては、殿下御移轉と共に、侍醫三名、看護婦、藥劑官交代にて詰切り居るを以て、一室を侍醫等の詰所と爲し、藥局なども備附けられたる由。

●御乳人　御女人小林某御移轉前日より、同伯邸に詰居れるが、覆面して御乳を上ぐる等萬事恐怖の事とて、身體に異常を生じ、乳の缺乏を來たす虞なきにあらずとて、目下候補者として他に兩三名を撰定しありと、又同伯母堂、及令息夫妻は、既に御移轉前、他に移轉せられたりと。

野州しほ原



●皇后陛下御令旨　去にし九日上野博物館にて日本赤十字社第十回總會を催されたるが、當日は折惡く雨天なるにもかゝはらず、出席社員六萬餘の多きに達し、いと盛大なりし事は、詳く時の新聞に出たれば、特に記さゞれども、其の日かしこくも、皇后陛下より賜はりたる御令旨、及び、小松宮總裁殿下の御答詞を承はるに、次の如し。

皇后陛下御令旨

日本赤十字社第十回の總會に臨み茲に各員を見るを喜ぶ殊に客歳の北清事件に際し能く救護の効を奏し爾來益々社業の盛大に赴くは滿足の至なり

総裁宮殿下御答詞

爰に日本赤十字社第十回總會を開くに方り畏くも
皇后陛下の親臨を辱くし殊に優渥なる令旨を賜ふ本社の光榮何ぞ之に加へん本社は社運年々に發達し今や社員七十六萬有餘人の多きに至る是れ御國民忠君愛國の至誠に富めるの致す所なりと雖も抑亦
陛下慈仁の盛徳光被するに因るに非ずんば安ぞ能く斯の隆昌を見るを得んや社員等自今一層同心協力して益々社業を擴張し遂に本社設立の目的を達し以て
陛下の恩徳に報ひ奉らんことを期す謹て答詞を上る

明治卅四年七月九日

日本赤十字社總裁大勲位功二級

彰仁親王

●有栖川若宮へ御沙汰　天皇陛下には、先きごろ有栖川若宮栽仁王殿下(目下學習院御通學中)を宮中に召させられ、種々學事上の御諚を賜はりたる上、特に將來海軍に從事せよとの御沙汰を下されたるやに漏れ承りたるが、今更申すも畏き事なれど、事大小なく、大御心の至らぬくまなき、允文允武ある陛下を仰ぎまつりつゝある國民こそ、こよなき幸福なれ。因に、殿下は明治二十年の御生れにて、本年は滿十三年に成らせらるゝとか。

●東宮御避暑御豫定　兩殿下には、來る廿四五日前後を以て、日光田母澤なる御用邸に、御避暑あらせらるべく、而して、迪宮殿下には、川村伯夫妻、加藤侍醫外數名御隨從、兩殿下御出發後數日を經て、同御用邸に赴かせらるゝ御内定なりと。

●四内親王御避暑御豫定　富美宮、泰宮兩内親王殿下にも來る廿四五日頃、函根宮の下御用邸に、常宮、周宮兩内親王殿下には、函根離宮に御避暑あらせらるゝ御豫定の由うけたまはりぬ。

●梨本宮妃殿下御着帶　昨年御結婚あらせられ、

たる、守正王妃伊都子殿下には、いにし七日を以て、御着帶の式を行はせられたりとぞ、竹の園生の御末のいや末廣に、榮ますこそめでたけれ。

○表彰録

●●●●●紙上の光榮　斯くて、加藤まさ子は、翌二十九年六月一日に至り、二十七八年戰役の際の功勞によりて、赤十字社より金十五圓、また同年十二月二十五日に至り、同じ功によりて、賞勳局より金十五圓、併別に從軍紀章をも授與せられしが、後に至り、亦海嘯に功を盡したる件により、赤十字社より慰勞として金九圓を與へられたり。夫より、まさ子は例の如く同社病院へ出で日々勤務してありしに、其年の中に同社の特別社員に推選せられ、三十二年に至り、一等看護婦となり、上級俸を給せられて、主任看護婦に擧げられぬ。然るに、昨年に至り北清事件起りたれば、まさ子は亦戰時救護員に加へられ、看護婦長として、廣島衞戍病院に赴き、此處にて數多の負傷軍人を看護し、任務を終へて後歸社したり。

是より先き、二十八年の秋、皇太子殿下御不例の事ありしに、まさ子は同社より拔擢せられて、御看護申上ることゝなり、深く感泣して御介抱申上げたるに、殿下は御間もなく御本復あらせられ、まさ子は居る事四十九日にて、御暇を遣はされたり。

其後、昨年一月に至り、中山從一位の局御病氣に罹らせられ、まさ子は嘗て其御手元に召使はれし御縁故もあれば、其看護をまさ子に托みたしと思召されしも、まさ子は當時一等看護婦主任にて、内勤部に屬し居り、同社にては内勤部の者は外勤

を許されぬ制規あれば、まさ子は局の御許へ呼寄させ玉ふこと出來ず、まさ子も久く御高恩を受たる舊主人の事あれば、親しく看護せんと欲すれども、社の制規あれば、いかにもなし難く、局は況して其望のかなはぬを殘念に思ひ居られしに、畏くも　皇后陛下には、其事を聞こし召され、いとあはれなる事に思され、香川皇后宮太夫を以て、佐野社長へ御令旨を傳へさせられたれば、社長は謹んで令旨を奉せられ、同社へ沙汰ありてまさ子を外勤部へ移し、局の許へ赴かせらるゝ事となりぬ。されば、まさ子も深く感謝し奉りて、夫より親切に看護したる程に、局の病氣も忽ち平癒せられたりと云ふ。斯くて、去月二十日に至り、皇太子妃殿下御産の期近づくと共に、前に記したる田中のぶ子、高田やを子と共に御奉仕申すことゝなりしは、かつて陳べたるが如く、是より後、亦二女と共に、皇孫殿下に從ひ奉りて、川村御養育主任の邸へ赴くこと、亦既に記せしが如くなり。

（完　富士新聞）

○教の栞

●感化法施行と基金　先頃、内務省參事官會議に於て決定せられたる、感化法施行細則は、都十七條より成りたる由、これ本邦にて、政府事業として施行するは、實に、今回が初めてなれば、可成的放任主義を採り、各地方の狀況に應じて、適用せしむる方針なりと云ふが、尚ほ各地方に於ては、該法施行に付き、曩に　英照皇太后崩御の際御下賜ありし御救恤金を、基金に充つる筈なりとぞ。

●日本女學校　に於ては、本月二十六日より三

週間、作歌、女禮、割烹、毛筆書、四科の夏期講習會を開かる、由、其の詳細は、本誌廣告欄に記載しあれば、熟覽せらるべし。

全國各女學校卒業生

第六回

●柳河高等女學校卒業式　は、去にし四月三十日第一回卒業式を舉行せり。先づ鈴木校長より夫く卒業證書を授與し、續て同校長の誨告、郡長代理大原郡視學の祝詞、由布福岡縣私立教育會副會長の演說、職員總代の祝詞修業生總代の祝詞、卒業生總代の答詞等あり。式終りて生徒の成績品を陳列し、來賓の觀覽に供し、而して立食の饗應ありたりと云ふ。次に卒業生の姓名は左の如し。

●第一回卒業生（年齡順）

綿貫コト　大塚ミチ　中野トメ
大津山モト　内田クメ　鹽塚ツヤ
能野チトセ　高口ツタ　臼杵ハツセ
竹井チト　田尻清江　大原シツ
大江コト　沖アキノ　吉田シツ
草野サワ　鈴木フサ　志賀ミ子
立花マツ　野中ズマ　吉岡チトセ
佐野シツ　清水ユキ　高田トモ
志賀スエ　鵜飼ツヤ　山田スキ
毛利サエ　末松トリ　田尻靜江
田尻マサ　鹽見オリカ　内山ミ子

以上三十三名にして、生徒の祝詞及び答詞は、即ち

祝詞

物ごとにうれしかるべき春さて霞たなびける邊には柳眉なつくり風渡れる梢には櫻ゑまひ初めたりかゝる折しも我高等女學校にてはわらは等のいろれの君さもたふさひまつる三十三人の人々の爲に學びのわざを卒へられたる証し書をなんさづけさせたまへる

あはれ姉の君たちの心のほどやいかならん此うれしさに柳も眉つくり花もゑまひ初めけんかし

さいつ年此の學の庭に入りたまひしより寒さ手をきるばかりなる冬の朝も暑さ身をやくがごとき夏の日もおもひくつせず

して學の道に心をむけられしゝるしありて今日此うれしき春に逢ひ櫻の花と咲き出られたることのめでたさよ

抑國の基は婦女の手にありとかや我姉の君たちよけふより世に立たれては柳の糸のさからはずなれざる操もて貞き人の妻となり賢き人の母となりて旭の庭の山櫻匂ふ國への御光を輝かしたまはんことをこそ願ひまつれ

數ならぬわらは等此盛なる席の末に列なるよろこばしさにかゝるよし雑しことを述べて祝ひの詞にかふるになん

柳河高等女學校生徒總代

明治三十四年四月三十日　龍　はる

答詞

今日しも數ならぬわらは等三十三人のために學のわざを卒へし證かし書を授けたまひ多くのやんごとなき方々したしく此席に臨ませられいとも盛りなる式を擧げさせたまへるうれしといつの世にかは忘るべきわらは等がかゝるうれしき今日に逢ひぬるは教のおやの君たちの白雲のかゝれる山よりも高く滄波のさわける海よりも深き御恵みならでやはまして校長君たはしめいともねもころなる御をさし皆なさへたまへることの返す〳〵もうれしさよされは今より後はとし頃の御教へと今日の御諭しとをながく守り身を修め行ひを愼み高山の麓の塵ひぢ蒼海原の一しつくをよに酬ひ來らんことをそ誓ひまつる聊かもふしを述へ卒業生一同に代りて答へまつるになん

柳河高等女學校卒業生總代

明治三十四年四月三十日　立花まつ

●●●●●●●●●山口高等女學校卒業生　去にし三月例の如く、卒業式を行はれました、其の卒業生の氏名、及族籍等は次の通であります。因に、當校は、素、私立毛利高等女學校でありましたが、昨年十一月から縣立に改つて、名もかはつたのだそうです。就ては、校舍の改築も其の中にする筈だと聞ましたが、まあ、目出度ことでは御座りませんか。

族籍	本科卒業生姓名	生年月
山口縣平民啓七長女	三輪トモ	一八、七
山口縣士族滿六長女	伊藤レイ	一六、七
山口縣士族復三四女	大隅サエ	一八、一二
山口縣平民佐之助長女	伊藤マサ	一八、三
山口縣士族槌次長女	木藤コト	一七、一
山口縣士族雅一長女	藤井ヨシナ	一八、三
山口縣士族槌次次女	木藤スヱ	一八、一二
山口縣平民到長女	畦森テル	一七、八
山口縣士族常世長女	粟飯原サク	一八、一

山口縣士族準男孫	多々良シヅヨ	一八、八
山口縣平民恒輔長女	吉富マサ	一八、一
山口縣平民[illegible]左衞孫	大河原テイ	一八、二
山口縣士族通雄長女	南ヒデ	一八、四
山口縣平民儀一姉	野村ヒサヨ	一六、一
山口縣平民孫三長女	吉富ム子	一八、六
山口縣平民平太郎養女	藤井アサノ	一八、一二
山口縣平民久米治長女	都濃シゲ	一八、九
山口縣士族權一長女	金子ヨシ	一九、二
山口縣平民好三二女	松岡スミ	一八、六
山口縣士族ミカ長女	最上フジ	一八、六
山口縣士族萬里長女	國香ユクコ	一七、三
山口縣平民金作二女	吉村ヒサ	一八、三
山口縣平民高一繼女	馬屋原マサヨ	一七、二
山口縣平民善一二女	藤井コト	一八、一一
山口縣平民戸法	波多野トヨコ	一八、四
山口縣士族一市長女	國富キヨエ	一八、七
山口縣士族知輔長女	芳松キミ	一七、一〇
山口縣士族貫一長女	河村シヅ	一六、五
山口縣平民慶介三女	板村フミ	一七、一一
山口縣平民勇吉二女	深野ミドリ	一八、二
山口縣平民彦四郎長女	弘中ヨシ	一八、二

平均　十六年三ヶ月

在學年數平均　二年七ヶ月

●技藝專修科卒業

族籍	姓名	生年月
山口縣平民勝藏長女	草加キクノ	一四、八
山口縣士族勇雄三女	岡本ミドリ	一七、四
山口縣士族源次三女	杉山イト	一八、一
山口縣平民爲太郎三女	綿田タ子	一八、一
山口縣平民義秀長女	小田ヒデ	一六、八
山口縣平民マツ六女	岡村マツ	一八、一
山口縣平民茂吉長女	平カメ	一四、八
山口縣平民松五郎三女	竹村トミ	一七、一
山口縣士族修三長女	山根キク	一六、一一
山口縣士族次郎長女	石津テイ	一八、三
山口縣平民吉藏長女	中原ナミ	一六、五

平均　十七年五ヶ月

在學年數平均　一年九ヶ月(以上)

○池塘芳草

●一大珍魚　客月十日千葉縣銚子沖に於て、俗

に魚族の大王神兵衛樣と稱する、長五間に餘る一大魚珍を捕獲したる事は、當時の新聞紙上に記載せられしが、右は去し八日より淺草珍世界に陳列し、公衆の觀覽に供する由にて、同魚に對する農商務省技師岸上博士の鑑定書は、次の如しと云ふ。

この插畫は、即ち同魚を寫生したるものにて、



一、口なり巾五尺。
二、鰭あり長五尺。
三、鰭長四尺二寸。
四、胴あり回三間。
五、雄魚生殖器あり。
六、丈あり長五間。

世は實に、千差萬別にして、いと、珍らしき魚もあるものかな。

ヤスリサメ

（鑑定書）

此の大サメは學術上不完全に知られたる魚なり是れ其の出現すること稀なると其の體軀偉大なるを以て偶々此に逢ふも捕獲すること甚だ困難なると又捕獲するも運搬すること容易ならざるを以て其の形體の完全なるものを觀たるものなきによる此の類のサメは曾て南アフリカ喜望峰及北米桑港に於て獲られたること記錄に殘れり然れども學者の手に殘り居るものは只其の顎或は齒のみ也今本邦に於て始めて完全なる此標を見ることを得て從來此の魚に關する智識の不足を補ふに至れるを喜ぶ、予は齒の形狀により此魚に「ヤスリサメ」の新名を附し又學者には皮膚に平滑なる所五條あるにより「五條ヤスリサメ」の意義を有する左の名を命じたり

Rhnodoin. hentalineatus

尙此の魚に關する詳細の事は後日專門學の誌上に公にすべし

明治三十四年七月一日　理學博士　岸上鎌吉

○口繪に就きて

●●●●●●函嶺の溪流　炎帝威を逞しふして、下界蒸が如く、庭前の池水沸騰せんばかりの暑さ、一陣の風なき三伏の日、杖を函嶺幽邃の地に曳き、欝々たる樹陰を吹渡る涼風を味ひつゝ、潺々たる溪流のほとり、水車の音の淋しげにひゞきて、さながら天津乙女が奏づる天樂の如く、淸氣骨に徹して爽かに、身すでに、羽化せしにはあらざるかと疑はる。あはれ松亭子の筆や掬すべく、卷を開けば、坐に函嶺の溪流に逍遙ひて、溪氣津々萬斛の涼風に浴するごとけんかし。

●●題字　豫告の如く、細川翁が特に諸媛のために、筆を染められし揮毫あり。翁名は潤次郎、十洲は其の號、夙に、女子敎育に盡瘁せられ、以て、斯道の木鐸たる茲に年あり。嘗、女子高等師範學校長より華族女學校長に榮轉し、現に熱心と親切とを以て、上流社界の淑女を敎導しつゝ終始厭くなしと云ふ。翁、學博く、識高く、亦書を能くせらる。あはれ、卷頭の題字、天道助順と、これまことに翁がその所信を披瀝せられたるものなれば、諸媛請ふ以て、日々此の心を心としたらんには、庶幾は、過少なからんかし。翁は、今なほ、樞密顧問官にして、又、文書秘書官長をかぬ。正三位勳一等男爵たり。

（超舟漁史）

〇次號豫告

手簡　　山陽之母

物必ず因あり。見ずや賴山陽の文章と精神との據て來る處を、實に此の母ありて此の子あり、今其の書を得たれば、次號を以て、敢て諸媛に呈せんとす。

飛沫紛々　　高橋松亭

時は是八月苦熱の頃、曳を瀑泉の邊に移さんか、白水而下飛沫紛々として人を圍み、寒、冬の如し。嗚呼松亭子の筆、能く斯景を寫し得たるや否や、請ふ次號をまて。

群芳　　女學生

こは、日本女學校生徒のものしたる毛筆畫にして、可憐の筆、花あり、鳥あり、その韻致豐富にして筆力容易にあなどるべからざるものあり。

其の他、例の如く記事豐にして、趣味津々。

女鑑歌文月次兼題

八月五日分

歌　閑居荻

文　暑中見舞の文

右七月廿四日〆切

八月廿日分

歌　曉虫

文　蓮

右八月九日〆切

九月五日分

歌　川霧

文　歸省中の感を記す

右八月二十四日〆切

九月廿日分

歌　月前雁

文　月見に友を招く文

右九月九日〆切

日本女學校夏期講習會規則

一講習科目
　一女禮式
　一作歌
　一毛筆畫
　一割烹

一講習員資格
　一本校在學生
　一高等女學校第一學年以上のもの及び高等小學第二學年終業以上の學力を有するもの

一會期
　七月二十六日より八月十四日まで三週間

一講習料
　一科　金七拾錢
　二科　金壹圓
　三科　金壹圓參拾錢
　四科　金壹圓五拾錢
　但本校在學生徒の講習料は別に之を定む

一入會期限
　七月二十日限

一入會手續
　講習料に左式入會證を添へて差出すべし
　但本校在學生の入會手續は別に之を定む

入會證　（用紙半紙）

族籍職業
現住所、在學校名、役名
氏名
生年月日

一　科
一　科
一　科
一　科

右者御校夏期講習員タルコヲ御許可相成候上ハ在學中御規則確守可爲仕候也

住所
右父兄保證人

年月日　氏名（印）

日本女學校夏期講習會御中

一教授時數
　一女禮式　一週六時
　一作歌　仝　四時
　一毛筆畫　仝　六時
　一割烹　仝　五時

一授業時間
　毎日午前七時半より仝十一時迄但日曜日は休

一講習證
　講習完了の上望の者に授與す

一講師
　一女禮式　松岡刀波子
　一作歌　下田義天類子
　　　　　師岡須賀子
　一毛筆畫　南寬明
　一割烹　石井泰次郎

明治三十四年七月

東京市本鄉區龍岡町卅六番地

日本女學校

三輪田眞佐子著

女子敎育要言　全

三輪田女史の婦人敎育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子敎育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史嚢に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきものゝ標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらるゝかを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技術を練らんかを述べらる蓋し世間女子敎育の論尠からずと雖多く敎育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は敎育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に說き諭されたるを以て獨り敎育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を揭ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子敎育要言目錄

●定價金三十錢
●郵稅金四錢
●郵券代用一割增
但一錢切手に限る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

日本赤十字社篤志看護婦人會講師正五位勳三等足立寛先生著作

育兒談　總振假名付　正價金貳拾參錢　郵稅金四錢

通俗救急處置　總振假名付　正價金貳拾錢　郵稅金四錢

日本赤十字社篤志看護婦人會敎程　總振假名付　正價金參拾五錢　郵稅金六錢

看護學敎程（看護婦敎科書）　正價金壹圓　郵稅金拾錢

日本赤十字社看護人敎科書　正價金六拾五錢　郵稅金八錢

日本赤十字社藏版

富國の策は國民の身體健康を保つより先なるはなし身體の健康は育兒衛生に始まり一家衛生に中にし公衆衛生に終る此理は世人知らざる者なしと雖も之を行ふに法ありて其法を敎ふるの良書世に乏しきが爲め知らず識らずの間に生を害ひ身を危くするもの擧て數ふべからず是啻に個人の不利のみならず抑亦國家の一大不幸といふべし

本書は前の陸軍醫務局長陸軍々醫監足立寛先生、日本赤十字社篤志看護婦人會に講師として會員に講授せられ或は看護人、看護婦の敎科書として著作せられたるを上版せるものにして何人にも容易く衛生の要法を了解するを得べし自ら進みて子を愛し家を重んじ世に務むべき道を衛生上に求めんと欲する者は座右缺くべからざる珍書なり

本書は從來日本赤十字社部內のみに頒たれしが今般汎く希望者に布くことゝなり弊所其取次賣捌を許可せられたれば多少遠近を問はず大方の求めに應ぜんとす請ふ陸續愛讀せられんことを

取次大賣捌所

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

日本赤十字發行所

電話本局千三百七番

明治三十四年七月廿日發行

女鑑

每月二回五日廿日發行
第貳百參拾參號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷部印刷